

名古屋大学社会学研究室七十年誌

目次

第一部 研究室の歩み…………… 1

社会学研究室の二十年…………… 阿閉吉男 3

開講三十周年を迎えて…………… 7

開講四十周年を迎えて…………… 9

開講五十周年を迎えて…………… 13

開講七十周年を迎えて…………… 丹辺宣彦 18

第二部 名大社会学の古典…………… 33

社会学とは何か…………… 本田喜代治 35

大学の本质と意義…………… 本田喜代治 50

二つのウェーバー像

——ヤスパースとリツカート

…………… 阿閉吉男 55

現状分析をすすめるためのいくつかの

基本的視点…………… 北川隆吉 88

卒論と大学のオートノミー

——『卒論必携』へのまえがき

…………… 折原浩 94

第三部 歴代スタッフのメッセージ…………… 97

……………

本田喜代治先生…………… 中田實 99

本田さんと知り合ったころの思い出

…………… 平山高次 102

本ちゃん…………… 阿閉吉男 104

平山高次先生…………… 板倉達文 106

阿閉吉男先生…………… 佐々木光 109

田中清助先生……………	神戸博一	113
開講三十周年の挨拶……………	北川隆吉	116
開講三十周年の挨拶……………	阿閉吉男	122
開講三十周年の挨拶……………	平山高次	125
開講三十周年の挨拶……………	田中清助	127
開講四十周年の挨拶……………	北川隆吉	129
北川隆吉先生の御還暦をお祝いして……………	貝沼浩	133
開講五十周年の挨拶……………	西原和久	136
適正規模できめ細かい研究者養成を……………	折原浩	142
二十一世紀社会学における理論・実証・実践……………	西原和久	147
十六年間に籍した社会学研究室の思い出……………	田中重好	154

在職時代の思い出……………	中田實先生のこと	161
理論研究から地域の実証研究へ……………	黒田由彦	161
——無謀な挑戦の舞台裏……………	丹辺宣彦	164
食と農への社会学的接近……………	立川雅司	170
東日本大震災からエネルギー問題の政策科学へ……………	丸山康司	174
名古屋大学の大学院・教員生活を振り返って……………	河村則行	177
環境学研究科の社会学……………	室井研二	180
着任十二年目の中間報告……………	上村泰裕	184
名古屋大学での十三年を振り返って……………	青木聡子	189

着任三年目でおもうこと

福井康貴

194

歴代スタッフ

197

第四部 卒業生・在学生のメッセージ

199

兵舎で過ごした学生時代

安藤慶一郎

201

あの三年間を回想して

上杉重吉

203

夢多き若い時代をふりかえって

戸谷修

205

私の本田先生

水野香織

207

『社会学研究室月報』のこと

中田實

209

研究室の思い出

倉知彦名

211

なつかしき社会学研究室を

ふりかえって

前田孝敏

213

安保の狭間

青山隆英

215

研究室の自由

渡辺斉

217

七〇年前後

三輪隆裕

219

四十年前の社会学研究室の思い出

大矢裕

221

研究室の谷間の時代

谷真一郎

223

トリス・ゼミのこと

黒田由彦

225

研究室の思い出

渡辺俊子

227

共通一次世代の社研

栗田篤

229

研究室での十四年

魯富子

231

社会調査の記憶をたどって

渡辺浩子

233

一昔前のことなど

高島智世

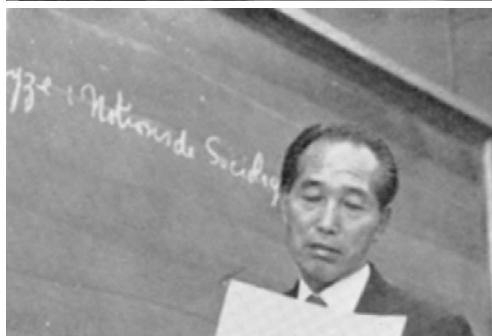
235

研究室の思い出……………	安藤匡宏	237
研究室の思い出……………	林明鮮	240
研究室の思い出……………	伊藤僚啓	242
研究室に関する数少ない記憶 ……………	松谷満	245
呼び名の効用……………	山口博史	247
不老会という集まり ……………	阿部純一郎	249
社会学との出会いに感謝して ……………	岡村徹也	251
社会学講座の思い出……………	甕佳代子	253
田中ゼミの卒業生、十年目の気づき ……………	菊地桃子	255
私が社会学研究室で得たもの ……………	中根多恵	257
十年の思い出……………	王昊凡	259

社研という言葉がもつあの空気 ……………	吉村真衣	261
多くの出会いに恵まれた二年間 ……………	浅井南	263
修士二年間の想い出……………	谷川彩月	265
研究することの楽しさとは ……………	長田祥歩	267
人は個々で動いてはいるが、 皆つながっている……………	王黛茜	269
編集後記……………		271



本田教授・阿閉助教授・高橋助手を囲む一期生と二期生（1952年頃。『五十年小史』）



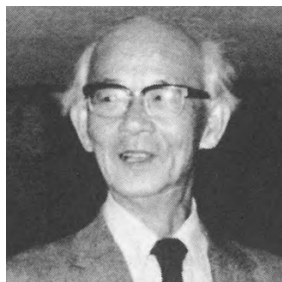
本田喜代治先生



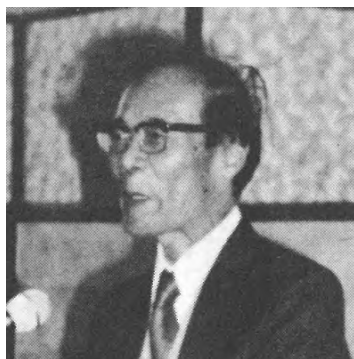
阿開吉男先生



卒業式（1962年3月。『五十年小史』）



平山高次先生



田中清助先生



北川隆吉先生



卒業式（1989年3月25日。渡辺浩子氏提供）



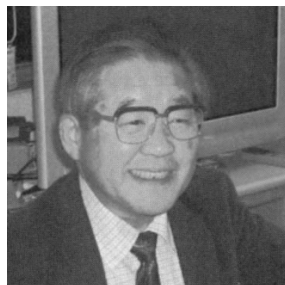
卒業パーティー（1989年3月25日。渡辺浩子氏提供）



中田實先生



折原浩先生



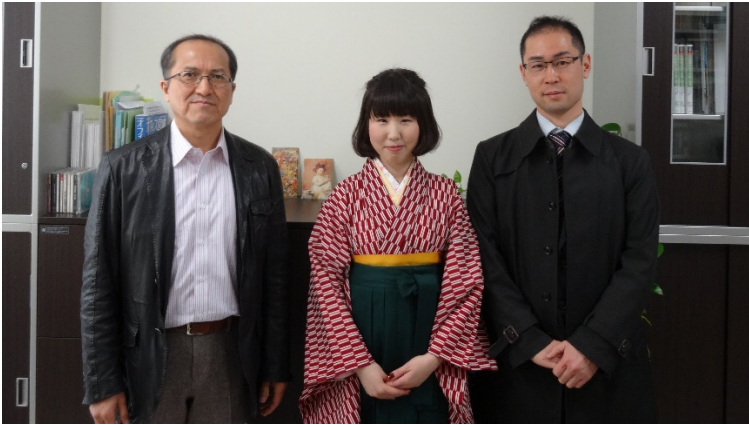
板倉達文先生



西原和久先生



田中重好先生とともに（2014年3月。浅井南氏提供）



黒田由彦先生とともに（2014年3月。浅井南氏提供）



読書室（1980年頃。『三十年小史』）



大学院総合ゼミ（2000年頃。『五十年小史』）



調査実習（2014年。王昊凡氏提供）



30周年（1979年11月3日。『三十年小史』）



40周年（1989年。『四十年小史』）



50周年（1999年4月。『五十年小史』）



60周年（2009年9月23日。上村泰裕提供）



日本社会学会大会（2010年11月7日。上村泰裕提供）



現スタッフ (2019年10月23日)

第一部

研究室の歩み

社会学研究室の二十年

阿閉吉男

昭和二十三年九月一日、文部省令第十七号により名古屋大学文学部が哲学・史学・文学各二講座でもって開設されたときには、社会学講座は哲学科二講座のうちには含まれておらず、それが設置されたのは昭和二十五年四月一日である。しかし、それ以前に、既設の国文学講座の担任教授として立教大学教授本田喜代治が昭和二十四年五月三十日に就任し、実質的には社会学を講じ、社会学概論、社会学特殊講義および社会学講読を担当していた。ただし、すでに入学していた学生が社会学専攻課程に配置されたのは、講座が設置されてからである。講座の設置とともに社会学専攻課程に新入学生がみられるにいたったことは、いうまでもない。

社会学講座の設置にともない、本田は国文学講座担任教授から転じて講座担当教授となり、社会学研究室が開設された。昭和二十五年四月一日、静岡大学助教授阿閉吉男が兼任教授となり、社会学特殊講義および社会学講読を担当し、翌年五月一日、専任助教授となった。昭和二十五年五月三十一日、東京大学経済学部商業学科を卒業した高橋進一が助手に任命された（のち、昭和三十一年六月二十九日、心臓弁膜症により死去）。

開設当初の社会学研究室は、名古屋城内旧六連隊兵舎のうちの二号館の二階にあり、教官室二、読書室一、書庫一から成っていた。教官室のうちには狭隘な下士官室がそのままあてられたもの

もあり、銃架が残っているような始末であった。研究室全体のスペースはかなり広がったけれども、昼なお暗いことが多く、しばしば電燈をつけねばならなかった。校舎の周囲には草むらが多
いせい、講義中藪蚊の襲来に悩まされることもあった。開設当初には書庫はあっても、蔵書と
いえば、旧神宮皇学館大学より移管された和洋書十数冊があるにとどまり、まったくゼロといっ
て差し支えなかった。それに初年度割当図書費も僅少であり、ゼリグマン編『社会科学エンサイ
クロペディア』(一九三〇〜三三)を購入すれば万事休するという有様であった。現時の研究室所
蔵の洋書約三五〇〇冊、和書約一五〇〇冊とくらべてみれば、まことに今昔の感にたえないもの
がある。

その後、昭和三十二年に研究室は一号館二階に移り、教官室三、読書室二、書庫一というふう
に、スペースはいっそう広くなったものの、校舎の荒廢の度はおおうべくもなかった。昭和三十
四年九月東海地方を襲った伊勢湾台風のさいさしたる被害をこうむらなかつたのも、不思議なく
らいであった。

講座設置いらい、本田教授は社会学概論、社会学特殊講義および社会学講読(社会学演習を兼
ねる)を担当し、昭和三十五年三月三十一日に定年退官するまでの間、社会学特殊講義の題目と
しては社会思想史関係のものが選ばれ、フランス社会主義研究、ファシズムや民族意識の研究、
史的唯物論研究などに及び、社会学講読ではフランス語のものがテキストに使用された。本田教
授は、その間、昭和二十八年十一月九日から昭和三十年十月三十一日まで文学部長をも勤めた。

阿閉助教は社会学特殊講義および社会学講読を担当し、前者の題目としては主に社会学史が選ばれて、欧米の社会学理論の研究がおこなわれ、後者のテキストとしては主としてドイツ語のものが使用された。本田教授も阿閉助教も、その専門領域が理論社会学に属しているために、それを補ううえで経験社会学の分野から学外非常勤講師一名ないし二名を毎年委嘱することになり、昭和二十六年いらい実施された。

すでに昭和二十四年五月の学制改革により名古屋大学は新制大学となっていたが、旧制と新制とは併設されていた。昭和二十七年三月には旧制第一回卒業生を送り出し、翌年三月に旧制第二回卒業生と新制第一回卒業生とが同時に出るから以後、旧制学生は打ち切られ、新制学生のみとなった。同年四月一日、新制大学院文学研究科が発足すると同時に、社会学専攻課程（修士・博士）が開設された。開設時における社会学・社会思想史関係の担当教官は、つぎのとおりである。教授・本田喜代治、助教・阿閉吉男、併任教授・平山高次（教養部）。

高橋助手が死去したあと、昭和三十二年四月一日、岐阜県立恵南高等学校教諭安藤慶一郎が助手に任命された。安藤助手は、昭和四十一年三月三十一日愛知女子大学助教となって転出するまで、九年間在職した。その間、本田教授は定年退官し、昭和三十五年四月一日、阿閉助教が教授に昇任した。同日、名古屋大学専任講師田中清助（教養部）が学内非常勤講師に委嘱され、翌年五月十六日、専任助教となり、大学院担当をも兼ねることになった。田中助教は社会学特殊講義および社会学講読を担当し、前者では労働社会学が扱われ、後者では主としてフランス

語のテキストが使用された。昭和三十九年度からは名古屋大学助教授佐々木光（教養部）が学内非常勤講師に委嘱された。安藤助手の転出後、昭和四十一年四月一日、東京大学大学院社会学研究科（修士）を修了した佐野勝隆が助手に任命された。

昭和三十七年一月、文学部が東山の新校舎に移転した。社会学研究室は一階東側に位し、教官室三、大学院学生室一、読書室一、資料室一から成っている。現に学部生十九名、大学院学生七名（修士六、博士一）が在学している。

昭和二十七年三月旧制第一回卒業生八名を出していらい、現在までに学部卒業生一六二名、大学院修士課程修了者十四名に及んでいる。東海地方の各界で活躍している者が多い。

（出典：『名古屋大学文学部二十年の歩み』一九六八年）

開講三十周年を迎えて

阿閉教授、田中助教授、佐野勝隆助手、および佐野助手にかわった板倉達文助手、さらに神戸博一助手によって発展をつづけた名大社会学研究室は、一九七九年をもって開講三十周年をむかえた。

しかしこの間、田中助教授の大阪大学人間科学部教授への転出、阿閉教授の定年退官、板倉助手の法政大学社会学部助教授への転出によって、一九七七年にいたって、田中教授が併任教授として指導にあたられたとはいえ、実際的には、神戸助手のみによって、研究室が守られるという状態に遭遇した。

文学部教授会、とくに哲学科の諸先生の御努力により、北川隆吉教授を一九七八年十月にむかえ、一九七九年には佐野勝隆助教授を教養部から配置替えすることによって、新たな陣容で、社会学研究室は運営されることとなった。加えて、教養部から佐々木光教授、中田實教授が、学部および大学院で講義を担当することとなり、学外非常勤講師も、年間三名を依頼して、研究、教育活動の充実がはかられた。また、一九八〇年には、名大社会学出身の貝沼洵専任講師を教養部にむかえ、ますます隆盛にむかうこととなった。

社会学科をめざす学生は、一講座にもかかわらず、一九七九年には一五名にのぼり、大学院の十名の院生を加えて、五十名のスタッフ、学生が研究室に結集して、文学部内でもその活気のポイント

で、一、二と目されるまでに成長した。そして、これまでは、ほとんど行なわれなかつた社会調査、実証研究の途もひらかれ、その成果が刊行されようとしている。スタッフおよび院生による研究誌「名大社会学論集」が刊行されることもなった。

一方、一九七八年十二月を第一回に、名大を中心に東海地区の社会学者の研究会がもたれ、一九七九年七月、約六十名の専門研究者およびジャーナリスト、地方自治体に勤務する社会学出身などが集まって、「東海社会学研究会」が発足することとなった。

(出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年)

開講四十周年を迎えて

開講三十周年を節目にして、研究室は、新たな陣容のもとで隆盛に向かうこととなった。社会学を目指す学生は、一講座にもかかわらず、一九七九年には十五名にのぼり、大学院十名の院生を加えて、五十名のスタッフ・学生が研究室に集まり、文学部内でもその活気の点で、一、二と目されるまで成長した。一九八〇年には、スタッフおよび大学院生による研究誌『名古屋大学社会学論集』第一号が発刊された。以後、毎年欠かさず刊行され、一九九〇年で十一号を数えるまでになり、多くの若い研究者を育てる上で大きな役割を果たしてきている。また、これまでは、ほとんど行われなかった社会調査、実証的研究の途も開かれた。一九七八年から、毎年少なくとも一つ、研究室全体として取り組む社会調査が実施され、一九九〇年の現在まで十九の調査が行われ、単行本や調査報告書・論文などにその成果がそれぞれ公表されている。全てを網羅することとは紙面の関係で出来ないが、その主な調査地を挙げるならば、愛知県尾張旭市、同名古屋市、同豊田市、同矢作川流域山村（上矢作村、平谷村、豊根村など）、岐阜県可児市、同大垣市、同多治見市、同土岐市、同笠原町、同瑞浪市などである。これらの社会調査は、教養部の教官の協力も得て、四期生から学部学生、大学院生のほぼ全員が参加し、現地で合宿しながら調査にあたるもので、調査実習としても、研究室のまとまりの上からいっても大きな効果をあげてきている。これらの調査の蓄積を集大成することが期待される。

他方、一九七九年七月に発足した「東海社会学研究会」は、その後ほぼ年に一回の総会と二、三回の例会の活動を続け、東海地区の近隣大学における社会学関係学部・学科の拡充にともなう研究者増の中で、地区学会に発展していくことが求められるに至っている。

ところで、研究室四十年の歴史の中でも特筆すべき変化が、研究室に生じた。一九八七年四月、「比較社会学講座」の新設（教官純増は一名）が認められ、研究室は従来からの「社会学講座」と合わせて二講座（実験講座）体制となった。これに伴い、北川教授は比較社会学講座を担当することとなり、同講座の講師には、東京大学文学部社会学研究室の松本康助手が、一九八七年四月一日に任命された。しかし、社会学講座を担当するはずであった佐野勝隆助教授が同年一月に急死したので、一九八七年十二月、教養部から貝沼洵助教授が配置替えとなり、研究室の新しい陣容が整った。松本講師は文部省若手研究者特別海外研修制度により、一九八八年九月から翌年七月まで、アメリカ合衆国シカゴ大学に留学したが、社会学特殊講義と社会学講義を担任し、主としてアメリカのシカゴ学派の都市研究と都市社会学を講じ、講義のテキストもその関係の英語文献を使用している。こうした学風は、これまでの研究室には無かったもので注目される。貝沼助教授は、同じく社会学特殊講義と社会学講義を担任し、主として欧米のネオ・マルクス主義者の「後期資本主義社会論」を講義で扱い、講義では、同種の英語文献をテキストに使用している。学内非常勤講師の顔触れも一新した。教養部の中田教授に加えて、病氣療養中の佐々木教授に代わって、一九八〇年から貝沼講師（当時）。貝沼が文学部に配置替えになった後は、板倉達文助

教授（一九八八年四月一日、滋賀大学より教養部に転任）。それに、一九八七年四月一日、神戸大学文学部社会学研究室助手から教養部講師に任命された藤井勝講師にそれぞれ委嘱されている。また、大学院担当教官の陣容も、北川教授、貝沼助教授（一九八七年一月までは佐野助教授）、松本講師に加えて、教養部教官の緊密な協力体制のもとで、中田教授、板倉助教授（一九八九年四月より）、藤井講師（一九九〇年四月より）となっている。

こうして、一九八九年には、教官研究室四、読書室一、大学院生室二、（他研究室の院生との共用も含む）資料室一のスペースに、教官四、学生二学年合計三二名、大学院生十一名、事務補助員一名の文学部でも一二を争う大世帯が、日夜、研究・勉学に勤しんでいる。社会学を志望する学生は一学年中二十名を下らず、一九八八年から面接による選考を開始せざるを得なくなっている。振り返ってみれば、この四十年間で、四〇〇名以上の卒業生を社会の各分野に送り出した。また、社会学研究者に限ってみても約二十名を育てて来たことになる。また、近年の動向として、外国人留学生の増加が顕著であるが、社会学研究室にも、一〜二年前までは、四〜五名の大学院を目指す留學生が学部研究生として所属していた。現在では、その中から大学院前期課程（修士）に一名、後期課程（博士）に一名の留學生が進学して奮闘している。一九九一年も外国人留學生の受入れが見込まれている。学部学生たちの中からもアメリカなどの外国の大学に留學する者が出てきており、外国人研究者の来訪の増加も含めて、こうした国際的研究交流の進展は、研究室の歴史に新しい一ページを加えつつあるといつてよい。

このような研究室のいっそう多方面で多様化した諸活動を緑の下で支えて来たのは、助手層であった。神戸助手に続いて、米田頼司助手（一九八一年四月一日より一九八四年三月三十一日まで在職、和歌山大学文学部助教授に転出）、黒田由彦助手（一九八四年四月一日より一九八七年三月三十一日まで在職、梶山女学園大学人間関係学部講師に転出）、そして、米田公則助手（一九八七年四月一日より現在在職中）が続いた。彼らの激務を少しでも緩和するため一九八一年より、事務補助員を一名採用している。研究活動のシステム化、効率化をはかるためにパソコンが、一九八三年より導入され、今では研究室の諸活動を支援する不可欠の装置となっている。研究室に充満しつつある膨大な蔵書に対し、一九九〇年より集密書架を読書室に設置することとなった。四十年前と比べると隔世の感を禁じえない。

一九八九年、名古屋大学社会学研究室は開講四十周年を迎えたわけであるが、一九七九〜八九年は、それ以前の三十年間に恥じない、むしろ、三十年の研究史の歴史をふまえて、よりいっそう発展させた十年間であったと言える。

（出典：『名古屋大学社会学研究室四十年小史』一九九〇年）

開講五十周年を迎えて

開講四十周年から五十周年までの十年の歳月は、研究室にとって大きな変動期であり、社会状況と大学をめぐる状況の変化とともに将来を模索する時期であったといえよう。

この間に研究室では多くのスタッフの交代が行われた。一九七八年十月の着任以来、十三年以上にわたって主任教授として研究室運営に当たり、東海圏の地域研究を数多く残した北川隆吉教授が、一九九二年三月に停年退官を迎えた。しかし、文学部の内規により二年間は新しい教授を迎えることはできず、主任教授不在のまま、当時の研究室は貝沼洵助教授、松本康助教授、河村則行助手の三人体制で運営されることになった。

一方、一九九三年に旧教養部が廃止され、新たに情報文化学部が創設された。すでにこの学部の大学院として、人間情報学研究科が一九九二年に設置されていた。

こうした変化を受けて、一九九四年から貝沼は、情報文化学部の教授となり、当研究室の教授を併任することとなった。次に、東京大学文学部社会学研究室の助手だった丹辺宣彦が、新たに講師に任命された。現代社会の階層現象と社会科学方法論を専攻とする丹辺講師は、社会学特殊研究と社会学講読、社会学演習などを担当し、社会階層論と産業社会学に関するテーマを題目としている。

その後、一九九六年に貝沼教授は当研究室との併任が解かれ、情報文化学部専任となった。同

年、東京大学教養学部より、折原浩が当研究室の主任教授として着任した。折原教授はマックス・ヴェーバー研究の第一人者であり、当研究室では社会学特殊研究や社会学演習、社会学講読などを担当し、マックス・ヴェーバー比較宗教学社会学研究など学説・理論を中心とした講義がおこなわれ、講読では主に独文と仏文のテキストが使用された。大学院では、総合演習を導入し、研究交流の新たな場を設定している。折原教授は、一九九九年三月に停年退官を迎えるまで、三年という短い期間ではあるが、研究教育の活性化を図り、研究室の運営に当たったのである。

一九九九年、研究室は再び大幅なスタッフの交代という転換点を迎えることになった。折原教授の退官と同時に、一九八七年四月に赴任以来、十二年間研究室に在任した松本助教授が東京都立大学大学院都市科学研究科へ転任した。松本助教授は社会学特殊研究、社会学講読、社会学概論などを担当し、主な題目は都市社会学と社会調査、都市社会学英文講読などがあげられる。近年は、名古屋都市圏を対象とした社会調査実習を担当し、その成果は調査報告書の形でまとめられている。

両教官の退官・転任にともない、新たに二人の教官が相次いで赴任することとなった。一九九九年四月から東京都立大学人文学部助手の田渕六郎が講師に任命される。田渕講師の専門は家族社会学であり、福祉やジェンダーの領域まで幅広く研究している。授業では、関連科目に加え、社会調査法を担当している。また、同年九月から、武蔵大学社会学部より西原和久を主任教授として迎えた。西原教授の専門はアルフレート・シュッツ研究など、現象学的社会学を中心とした、

社会学理論研究と社会学説史研究である。授業では、理論・学説史を中心に、社会学演習、社会学特殊研究、社会学講読などを担当している。さらに一名、地域・都市研究を担当する教官の赴任を予定しており、教官数は助手を含め（助手ポストは文学研究科の共通ポスト）五名と、過去最大の規模に達する見込みである。

このように、この十年間で大幅なスタッフの交代を経た研究室であるが、二〇〇〇年四月には文学研究科の大学院重点化の実現とともに、伝統を受け継ぎつつ、新しい陣容を整えて、二十一世紀に向けて、新たなスタート地点に立つことになったのである。

つぎに、研究室の学内非常勤講師についてみると、情報文化学部と人間情報学研究科の社会学関係のスタッフが挙げられる。すなわち、情報文化学部との間では、中田實教授を始め、貝沼教授、黒田由彦助教授、河村助教授、および人間情報学研究科の板倉達文教授の協力を得て、大学院の講義等を通じた相互交流が継続してきた。このうち、中田教授からは、長年にわたり研究室運営への協力と学生指導を受けていたが、一九九七年三月に同教授は停年退官を迎えている。

加えて、研究室の大きな変化として、旧教養部の廃止に伴い、一九九四年から二年生が研究室に所属するように改められた。その結果、研究室は大学院生を含めて総勢六十名を超える大所帯となった。また、大学院重点化への方策として、一九九二年より博士前期課程の大学院入学試験が年二回行われるようになった。一九九九年から文学研究科では社会人特別選抜が行われ、社会人の大学院生が研究室のメンバーとして加わり、二〇〇〇年四月現在、博士前期課程で二名、後

期課程で一名が在籍している。外国人留学生については、一九八〇年代に比べると、やや減少の傾向をみせている。近年の特徴としては、研究生を経て大学院へ入学する留学生より、学部在籍する留学生が増えたことが挙げられる。二〇〇〇年四月現在、学部で一名、大学院で二名の留学生（以上中国出身）、研究生として一名（米国出身）が勉強・研究に励んでいる。三年次編入の学生も加わり、研究室構成メンバーの多様化はいっそう進みつつある。なお、二〇〇〇年四月現在で、研究生を除く大学院生の数は、博士前期課程五名、後期課程十名となっている。

研究室の研究活動についてみると、一九八〇年に第一号が発行された『名古屋大学社会学論集』は、一九九九年で第二十号の発行に至った。巻を重ねつつ、大学院生と研究職に就いている大学院修了生の研究発表の場として機能してきたと言えよう。先にふれたように、九八年からは大学院授業科目に社会学総合演習が導入され、参加者に研究報告の機会を設けるとともに、博士後期課程在籍者の論文報告や学会報告準備の場としても機能している。また、一九九四年六月、第十二回日本都市社会学会大会が開催されるなど、学会開催への協力も行っている。研究室メンバーが関わっている研究会の数も多数に上り、今後の展開が期待される。

他方、研究室のハード面に注目すると、一九九一年に研究室のパソコンが大型計算機とつながり、研究室ホームページの開設など、情報化の流れはその後も加速している。研究室のパソコンの数は飛躍的に増加し、一九九九年現在、計十九台である。うち八台はノートパソコンであり、社会調査の実習、就職活動や論文資料の検索など有効に使われている。また、増大しつつあった

図書・雑誌の中央図書館への移管作業も行われるなど、研究・教育環境の改善が急速に進んでいる。

この十年間、三人の助手が慌ただししい状況のもとで研究室の諸活動を支えてきた。すなわち、河村則行助手（一九九一年四月～一九九四年三月、名古屋大学情報文化学部へ転任）、山崎仁朗助手（一九九四年四月～一九九七年三月、岐阜大学地域科学部へ転任）、一年間の助手不在期間を経て、一九九八年四月に魯富子助手が就任し現在に至っている。

一九九九年、社会学研究室は開講五十周年を迎えたわけであるが、その間、約五百五十名の学部生、百名を超える大学院生を社会へ送り出してきた。現在、新研究科への改組の動きも進みつつあり、実現すれば、学内の社会学スタッフがまとまって新しい社会学講座に編成されることになる。内外ともに、社会学研究室をめぐる状況は厳しく予断を許さないが、半世紀という歴史を節目にして、情報文化学部・人間情報学研究科のスタッフとともに、新しい世紀の次の十年にむけて、さらなる飛躍が期待される。

（出典：『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年）

開講七十周年を迎えて

丹辺宣彦

五十周年以降の二十年間を振り返ると、研究室のありかたは大きく変化したが、その要因には大きくふたつの出来事があり、背景には全学的な改革があった。二十年すべてをカバーすることはできないので、大学院環境学研究科が設立され、現在の社会学講座のスタッフたちが一つの組織に結集することになった経緯から筆を起こし、その後、東海社会学会が設立された経緯について述べていきたい。過去の卒業生・修了生の方に、大きく様変わりした現在の研究室のありようを理解してもらうにはそれが一番よいやりかただと思われる。

時代は一九九〇年代末にさかのぼる。環境学研究科設立直前の社会学研究室は文学部発足当時から研究室で、定員上は不完全二講座四名の体制をとっていた。筆者は一九九四年に新米の講師として赴任し、九十七年に助教となったばかりであった。講座は理論・学説史研究、地域研究の伝統を有していたが、スタッフの継承関係があまりうまく行っておらず、今から振り返れば（当時在籍されていた方たちには大変申し訳ないが）、教育研究に責任をもち、実を上げる体制が十分に組めていたとはいえないが、地域の研究拠点としての力もひじょうに弱かった。たとえば文学部で研究会を企画して参加を呼びかけてもほとんど人が来ない状況であった。今は亡き山崎仁朗助手と、本山の安酒場で酒を酌み交わしながら、「ウチの研究室はなんかうまく行っていな

いよね」と愚痴をこぼしあつた晩をなぜか鮮明におぼえている。一九九九年当時も、頼みの折原浩教授が退官され、これからの大黒柱と囑望されていた松本康助教授が急遽東京都立大学に転出したため、スタッフは助教授の丹辺と田渕六郎講師のみになつていたのである。新研究科設立の話は「寝耳に水」に近いものであつた。総長の諮問機関であつた「名古屋大学の将来を語る会」に出つていた同僚から、文部科学省の方針に名乗りをあげるかたちで、環境問題に関わる文理連携型の独立研究科をつくろうという動きがあることが、六月の教授会で報告された。文系の研究組織は各部署に分散していて研究教育上不効率を招いている、また人文社会科学系の研究者が環境問題の教育研究に応えていけるのかが問われているとのことであつた。その対象として、地理学・社会学の教員が想定されているとの説明があり、これは他人事ではないなという感想を持つた。ただし、当時社会学研究室は助教授と講師の二名だけで欠員となつた教授の人事を急いで進めている最中で、この件に対応している時間的・心理的余裕はなかつた。その後、情報文化学部の社会学スタッフとも情報交換をしたが、その段階ではまだ新研究科に移る意思はないとのことであつた。

西原和久教授が赴任され、五十周年の記念行事を迎えたのはその秋のことであつた。筆者が司会の挨拶で「研究室は中部の研究拠点として発展してきました」と述べたのに対して、閉会後にある年配のOB研究者から「全然そうならないじゃないか」と詰問されたのを憶えている。その指摘は的外れではなかつたし、実際にそのような「体たらく」であつたわけだ。手元のファ

イルで次に研究科関連の記録が残っているのは翌二〇〇〇年の正月に、文学研究科将来構想委員長から委員会への出席を要請するメールが届いたときのものである。暮れの二十八日の全学特別委員会で新研究科構想案が出され、情報文化学部から地理学・社会学の教員は移ることになっているので、一月十二日の将来構想委員会に出席してほしい、とのメールであった。委員会当日に出された資料では、すでに現在の環境学研究科の骨格がメモのかたちで出されており、二十〇六名と見積もられた文系領域に文学部からも一部が出ることになっていた。この時点では、環境社会学を専攻するスタッフは一人もおらず、まだ従来の枠内では研究室の体制を充実させることを考えていたため、委員会では、①研究科の設立に反対ではない、しかし、②現スタッフの専門と適合せず、③「社会学」の講座名を失いたくない、として、参加する予定はないと方針を表明した。

その後文学部内では、将来構想委員会、教授会などで、新研究科への対応について一週間刻みでめまぐるしく話し合いが繰り返されることになる。上記メモの作成者は文学部出身の副総長であったし、文学研究科長も教授会で「遠からず大きな方向性をうちださざるをえない」と発言していたことから考えて、すでに新研究科設立に協力する方向で執行部が動いていたことは明らかである。上記「将来を語る会」のメンバーに話を聞きに行ったところ、社会学が文学部に残留する場合は「ポストが減ることになる」と脅迫めいたことを言われたことも忘れられない。二月三日付の「情報文化学部・人間情報学研究科第三領域WG」による「社会環境学専攻構想」では、

文学部スタッフの専門分野を取り入れたかたちで新社会学講座の見取り図が書かれており、統合を前提として話が進んでいたことがわかる。二月半ばになると、すでに参加を決めていた情報文学部側スタッフ（板倉達文教授、貝沼洵教授、黒田由彦助教授、河村則行助教授）と情報を交換し、文学研究科の再編案が平行して出され、内外からの働きかけと研究室内での話し合いが続き、落ち着かない日々が続いた。二月十六日の将来構想委員会時のメモをみると、「今の段階では意思決定はできない」が、「研究環境が保証されれば参加を考慮する」旨記されており、スタンスは明らかに前向きに変化している。二月十七日には正式に第三領域構想WGメンバーと文学研究科内で会い、説明を受けている。そうしたなかで、連携を図るヨコ型の研究だけでなく、既存分野のタテ型の研究も尊重する方針、同一の専門分野のスタッフを集約することのメリット、「社会学」「地理学」の講座名が残る可能性があること、などが明らかにになり、当初抱いていた懸念は少しずつ払拭されていった。

二月二十三日の文学部教授会は大荒れの展開になった。二〇〇一年度概算要求に新研究科の設置要求を出すことになり、文部科学省への事前説明を間近に控えていたため、議題でこの件が審議されたが、決着がつかず、午後一時に始まった教授会はなんと十時まで続いたのである。社会学、地理学それぞれの講座の考えかたと現状が表明された後、文学部としての方針をどうすべきかが審議されたが、さまざまな講座から賛成と反対（引き留めてくれる方もいたわけである）両方の意見が出され、最後まで決着がつかなかった。社会学講座からは、展開が速く対応に苦慮し

ているが、新研究科に参加することを視野に入れていた旨表明した。

結局、翌二十四日に再び臨時教授会が開かれ、心理学講座をふくめた三講座の意向を尊重するかどうかを投票にかけた結果、「可」票二十三、「否」票十、白票一で承認されることになった。研究室内には意見の違いもあったが、新研究科に参加する場合、残留する場合のメリット、デメリットをすべて書き出して検討した結果、参加するメリットのほうが上回る見込みとなり、最終的には参加する方向で合意していった。新研究科の「設立準備委員会」に文学部スタッフが参加したのは、臨時教授会の翌日、二月二十五日の第三回設立準備委員会が最初であった。文学部内の手続きは、二月二十二日の教授会で、社会学、地理学に加え、間際で手を挙げた心理学を加え、三講座が新研究科に移ることが承認されて正式決定となった。

三月末以降以降はカリキュラムの検討が始まり、二〇〇〇年度に入ると発足時の大学院カリキュラムの原型が固まってきた。環境社会学の専門家はまだいなかったため、特別講義で講師を招く方式がとられることになる。設立準備のための話し合いを重ねるうちに、それまで——信じがたいかもしれないが——交流がほとんどなかった情文スタッフと文学部スタッフにも少しずつ話し合いのチャンネルができ、信頼感が少しずつ醸成されてきた。今振り返ってみると、信頼関係の構築には、板倉達文教授が頻繁に主宰しておこなわれた「飲コミュニケーション」も寄与するところが大きかったように思う。施設関係では新研究科旨の建設を視野に入れて、移管面積の調査が始まった。当初は研究科全体で二万平米超の要求をするという景気の良い話も出て、狭隘さ

に苦しんできた社会学スタッフの期待も高まったが、結局認められたのは現在の環境総合館の建設だけだった。文学部スタッフは元部局にとどまることになり、ようやく現在いる情報文化学部棟の三・四階で情報文化学部スタッフと一緒に落ち着いたのは二〇〇九年四月になってからのことであった。

新しい社会学講座は、それまでのポストを合わせた教員数、すなわち助手一名を入れて九名で発足し、現在までその定員は変わっていない。大学院の講座としては一体となり、学部については文学部、情報文化学部（のちに改組されて情報学部）に分かれて教育を担当するかたちになっている。分野的には、環境学研究に対応することが急務となったため、地域社会学に関連して防災・災害情報を専攻していた田中重好教授を文学部側で迎えたのを皮切りに、二〇〇六年には環境社会学・社会運動論を専攻する青木聡子講師（当時）、二〇一〇年には獣害問題、自然エネルギー問題、科学技術論を専攻する丸山康司准教授（当時）が赴任し、しだいに陣容が整ってきた。この間に、名古屋大学社会学の発展に長年貢献してこられた板倉達文教授、貝沼洵教授が退官され、田渕六郎准教授が上智大学に転出されたのは痛手であったが、二〇〇八年には福祉社会学・比較社会政策論を専攻する上村泰裕准教授を迎え、既存スタッフとあわせて広く東アジア地域を視野に入れた研究体制を整えることができた。このようなスタッフたちが共同で担当する大学院科目ができ、講座会議を共同で開催するようになり、人事や学位、入試、会計などの業務を一緒に行うようになったのは大きな変化だったが、変わらない面も多かった。文系では業務に占める

学部教育の比重が大きく、研究室の位置も元部局にあったため、二〇〇九年の移転統合までは長い移行期間がそのまま続いているようなものだった。それでも、院生全員が研究報告をおこない教員も全員出席する「総合セミナー」科目と、それを受けるかたちで博士後期課程三年生以上が報告をする「博士論文セミナー」（正規の科目ではない）は、学位取得に向けた里程標として役立つ、教員間の交流と院生の競争を促すようになった。研究科設立とほぼ同時に発足した「名古屋大学社会学会」は、院生の業績づくりを側面からサポートすることを企図して西原教授が主導され、年次大会とニュースレターの発行を開始した。他方大講座制へ移行したことにより、各教員の自律性が高まり、ゼミ制度による教育が強化されたことも付け加えておくべきだろう。二〇〇三年に社会調査士制度が発足すると、学部・大学院には「社会調査士」「専門社会調査士」が取得できるよう、カリキュラムに対応科目が指定・導入され、実証研究の活性化を促した。

社会学のユニットが統合され、スタッフの人事を戦略的に配置するようになったことでは、当初意図しなかった副産物をもたらした。一つは、大学院受験者の増加と留学生——とくに中国からの——の増加である。統合前は年に平均五〜六名前後だった大学院博士前期課程（修士課程に相当）の受験者は統合後ほぼ倍増した。地域・都市研究や環境研究、中国との交流が盛んだから受験したとする志望動機も時折聞かれるようになった。

統合に伴い研究科内外との交流・共同研究の機会も増加した。西原教授が交流を始めた中国・南京大学との関係は同大学に就職した田中ゼミ出身の朱安新副教授が仲立ちとなり十五年あま

りになるし、同様にOBが仲介するかたちで吉林大学、山東工商学院、中国科学院、台湾輔仁大学との交流も息の長いものに育ってきている。また二〇〇四年の北部スマトラ地震発災後、専攻・講座をまたぐかたちで継続しておこなわれた調査には、田中教授と二〇一三年に着任した室井研二准教授が参加し、ガジヤマダ大学、シアクラ大学との交流に発展した。この調査プロジェクトは、一連の報告書の刊行と、『超巨大地震がやってきた』ほかの著作に結実し、研究科の文理連携が生み出した研究の筆頭に位置するものとなった。

東海社会学会は、東海地域の多くの有力大学が力を合わせることで設立されたわけだが、事務局はずっと名古屋大学に置いて活動を支えてきており、そのコストは環境学研究科に社会学スタッフが集めることなくしては負担できなかったかもしれない。伝え聞くとところによると、四半世紀前にある研究会をもとに学会を設立しようとする試みは、名古屋大学がリーダーシップを發揮しようとして失敗したという経緯があり、そのトラウマから長きにわたって地域の社会学会は存在しなかったということであった。またそのことが、地域の社会学の停滞を招き、有為な研究者が育っても刺激のある東京、関西に転出してしまおうという悪循環をもたらしていた。こうした状況をなんとかしたいという機運が生まれたのは、新講座の運営が軌道に乗った時期と一致する。表には立たなかったものの、一貫して地域の学会を設立すべきだと主張して動いていたのが田中教授だったと記憶している。名古屋大学社会学会を講座内で立ち上げていたにもかかわらず、二〇〇六年ごろから東海地域の学会を設立してはどうかということになったものの、名古屋大学だ

けで動いては前回の轍を踏んでしまう。そこで相談をもちかけたのが、調査実習の合同報告会を数年来いっしょに行なっていた名古屋市立大学の藤田栄史教授（のちの初代会長）であった。前回失敗の経緯をよく知り、最初は逡巡していた藤田教授も「ではやってみましょうか」と同意され、学会設立、その後には逡巡するまで中心的な役割をはたしてくれることになる。名古屋大学社会学会については、東海社会学会が設立されてからも学内の学会として存続していくことになる。その後メールで呼びかけて、インフォーマルな「新学会設立予備会合」を開き、若手・中堅の研究者十余人が集まったのが二〇〇七年正月明け、一月十五日のことであった。そこで配布したメモには、呼びかけのメールに対するレスポンスとして以下のような意見が記載されている。

この間に出たスタンス・意見

- ・ 総論賛成、しかし負担が重い。何のメリットがあるのか。
- ・ 交流がないのはたしか。
- ・ 他の学会で充足している。おなじことをするなら無意味。
- ・ 大学院博士課程をもたず、院生を育てる状況にない。
- ・ 会費を安く。

他方、「なにができるか？」という項目には上記のレスポンスを受け、以下のように書かれてい

る。

- ・年報の刊行。
- ・費用を抑えるため会報はメールで配信。
- ・定例研究会の開催、地域に根ざした固有の研究テーマの設定。
- ・修士課程院生（学部生）の成果発表の場、表彰など。
- ・各大学のイベント企画や求人などの情報を伝達する場。

懐疑的な声が少なからず出たにもかかわらず、設立について前向きに進めることがおおむね合意され、正式に「設立準備会」を発足させることとなった。多くの社会学研究者に呼びかけ、四月七日に第一回の準備会が開催された。多くの研究者に呼びかけたにもかかわらず設立準備会の参加者は十三名（青木聡子、飯島伸彦、勝又正直、川北稔、河村則行、黒田由彦、田中重好、土屋葉、中筋由紀子、丹辺宣彦、浜本篤史、藤田栄史、山口博史）であった。ここでは議事として、①理念・会則・学会の名称、②暫定的な幹事役の委嘱、WGの設置と役割分担、事務局の設置、③設立に向けたスケジュール、④参加呼びかけやメンバーのリクルートの方法、などが話し合われている。

六月十六日に開かれた第二回の設立準備会（愛知大学車道校舎で開催）の議事録をみると予備WGの検討結果として「今回の企画は他学会とは異なるところをねらいとしていておおむね現実

的」と評価され、学会の「理念・特色」について「社会・市民に開かれた学会、東海地域における大学間の交流の場としての学会」とする、「隣接分野を含む学際的な学会」とする、という設立趣意書にうたわれた方針が打ち出されている。「事務局（名古屋大学）、組織運営WG、研究・企画WGを設置する」とされて、メンバーの分担が決まり、設立から現在に至る三委員会体制の基礎が固まっている。活動についても十月に「合同シンポジウム」と「調査実習合同報告会」を開催することが決まり、この段階で学会の体制の枠組みがほぼ固まったと言える。

第三回の設立準備会では、各WGからの報告があり、「若者の生きがい *ikyu in Nagoya*」（仮）というテーマでシンポジウムをおこなうこと、講演依頼・ポスター作成、年報を次年度の大会までに刊行すること、修士論文の掲載を重視すること、会員規定・理事選出法、設立趣意書の文案などが検討され、学会としての体制が整い活動が始動していたことがわかる。その後協力の輪は少しずつ広がってゆき、地域の有力大学が理事を出し、いわば「連合体」として学会を支えていく体制が固まった。設立準備シンポジウムと、調査実習合同発表会を名古屋大学で無事開催することができ、二〇〇九年の設立大会の時には百十名の会員数で発足することができた。この間の事務局の活動と体制整備には、当時の渡辺克典助教の事務能力が寄与するところが大きかった。

設立後の学会の発展は比較的順調で会員数は増え続け、二〇一五年には日本学術会議協力学術研究団体として登録され、二〇一九年には日本社会学会の法人化にともない理事・代議員の選出地区として「中京」（＝東海）が初めて設定されることになった。設立以降の学会の歴史は研究室

史の範囲を逸脱するので省略する。年報十一号「東海社会学の十年」特集で各分野の研究動向を振り返ったところ、停滞しているところかむしろ先進的な社会学研究が数多く展開されてきたことに感銘を受けた。歴代の会長はずっと名古屋大学以外の大学から選出されてきた。二〇〇〇年代初頭の名古屋大学の研究力と存在感はお世辞にも目立ったものとは言えなかったから、東海地域に若く活力をもった学会が設立されたのは奇跡に近く、やはり周辺の有能な研究者たちが積極的に協力してくれたことが成功の最大の要因だろう。気のせいではないと思うが、近年は有能な若手研究者の地域への定着がよくなっているようである。他大学の設立メンバーが「皆でつくった学会だから愛着がある」と語っているのを聞き、心から嬉しく思った。現在では、東海社会学の存在が研究室を支えている側面が大きくなっている。例えば、地域に関連した研究が掲載されやすいため、とくに研究室の院生にとっては、東海社会学会の年報への掲載が業績づくりの上で非常に重要な意味をもつようになってきている。また東海社会学会のインカレ報告会は、学部生の調査実習教育にも大きな刺戟を与えてくれている。教員スタッフにとっても、学会を通して地域の研究者との横のつながり・ネットワークがつくられ維持されている。かつて一緒に研究室の現状を心配した山崎仁朗助教は、岐阜大に転出して活躍していたが、学会設立をととても喜んでくれ、惜しまれつつ世を去るまで学会活動を支えてくれた。

以上みてきたように、環境学研究科への改組と統合、東海社会学会の設立というふたつの大きな出来事に背中を押され、五十周年以降、二〇〇〇年代に入ってから社会学講座の状況はシナ

ジーがはたらきいろいろな点で非常によい方向に向かってきたように思われる。大学院受験者が増えただけでなく、博士後期課程への進学者が大学・研究機関の常勤職を得る数も増えたと、学位を取得した留学生が中国の大学に職を得て帰国するケースも目立つようになった。スタッフ教員が単著、編著のかたちで出版した著作——いちいち紹介はしないが——の数もこの間相当な数に上るし、科研費の獲得額も相対的に上昇した。研究室関係者が学会賞を受賞する回数も急増している。かつては研究会を開いても人が集まらなかったと述べたが、田中教授が立ち上げた地域調査研究会は開催が百十回以上に及んでおり、他のスタッフが開催する研究会も増えた。環境学研究科設立以前に比べ、名古屋大学がホスト役を務める学会の大会開催もずいぶん増えた。日本都市社会学会、地域社会学会、日本社会学理論学会、環境社会学会、福祉社会学会、東アジア社会政策会議など、スタッフの専攻分野に関連した学会大会が開催されるようになっていく。極めつけは半世紀ぶりで開かれた二〇一〇年十一月の日本社会学会大会で、千人以上が参加するイベントであるため、スタッフ全員、院生全員、ほとんどの学部専攻生が関わり、準備には約半年を費やした。こうしたことも、講座としてまとまって開催できる体制になったということ、名古屋大学の社会学が外部からも認知されるようになったことを示しているといえるだろう。

話がこれで終わればめでたいのだが、そうはいかないのが世の常である。大学改革のもとでこの間講座の予算は年々減少し、個人研究費は半減している。「総長管理定員」への拠出のしわ寄せで助教はもちろん、後任の補充も難しくなっている。この間に西原教授が成城大学に転出され、

田中教授が定年を迎えられ、黒田由彦教授が一足早く椋山女学園大学に転出され、存在感のある教授の層が薄くなってしまった。替わって二〇一七年度に立川雅司教授と福井康貴准教授が採用され、久しぶりに助教として横井桃子氏が赴任している。これにより、現在講座は九名の充実した体制を維持しているが、今後については危ぶまれる状況にあるといっても過言ではない。環境学研究科への改革圧力はここ数年しだいに高まり、とくに講座が所属する社会環境学専攻への風当たりは厳しいものになっている。指定国立大学法人に手を挙げた時の条件として大学全体でポイント制導入を掲げたため、人事の補充は今後いつそう厳しくなることが見込まれる。多くの人の努力で長い時間をかけて良くなってきた研究室の研究教育体制であるが、悪くなる場合はあつという間である。筆者もいつの間にか赴任後四半世紀を過ぎて最古参の一人となり、六年あまり後に定年を迎える。研究室が荒波を乗り越え、八十周年記念、百周年記念をさらによいかたちで迎えらるることを願ってやまない。

第二部

名大社会学の古典

社会学とは何か

本田喜代治

「社会学」は読んで字のごとく社会の学、つまり社会を研究する学であるが、しかし、それはどんなふうに社会を研究するのか？ それによつて、その「学」の性格がきまってくる。

それから、そもそも「社会」というものは何なのか？ われわれは日常きわめて無造作にこのことばを使っているけれども、よく考えてみれば、これほど意味のあいまいなことばも少ない。

新聞に「社会面」というのががあるが、これは、いわゆる三面記事つまり市井の雑事の載る紙面である。また、よく「社会に出る」というような言いかたをするが、このばあいの社会はだいたいいわゆる世間というのと同じであつて、それは家庭とか学校とかいうものと区別して言われているのである。「広い世間」と言うとき、そこでは広さだけが問題なのではなくて、そこでのひとびとの行動のしかた、感じかた、考えかた、したがつてまた人間関係が、せまい家庭や学校のそれとは違ふということをはつきりと、またはそれとなしに、言っているのである。われわれはまた、政治、経済、社会、文化といったような分類のしかたを、よくやる。このばあいには、これらの四つは、みな多かれ少なかれ社会的なのだが、そのなかで、とくに政治的（政府、権力など）、経済的（産業、金融など）、文化的（芸術、哲学など）なものを除いて、その残り、たとえば家族や村落また国民といったようなものを漠然と指しているように思われる。が、ここでとく

にわれわれの注意をひくのは、そのように区別された四つの分野を通じて、いずれもが、暗黙のうちにもせよ、「社会的」と見なされているということである。

こういったような観察から、わたしは、「社会」の概念についての、なんらかのヒントが得られはしまいかと期待する。

「社会学」(sociologie)という語はオーギュスト・コントが作り出したものであるが、こんにちそれは、とくにかれの伝統を直接にうけついでいるとみられるフランス学派では、一般に「社会的事実の科学」と考えられている。われわれが、さきに漠然と社会と称したものが、ここではいろいろな社会的事実として、やや具体的な表現をとっている。

社会的事実

それならば、そのフランス学派という社会的事実とは何であるか？ それは具体的にいろいろな形の「社会をなして結び合うひとびとの考えたり行動したりするさまさまなしかた」である、と。このばあい、社会の本質はまだ明らかとなっていない。しかし、具体的にいろいろな形をとった複数の社会は、さきにも若干の例をあげて観察したとおり、ひとびとが漠然とながら暗黙のうちに一致して認めているところである。ここでは、その程度の了解でたくさんなのである。

さて、ひとびとが結び合うとき、たがいにいろいろな関係をもち、そして全体としての一つの活動に協力する、これはふつうに見られる経験的な事実である。ことばをかえて言うなら、ひ

とびとが社会生活をするとき、その結合からして、かれらが孤立でいたならば生じなかつたであろうようないろいろの効果が生まれる。かれらの活動は内容が豊かになり、その精神状態はすがたが変わる。群衆の中にまじつた個人は、ふつうならできなかつたようなことをしたり考えたりすることができるようになる。それよりもつとわれわれは、自分たちが持続的に所属する集団の影響をいっそう強く受ける。自分の家族とか、民族とか、自分がその一員である学校ないし職業上の、また信仰ないし政治上の団体とかいったようなものである。われわれが生きている環境に固有の法律や道徳、われわれの周囲のひとびとの仕事や信念、そういうものもわれわれに外から押しつけられ、われわれの人格すなわちパーソナリティを決定する。人格という語は、日本では、ふつう倫理的な価値判断を含めて用いられるようであるが、ここではそういうこととは無関係に、アメリカ社会学などで用いられているパーソナリティと同じであると了解されたい。

そこで、いわゆる社会的事実とは、そのように個人に対して外から影響を与え、多かれ少なかれその精神状態を変容したり、人格を決定したりするものことである。それは集団の形をとつたり法律や慣習、言語や信念その他さまざまな形をとるが、いずれのばあいにも、デュルケームの言う「社会的拘束」を個人に対してその外部から加える。その意味において、それは個人に外在的なものである。もちろんそうは言つても、ただ外在的であつて、これを各個人が自分のものとして内在化し、自分の人格のなかに血肉化しないかぎり、拘束は拘束としての意義を失う。この意味において社会はいわば、集団生活をするわれわれ個人めいめいの心の中にあると言える。

しかし、それはあくまで社会が外にあるからで、外になければ内にもまたありえないのである。このように個人の外にあつてはがって個人から独立して外から個人に拘束を加えるものを、デュルケムは「集団表象」と言い、これを端的に、もろもろの「制度」とも呼んでいるのであるが、これについての細かい分析と詳しい説明はあとにゆずるとして、そういうものが社会学の対象、つまり社会学が研究しなければならぬ相手だとするならば、ここに一つの問題がある。

なおついでながら、個人の外にあつて、個人の外からかれに拘束や強制を加えてくるものは、社会的事実だけではない。地理や気候や動植物その他の自然的事実も、その点、まったく同じではないかもしれないが、ひじょうによく似ている。社会的なものが、おうおうにして、自然的なものの一部として示されるのは——その根拠は時によつてまったく異なるにしても——そのためである。しかし、自然的なものは、そのものとしては、社会学の対象になりえない。対象になるのは、なまの自然ではなくて、制度化されたあるいは制度としての意味をもつ自然だけである。たとえば、たんなる地表の一片は社会学の対象にはならないが、だれかの所有する耕地や宅地はそれになる。

社会的事実がそのようなのだとすれば、それでは、さきに言った「具体的にいろいろな形の社会をなして結び合うひとびとの考えたり行動したりするさまざまなしかた」という社会事実の定義と、これとはどうつながるのであるか？ 考えたり行動したりするしかたが制度だと言うのはどういう意味であるか？

社会的行為

マックス・ウェーバーは、社会学を定義して、「社会的行為」を解釈しながら理解し、それによつて、その行為の経過と、その効果とを因果的に説明しようとするものだと言ひ、そして、社会的行為とは、行為する者がこれに与える主観的な意味に従つて、他人の行為に関係させられそうしてその行為のほうに指し向けられる行為である、と。シユプロットはこれに付け加えて、「新しい社会心理学者ならば、主観の意味のなかに、意識的指向ばかりでなく、無意識的な意図や態度も含めなければ気がすむまい」(『社会学』岩波版三ページ)と敷衍している。じつさい、このごろのアメリカなどの社会学ではこのウェーバーに糸を引く「人間の社会行動」という概念図式がさかんに用いられている。

わたしはここで、さきの「考えたり行動したりするさまざまなかた」とこの「人間の社会行動」とを結びつけて考えてみたいのである。この両者は、そこに到達するまでの道行きや、それぞれの修飾部分やニュアンスなどについては、かなり異なっているようだけれども、ごく大きな線で、しかも本質的な部分については一致していると思う。人間が集団をなして生活するばあいのかれらの行動——社会的行為——、それを通じての相互関係、そこでかれらが考えたり、行動したりするしかた、それには当然それらの行為のもつ——行為者がこれに与える——意味が問題になるだろう。このばあい、意味とは行為者によつて「主観的に思われた意味」であるが、そういう意味をもつ行為が他人の行為に指向されるということは、そういう指向——そのなかに無意

識的なものも入れていい——と行動を通じて、そこに人間関係の網の目ができることを意味する。ところで、その「意味」がどのように理解され、「指向」がどのような行為を誘発するかは、その時そのばあいによつて千差万別であろうが、しかし、社会生活のなかで無数また無限に反復されるひとびとの行為は、そこにおのずから一種の軌跡を描き出す傾向がある。それはめいめいの個人によつて「主観的に思われた意味や他人の行為に指向された」行為の総計ではなくて、それらの無数また無限の反復によつてできた軌跡であり、類型である。われわれがこんにち、いたるところで見る社会類型なるものは、このような社会的行為の反復と考えられる。そしてこのように行為を定型的に表現したものがいわゆる制度と称されているところのものである。

この点をもつと具体的にわからせるためにシユプロットから引用しておこう（シユプロット前掲書、一五三ページ）。

だれでも日常の社会生活のなかで制度やそれに似たものが生まれてくるのを目撃できる。たとえば、三人がいっしょに一軒の家を建てたときにはいろいろ問題が起る。食卓のどの席にだれがつくか、居間のどの場所を占めるか、何時に食事にするか、だれがいつ入浴するか、等々。かれらはこれらを相談して決めるかもしれないし、またその場で偶然に決めるかもしれない。しかし、ふつうしばらくたてば、これが甲のいす、乙のいす、丙のいす、昼食は一時にし、甲は朝食前に入浴する、というように決まってしまう。しかもこうして決まった約束はそれを利用しようと意

図したひとびとの生活を逆に支配することが多いこともわかる。甲が乙のいすにすわると、「なんだい、そこにすわって」という声がある。座席の配置や食事や入浴の時間は「制度化」されてしまったのである。

これは、ことがらをわかりよくするために、極度に単純な例で説明したものにほかならない。現実の社会生活はこれに比べて無限に複雑であり、そこでの社会的行動の反復、人間関係の複合、それら双方でのヴァラエティ、過去の人間の社会生活の成果の受け継ぎなど、それらはどうしてこの例とは比べものにならない。それらの背景をふまえて、さきのデュルケームの定式——集団生活のなかで結び合うひとびとの「考えたり行動したりするさまざまなしかた」というのを、もう一度吟味してみると、かれがこれに対して「制度」という替え名を与えたことの意味もわかってくる。

「行動のしかた」が無媒介に「制度」だというふうに言われると、なにか虚をつかれたようなとまどいを感じるけれども、これにわれわれがさきに加えたような説明をさしはさむなら、そこに欠けていた環のいくつかが見出されて、あまり無理なく全体のつながりがつくように思う。デュルケームがあのことを書いたころ——前世紀の終りころから今世紀の初めころ——には、まだ集団的な観念作用の法則はまったく知られておらず、「これらの法則の確定を任としなければならぬ社会心理学は、ただ名ばかりで」明白な対象をもたず、不同なそして不確かなあらゆる種

類の普遍性を指示するにすぎなかった（デュルケーム『社会学的方法の基準』創元社版二八ページ）。したがって、社会的行為としての考えかた、行動のしかたが、どのようにして類型化され、そして制度になるか、つまり「しかた」と「制度」との各項を結ぶ媒介過程を明らかにすることができなかった。

ウェーバーにしてもその原則的なくを示しただけで、これに順当な内容を与えてその過程をじゅうぶん具体的にしたわけではなかった。この仕事を受け継いでいまや洪水のように労作を生み出しているのがアメリカの社会学と社会心理学であり、これにわれわれは文化人類学（社会人類学と民族学を含む）をも付け加えることができる。

社会心理学

わたしは、そのようなアメリカの社会学や社会心理学の盛況が、将来の健全な正しい社会科学の理論の発展にとつて、どれだけの効果があるものか知らない。しかしここはその場所でないから、それについての詳しいことは言わないが、ただ、それに関連して、ひとこと言っておかなければならないことがある。それはわたしに言わせれば、社会学の現在および将来にとつて致命的に主要な問題をはらむところのものである。これが解決されないかぎり、あるいはすくなくとも解決にむかつて前進しないかぎり、ないしは、もう一步ゆずつても、前進の見とおしがたたないかぎり、社会学はその存在理由を疑われるであろう。それは、さきに言われた人間の社会的行動

が、どのようにして、いわば、もろもろの個人以上の、個人に外在して個人を拘束するところの、制度あるいは制度的なものになるか、その過程ないしメカニズムを科学的に探究することである。アメリカの社会心理学（これに文化人類学なども加えて）がやっており、そして同じく社会学がこれに大きな、むしろ大きすぎる期待をかけているのがこの仕事である。じつにアメリカの社会学はいまや社会心理学だと言ってもいいくらいになっている。もつともアメリカに限らず、一般に社会学が心理学と混同され、あるいはなんらかの形の心理学だと言明されたことは沿革的に古い話である。

くわしいことはどの社会学史を見てもすぐわかることだから省くが、おおざっぱに言つて、社会学は、はじめ社会物理学であり、つぎに社会生物学、つづいて社会心理学であった。しかし物理学、生物学、つづいては心理学も、今世紀に入ってから長足というありきたりの形容詞では表わしきれない大きな進歩をした。そして社会心理学もまた、それに見合うだけの構えをし、すがたをしなければならなかった。行動主義・フロイト派・新フロイト派・「場の理論」等々。

こうして社会心理学が、実証的な自然科学と同じような経験科学になろうとしていると言われる。そのために社会的行動についての実験や、社会生活におけるひとびとの態度や意識の調査や、世論調査や人間行動関係の力学的な検討などが、さかんに行われている。このような「自然科学」——その徹底的な本質検討はここではしない——が社会学ないし社会科学の正しい方針であるかどうかは疑わしい。が、とにかくアメリカの社会学がそのような状態であり、そして社

社会学がやはり同じ方針に従って、この種の仕事に没頭していることは事実である。

社会学がすなわち社会心理学だと言うのなら、その方針なり、やりかたなりの当否は別として、それはいちおうそれでよろしい。しかし、社会学と社会心理学とが別物であるのなら、それではいけないのではなからうか？

わたしの考えでは、いまアメリカの社会心理学が受け持っている分野は、そのやっていることには疑問があるけれど、それはそれとして正しいのである。「社会的行動」がどのようにして「制度」になるかということ、現代アメリカの理論社会学の代表者の一人タルコット・パースンズのことばで言えば、社会行為 (social action) と社会体制 (social system) との構造・機能的な (structural-functional) 〇まり力動的な関係はどうか、これを明らかにすることは、社会学にとっても、社会心理学にとっても絶対に重要である。ただ社会学の関心は、あくまでその「制度」、「体制」の面にあるのであって、行動や行為の研究は制度や体制にいたる道を明らかにするためのものである。その意味において社会心理学が、それが真に正しい科学であるばあいには、社会学にとって重要であり必要であることは言うまでもない。

しかしながら、この行動や行為の面が極度に重要視され、制度や体制が極度に等閑視されるようなことがあるとすれば、そこには、社会学を社会心理学に解消する恐れがある。わたしの、このような言い分に対して、それはたんに力点の置き場の相違にすぎない、行為・行動と制度・体制とどちらをより多く重視するかの程度の差だ、と言う人があるかもしれない。この両者は、な

るほど社会学にとつても社会心理学にとつても、それぞれに重要である。しかしそれにもかかわらず、社会学は制度の学であり、社会心理学は行為の学であると定式化するとき（わたしは、そうすることが正しいと信じている！）、それはもはやたんなる程度の差、力点の置き場の違いなどと言ふべきものではない。これは本質的な差——それこそ概念図式の差——であつて、そこから、同じ事実に対してもそれぞれの照明のしかた、その角度が違い、その対象を方法的に操作するしかた、アプローチの方向、またその学問の組み立てかたも変わってくる。

それだけではなく、もつと実践的な方面でも、きわめて重大な結果がそこから生まれてくる。制度の面に比較的無関心であつて、これに対し行為の面にもつぱら注意を集中するのは、現前の制度をタブーにすることである。それは原因であり結果であるだろう。現に自分たちがその支配拘束のもとで生きている制度はいかんともすることのできないものだ、これを改革することは不可能なんだと考え、あるいは感じて、そのような態度をとり、そのような行為をする結果は、その制度をタブーにするだろうし、そうなればますますそういった行為の傾向は強まるだろう。たとえそこまではいかないにしても、できるだけ行為の操作という範囲で制度を「改良」し、たんに部分的に補修してすませ、制度がどのように老朽腐敗していても、これをその根底から変革しようという意欲は起させないだろう。

制度がどのようにしてできるものであるかを真に明らかにすることができれば、好ましくない制度に対してはこれを変革しようとの意欲を起させるだろうから、そこまで論を進めてゆく

と、社会心理学のありかたそのものを問題にしなければならなくなる。つまり、社会心理学が、その行為の理論をとおして真に制度の本質を明らかにしてくれるならば、それはとうぜん、制度の変革につながるはずだと思われるのである。しかるにそれが、制度の面に比較的目的をつぶつてもつばら行為の些末な部分の煩瑣な論議に終始するならば、そのことによって制度の正しい分析を消極的にサボるだけでなく、制度の本質を積極的におい隠すことになるのである。こうなると社会心理学は、われわれの求める真に正しい社会学にとって何の役にも立たないだけでなく、かえってひじょうに害のあるものとなる。

アメリカの社会学者や心理学者が意識的にそんなことをやっているとはわたしは信じたくない。しかしすくなくとも現われた結果が、おうおうにしてそういうことになっていないであろうかをわたしは恐れる。アメリカ社会学の関心が、いまや大勢として、社会体制の問題に集中されているらしいことは、わたしもこれを認める。しかしそのありかたについて、上のような懸念のあることを伏せておくのはかえって友好国に対し礼を欠くことになるだろう。

これまで述べてきたところに関連していま一つ付け加えておきたいことがある。それは、このごろアメリカでやかましく言われている小集団と指導者のリーダーシップの問題である。わたしはここで、これらがアメリカの独占資本やその政治支配、また産業経営にとつてどのような意味があるかを問わない。わたしが言いたいのは、これがギルヴィッチの「微視社会学」と「巨視社会学」との区別にも対応して、制度の問題にかかわってくることがらであるということである。

社会学で、ふつう制度と言うばあい、すぐに国家とか教会とか法律とか資本主義とか家族(個々の家族でなく全体としての家族制度)とかいうような巨大なものを、とかく連想しがちである。しかし制度は、さきのシユプロットの例(六ページ)によっても察せられるとおり、たとえば学校のクラスのなかにも、経営内の特定の職場にも、博徒仲間にもというふうに、ごく小さい集団のなかにもみられるものであり、それらは多く自然発生的な、非公式な集団 (informal group) である。そしてこのような集団ができたり維持されたりするためには、かならずそこに指導者があつて、それがどのように集団にはたらきかけ、また逆に集団によつてどのように規定されるか、というようなことが問題になる。

このような微視的な観点から制度を見るということが、それが正しく導かれるばあい、今後の制度研究にとつて大きな寄与であることは疑いない。ここでもしかし、アメリカの小集団の研究やリーダーシップのそれがわたしの望む方向に成長していつているのかどうかは別のことがらに属する。わたしはただ、そういうふうにして、小集団やリーダーシップの研究から制度というものの本質に迫ることができるならば、それによつて制度の変革という実践的な課題に、社会学が近づくことができるかもしれないと思うだけである。

社会学は政治学ではないのだから、社会変革の具体的な方途や技術的なことまで示す義務はないと思うが、すくなくとも、それへの正しい橋渡しになる実践的な理論は提供しなければなるまい。もちろん社会学者が同時に政治学者であり、また政治家であつても、いつこう、さしつかえ

はないけれども。

最後に、社会学を社会的行為ないし制度の学と規定したとしても、それは社会科学一般に通用する定義であつて、それではとくに社会学をしるしづけることにはならない、という疑問が残るかもしれない。政治学も経済学その他も、やはり社会的行為ないし制度を取り扱うのではないかと。

そのとおりである。そこでたとえばドイツの形式社会学派では、政治的でもない、経済的等々でもない、とくに社会的なものを求めて、政治や経済その他社会生活の内容をすっかり捨象し、純粹に抽象的な形式、たとえば、結合と分離、親和と鬭争といったようなものを社会学の固有の対象にしようとした。これは一種の「社会幾何学」であり「関係学」であつたが、しかしそういう形式を抽象するためには、やはり、なんらかの「相互作用」を取り扱わなければならず、それはどのみち、人間関係なので、形式社会学者といえども、その形式になんらかの心理的内容を予想しないわけにはゆかなかつた。その意味で、それはまた、ひじょうに古い型ではあるが、一種の社会心理学であつた。

一方、関係学はたんなる関係学だけとしてはとどまりえず、関係の凝り固まつたものとしての形象の学によつて補われなければならなかつた。このばあい、形象は純粹に抽象的なものだから制度とは違ふけれども、いわば中味を抜いた制度である。

この形式社会学の試みの失敗を教訓として、われわれは、われわれの社会的行為と制度とに内

容を与え、しかも、それが政治学や経済学その他の取り扱うのとは別なものであることを論証しなければならない。そのことは、この書物全体が、おのずから、これを明らかにするであろうから、ここではできるかぎり簡単にすましておきたい。

政治学や経済学などの個別社会科学は、社会的行為や制度のそれぞれに固有な個別的な側面を取り扱う。具体的に何を取り扱うかは、それぞれの科学について検討しなければならないので、ここでは省くが、社会学はそれを全体として取り扱うのである。たとえば、政治面、経済面その他いっさいを含めて資本主義制度をとりあげ、その構造、発展、効果などを、社会の基礎過程との関係において、総体的に観察、分析、説明する、といったようなぐあいである。

(出典…本田喜代治『社会学入門——史的唯物論による基礎づけ』培風館、一九五八年)

大学の本質と意義

本田喜代治

大学の任務は、よくいわれるとおり、研究と教育である。しかしこういうだけでは、大学の本質と意義に関して、何一ついったことにはならない。何を、何のために研究し、だれを、どんなふうに、教育するのであるか？

教育の目的は世の中の役に立つ人間をつくることである。「世の中」といつてもいろいろあるが、ここでのいうのは圧制も搾取もない世の中である。だから、圧制や搾取のある社会についていう場合、そういうもののない社会をつくりだすことも——いや、それこそ、まさに——教育の目的でなければならぬ。それは、しかし、人間を離れた「社会」のためではなくて、それがとりもなおさず人間の幸福であるためにはよい社会でなければならぬ。よい社会とはすぐれた文化の社会、すなわち高度な科学と技術（芸術を含む）とをもち、それらを人類の幸福の増進のために用いる人びとの社会である。だから、教育とはそのような人間をつくるためのものである。

大学が——大学もまた——一つの教育の機関であるかぎり、本質的には当然同じ使命になっている。ただ、小学や中学や高等学校と異なる点は、いつそう高度の、そして専門化した科学と技術とを介してその同じ使命を成し遂げようとするだけである。そこに、さきに入ったような全民主的な人間教育があることは同じである。

今日の大学の沿革をたどってみると、その起りがそもそもそのような性質のものであった。それが後に教皇に従属し、帝王の奴僕に成りさがったのである。近代の民主主義革命はこれをその本来の使命にもどし、ここにあらたらしい人間を創造し発展させる任務を課した。ところが、その後の社会発展の経過は、大学が、または大学以外の権威——資本の権威に屈従させられようとするにいたったことを示した。

そのことをアメリカの一社会学者はつぎのように表現している。「元来、学校教育の主要任務は、政治的任務であった。すなわち、市民により多くの知識をさずけ、それによって、公的問題にたいする思考力と判断力を増加させることであった。時の経過とともに、教育の機能は、政治的機能から経済的機能に変化した。すなわち、人々を訓練してより給料の高い仕事につかせ、昇進させることに変わった。……これはホワイトカラー的技能を公費で養成するという資本の要求に合致するものであった。教育の大きな部分は、たんなる職業教育に変わってきた。政治的任務についていえば、多くの学校では、それは、たんに惰性的に繰り返される愛国心教育に縮小された」(ミルズ『パワー・エリート』邦訳下、五二七ページ)。

そして、「一七八三年のジョージ・ワシントン、ヴォルテールの『書簡集』やロックの『人間悟性論』に興じた。それにたいし、アイゼンハワーは、カウボーイ物語や、探偵小説を読んでいる」(同じく五七八ページ)と。

もう一人のアメリカの社会学者はこういつている。「一九五一年度のテストで……第一位が工

学専攻の学生……次が物理学と数学……以下生物学……社会科学……人文科学……教養学……
実業および商学……農学……そして教育学となつてゐる。「ところがその実業および商学の系統
に属する経営学についてみるに」「この三十年以来、実業学専攻の学生数は、人文科学専攻の学生
が減少するのほとんど見合うかたちで膨脹を続けてきた。そして一九四〇年来、脹張の割合は
急激に増大した。一九四〇年から一九五〇年に、実業学の学生数は二倍となつた。一九五五年に
は、他に比肩するものもないほど最大多数の学生集団をなすにいたつた……」（ホワイト『オーガ
ニゼーション・マン』邦訳上、一三八〜一四〇ページ）。

以上はいずれもアメリカのことで、これをそのまま日本にあてはめることはできないが、しか
し、つぎの点で両者は本質的には異ならないと思われる。（本国と植民地ないし従属国とのあいだ
にあるたぐいの差はあるにしても。）すなわち、大学が独占資本の権力に従属させられようとして
おり、その結果、人間教育の犠牲において職業教育が強行推進され、わずかに残つた「愛国心」
教育も、中身を割つてみれば、オーガニゼーション・マンのパワー・エリートへの奉仕を意味す
るにすぎない。人文科学や教養学の不評と、これにひきかえ工学や経営学の繁昌とはその意味を、
さきのワシントンとアイゼンハワーとの対比に、端的にあらわしている。

工学や経営学の盛行そのものは問題ではなく、それらがどのような内容をもち、何に奉仕する
かが問題なのであるが、それよりも、もつと直接に、例えば、あのような工学の繁昌にもかかわ
らず、アメリカでも、日本ではことに、基礎科学の不振がなげかれてゐるようなところに問題が

ある。経営学についても同じことで、要はそのような実用的なカリキュラムばかりが繁昌するところに問題があるのである。

基礎科学の軽視がそこに由来することは明らかであり、基礎科学の進歩なくして長期の、そして、すぐれた実用はおぼつかない。そのうえ、その実用がもつぱら現在のパワー・エリートに奉仕するためのものであるとすれば、そこに科学研究の生命である自主独立は失われ、例えば、時の政府の政策にしたがつて——たとえ間接にもせよ、また無意識的にもせよ——原子兵器の生産に手を貸す結果にならぬともかぎらない。

ところが、そのような実用的なものに対立するものとして、人文科学や教養学が考えられるわけであるが、さきに示唆したとおり、また現にわれわれがみるとおり、アメリカでも日本でも、それらのはなはだしく軽視ないし敬遠されているのが実情である。オーガニゼーション・マンにはそのようなものは不用であり、この風潮に迎合して大学ではそのようなものを与えない（教養単位を与えるだけだ！）からである。基礎科学というのを広義に解するとき、人文Ⅱ教養学はあらゆる専門Ⅱ技術の基礎科学でなければならぬはずであるが、それが現状ではきわめて遺憾なものが多いこと、ひとのよく知るところである。

最後に——余白がないから簡単にすませるが——わたしは、以上のように率直な現状批判をしたけれども、現代の大学の先生や学生を非難しようなどは、さらさら思ったわけではない。かれらは、ともに（そのなかにわたしじしんをも含めて）現代のマンモスの組織に編みこまれた

オーガニゼーション・マンなのだ。が、それだからといって、大学が現状のままでもいいということにはならない。大学は本来のすがたにかえらなければならぬのである。それには、しかし大学の内部だけの操作ではどうにもならない。それは同時に社会全体の問題だからである。

しかし、社会がどうにかならないかぎり、大学も、また、どうにもならないというのでは、百年河清を待つにひとしい。大学人（学生をも含めて）が社会そのものの変革に鋭い触角を働かせなければならぬゆえんがそこにある。ただ、しかし、そこで忘れてならないことは、大学人は、あくまで学問研究の場で社会の問題を受けとめ、研究活動の内面的な発展の線に沿って変革の事業にも参加しなければならない、ということである。

平つたくいえば、勉強もしないで政治活動に狂奔したつてしようがない。が、しかし、また、社会の変革につながる研究など、大学の恥以外の何物でもない。もつとも、ここで、社会とか、変革とかいわれていることの意味は人びとによって、いろいろに解されもしよう。わたしは、人間社会は、人びとの善意と努力によって発展前進するものと信じており、この前進を阻むものとたたかい、これを促進するものに協力するという意味で社会の変革を考えているのである。

（出典：名古屋大学新聞、一九五九年。本田喜代治『科学的認識へのあゆみ——社会学とわたし』新日本出版社、一九七三年、所収）

二つのウェーバー像——ヤスパースとリッカート

阿閉吉男

ヤスパースからウェーバーへ

私小説ふうにいえば、わたしがマックス・ウェーバーの名前を知ったのは旧制高等学校の生徒時代のことで、一九三三年春のころであった。当時、たまたま目にふれたのがドイツの実存哲学者カール・ヤスパースの『現代の精神的状況』である。わたしが知る二年前に公刊されたこの小著は、ゲツシエン叢書のなかに収められていたので、手にはいりやすかった。そのなかでわたしはウェーバーの名前を知り、かれの思想に間接的に近づくことになった。だから、わたしのウェーバーとの出会いはまったく偶然といってよく、ヤスパースからウェーバーへいたるわが道がここにひらかれた。

一九一〇年代からそのころまで、わが国では新カント学派、とくに西南ドイツ学派の哲学が風靡していたので、ヴィルヘルム・ヴァインデルバント、ハインリヒ・リッカートらの諸著作は多くの読者をもったようである。そのことは、前者の『序曲』や哲学史関係の諸著作、後者の『認識の対象』『文化科学と自然科学』『歴史哲学の諸問題』『生の哲学』その他がその間翻案の形で出版されたり、翻訳されたりしたことからも推察できる。

しかし、かれらによつて代表される西南ドイツ学派の哲学の認識批判的なアプローチの仕方は

厳密であるにしても現実遊離の感があり、その価値哲学はいささか陳腐となつていようにおもわれた。そこへ偶然目の前にあらわれたのがヤスパースの小著で、これによる実存哲学への招待がきわめて新鮮におもわれたのも当然である。

ヤスパースはこの本のなかで現代の時代状況と学問状況を批判するとともに、自己の実存哲学への手引きを試みる。なかんずく、現代の学問状況を扱うかれは、「今日の間人存在はいかにとらえられるか」を問うた個所で、「人間にかんする諸科学」をとり上げ、実存哲学の立場から社会学、心理学およびアントロポロジーに論及している。いうまでもなく、この個所は実存哲学と経験科学との関係を扱ったものである。

ヤスパースの見地からすれば、「人間存在の諸認識」は特殊な流派において確立されうるもので、社会学、心理学、アントロポロジーとして「典型的に近代的な諸科学」となった。しかし、これら諸科学が絶対的に人間の存在の全体を認識しようとおもうならば、「哲学の、見込みのない代用品」として退けられなければならないとかれは考える。そこで、こうした激変からはじめてかれのいわゆる「現代の実存哲学」が生まれる。

「現代の実存哲学」はいまこそ、それによつて人間にかんする認識であると定義されると同時にそうした認識であることが保証されるこれらの諸科学のうちに、自己の素材をみつける。しかし、それは存在そのものに近づく過程でこれらの領域を踏み越える。こうして「実存哲学は、再び人間を越えて出る人間存在の哲学である⁽¹⁾」といわれるわけである。実存哲学は「人間にかん

する諸科学」を素材としながらもこれらを超越する「人間存在の哲学」であると主張するヤスパース独自の視点が、ここに見出されるであろう。このようなかれ独自の視点はともかくとして、かれが「人間にかんする諸科学」のうちで社会学を真先にとり上げている点はきわめて興味深くおもわれる。かれはここでは社会学をどのようにとらえるのであろうか。

ヤスパースが社会学をとらえるにさいしての出発点は、つぎのとおりである。すなわち、人間は、かれが現存、伝統および課題をそれに負うている自己の社会によつてのみ存在するがゆえに、人間の本性は社会の研究をとおして研究されなければならないということである。その根底には、単独の人間は把握しがたいようにみえるが、しかし社会はそうではないというヤスパースの視点がある。こうした視点に立てば、単独者 (*gar Einzelne*) としての人間にかんする知識ではなく、社会諸形成体にかんする知識が人間の存在に導くことになる。そして社会体、文化形態、一なる人類などは「人間存在の諸相」である。そこで、「このような社会学が種々の変化を示しながら存在する」と考えるかれがまず第一にとり上げる例はマルクス主義である。

かれによれば、「マルクス主義的なもの見方」は人間の本来の存在を科学的に把握していると信じている。そこでは人間は「生活必需品の生産様式としての、自己の社会化の結果」であり、人間が自己の特殊性を示すのは、「かれがそこで占める社会における場所の産物」だからである。そこにヤスパースは、「人間の意識は自己の社会的状況の関数である」という点を認める。ここでマルクス主義的なもの見方における人間の存在と人間の意識との関係についてみれば、両者

はいずれ分離されることなく、一つになる。つまり、人間はそれと知らずにかれがつくり出す事物に従属していたが、いまや人間は、自己の全現存を自己の不可避的な歩みの科学的認識にしたがつて引き受けることによって、主人公となるわけである。国家や教会に献身する代わりに、人間は、自由な、階級なき社会の源泉である階級、つまりプロレタリアたちに献身することをとおしてそもそも人間であるものを把握することになる。

しかし、このようなマルクス主義的なものの方々にたいしてヤスパースは、それが科学的認識ではなく、「悟性信仰」であると断定する。こうした「悟性信仰」は、それ自身が一階級のイデオロギーではないかという問いに直面すれば、自己の盲目的な精神的粗野に訴えるしかない。したがって、すべては相対的であるにとどまり、人間の物質的利益と衝動以外は何一つそれ自身ではない。しかし、こうした社会学は実際もはや認識しないで、生起するすべてのものにたいして自己のレッテル張りをくり返すことによつて、「無への信仰」を表わすだけだといふのである。

ヤスパースにとつては、マルクス主義は「社会学的分析のもつとも著名な例」にすぎない。このような諸研究においては、一定の特殊かつ相対的な諸認識はえられる。しかし、これらは同時に「人間存在のあり方をめぐる精神的闘争の表現」となる。こうしてこれらの認識に共通なのは「一つの存在の絶対的主張」である。したがってヤスパースは、「人間そのものとしての人間はこうした偽りの知識のなかではいつも失われてしまう」と考える。つまり、マルクス主義をも含めて、社会学的分析にもとづく諸認識は、特殊かつ相対的なものであるにもかかわらず絶対性

を主張する点で、「偽りの知識」とみなされるのである。

では、かれはウェーバーにたいしてはどのような評価を下すのであろうか。この点についてかにはいう。「客観的認識作用の意味が現代の歴史的状态における意思表示から理論のなかで明らかに引き離されるばかりでなく、生活のなかで依然として根源的行為の目標でもあるとき、知識を知識としてはじめて基礎づけ、したがって人間を解放する決定的な一步が踏み出される。この一步が現代においてはマックス・ウェーバーによって踏み出された⁽²⁾」。ここからも明らかのように、ヤスパースのウェーバーにたいする評価はきわめて高いといえよう。

さらにつづければ、社会学はウェーバーにあつてはもはや「人間存在の哲学」ではなく、「人間の行動とその帰結にかんする特殊科学」である。こうして認識可能な諸関連はかれにあつては相対的である。つまり、ウェーバーは歴史的現実の無限のもつれあいにおける因果的要因というものの量がけつして測定できないことを知っているわけである。いいかえれば、ある全体の像は対象的直観における一つの局面となりうるだけで、真の全体にかんする一つの知識とはなりえない。この点にヤスパースはウェーバーの「相対主義的認識」を見出している。

それにしても、かれはウェーバーのうちに「相対主義的認識」を認めるからといってこれを貶価することはしない。社会学の代表的な例をマルクス主義とみるかれは、マルクス主義や、それぞれ心理学とアントロポロジーの代表的な例である精神分析学と人種理論をいずれも「もつとも広範に人間を偽装するもの」とみなしている。にもかかわらず、かれはウェーバーの社会学をそ

の例としてとり上げてはいない。

その具体例を挙げれば、つぎのとおりである。すなわち、ヤスパースは、プロレタリアートの独裁にかんする理論、精神分析学の精神療法的処方、人種理論家の人種改良法などがある。また、内容をもっているので、「粗野な要求」であることを認める。なぜならマルクス主義、精神分析学および人種理論は「独特の破壊的特質」をもっているからである。いわば、マルクス主義はあらゆる精神的現存を上部構造として暴露できるとおもっているし、同様に精神分析学はそれを抑圧された本能の昇華として暴露できるとおもっている。そして人種理論からは希望のない歴史観が生まれる。つまり、消極的な優勝劣敗によって本来の人間存在は間もなく衰亡するわけである。

このように考えるヤスパースによると、これら三つの流派は、人間に価値があるとみえるものを根絶するのにふさわしく、無を信ずるものである。そこで、これらの理論の個々の代表者は、「二つの階級がある」、「これらの本能とその転移」、「これらの人種」などという自己の拠り所にしたがって確信をもち、実際まったく別々に信ずるもので、自己自身を理解するわけではない。それにつけても、ここでウェーバーの社会学が除外されていることは注目されてよい。そしてヤスパースにとつては社会学、心理学およびアントロポギーは人間を一つの客体とみることを教えるものである。したがって、人間は社会的、心理学的ないしはアントロポギーのどのように構成されても、「単独者」にとつては強制力がない。こうして人間は、「人間にかんする諸科学」が多分終局的に決定しようとするものから解放される。このばあい、「人間にかんする諸科学」

は、人間が真に認識可能なものを単なる特殊のかつ相対的なものとして把握するにすぎないことを示している。

このような視点に立つヤスパースは、実存哲学こそ「あらゆる専門知識を利用しながらも、それらを越える思考」としてとらえている。しかし、「人間にかんする諸科学」が「悟性信仰」とみなされるのとは逆に、ゼーレン・キルケゴール流の「単独者」に固執するヤスパースの実存哲学は超悟性信仰すれすれのものとなっているようにおもわれる。とはいえ、精神病理学や心理学の専門家としての経歴をもつかれのことから、経験科学とは無縁のいわゆる専門哲学者より格段すぐれたものがかれのうちにはあるといえる。

ここでは、ヤスパースからウェーバーへいたるわが道をたどることを糸口として、ヤスパースが『現代の精神的状況』のなかで「人間にかんする諸科学」にふれた個所をとり上げ、これらの科学と実存哲学との関連、ウェーバー社会学の位置づけについてみてきた。そこで、ヤスパースとウェーバーのかかわりはどのようなようであったか、さらにヤスパースのウェーバー像はどうであったかを見ることにしよう。

(1) K. Jaspers, *Die geistige Situation der Zeit*, 1931, 5. Aufl., 1932, S. 150.

(2) *Ibid.*, S. 152.

ヤスパースのウェーバー像

まず、ヤスパースとウェーバーとのかかわりについてふれてみれば、前者は一九〇九年二十六歳のとき精神病理学者ハンス・グルーレの紹介により十九歳年上の後者と知りあった。当時、ヤスパースはハイデルベルク大学医学部精神科助手であった。その後、一九一三年かれは『精神病理学総論』を公刊した。

この本のなかでは、精神病理学者に価値があるものとしてウェーバーの社会学上の二、三の論文、たとえば論文「ロッシヤーとクニース」、論文「社会科学のおよび社会政策的認識の「客観性」」などのほかに、人間の量的な、主として機械的な作業能力にかんしては論文「工業労働の精神病理学のために」が挙げられている。その上、かれが客観的精神病理学ばかりでなく理解的精神病理学を扱うとき、理解的関連や理解 (Verstehen) の概念、とくに理念型 (Idealtypus) の概念図式などを駆使しているところをみても、ウェーバーからの示唆がきわめて大きかったことがわかる。逆に、ウェーバーものに遺稿『経済と社会』(一九二一〜一九二二)の第一部第一章「社会学の基礎概念」の「緒言」のなかで「理解」についてはこの本を参照すべきだとしている。この点にかんしては、両者のあいだに明らかに相互作用があったとみてよい。

ついで、一九一六年以後ハイデルベルク大学の心理学員外教授となっていたヤスパースは、一九一九年に『世界観の心理学』を上梓した。その「序論」のなかでは、「マックス・ウェーバーの宗教社会学上および政治学上の研究は、以前の分析と比べれば新しい一種の世界観心理学的分析

を含んでおり、これらはもつとも具体的な歴史的探求と体系的思考との、あらかじめ多分不可能とおもわれる結合によつてなされている⁽¹⁾と指摘される。

のちにヤスパースがその「哲学的自伝」のなかで述懐しているように、ウエーバーはすでにヤスパースの『精神病理学』の構想にも、それにもましてかれの『世界観の心理学』に影響をあたえたし、後者の「序論」においてヤスパースは、「ウエーバーの宗教社会学上の理念的構成がわたしの研究に及ぼした意義を強調した」といった。かれの『世界観の心理学』が一九一九年十月に公刊されたとき、ウエーバーはハイデルベルクからミュンヘンに転じていた。当時、ウエーバーはミュンヘン大学正教授となっていたからである。その後、ヤスパースがハイデルベルクで最後にウエーバーを訪れたとき、ウエーバーは別れぎわにこの本にふれ、「どうも有難う。これはとても骨折りがいがありましたね。貴君の今後の著作活動に期待いたします」と温情をこめて力強く語つたという。これがヤスパースにとつて「ウエーバーの最後の言葉」となつた。

一九二二年以後ハイデルベルク大学の哲学正教授となつていたヤスパースは、一九三七年、妻がユダヤ系であるとの理由でナチスにより教授職を解任された。しかし、第二次世界大戦後復職し、その後一九四八年バーゼル大学に転じた。その翌年秋バーゼル放送局の求めに応じて十二回にわたつておこなつたラジオ講演の産物がかれの『哲学入門』である。その付録のなかで、かれは歴史哲学にふれたさいウエーバーに論及した。そこではレオポルト・フォン・ランケおよびヤーコプ・ブルクハルトとの関連でウエーバーについて論じられる。

ヤスパースによると、ランケは「世界史的な観察のために歴史学的・批判的方法」を展開する。こうした観察はヘーゲルとゲーテの雰囲気のうちにあつて、一見哲学を拒否しているようにみえるにもかかわらず、それ自身一個の哲学である。一方、ブルクハルトは自分をいわば歴史的教養のある祭司のように感じていた。かれは歴史的回想の偉大さと喜ばしさ、つまり幸福と不幸を、この世の終わりに立っているというペシミスティックな根本的態度から示した。

ところが、ウエーバーはあらゆる偏見をぐらつかせ、あらゆる手段を用いて歴史の事実を研究する。そしてたいの以前の歴史記述は、自己の解釈の範疇がはつきりしないため、漠としていて不十分にみえるが、かれはこのような関係を明らかにしたと解される。「ウエーバーは価値と認識作用との緊張を理論的、実践的に展開し、まさに現実的な認識作用の慎重な吟味によって、蓋然的なものとの全体的なものを断念しながらあらゆる可能性にたいして機会をつくっている⁽²⁾」。このように語るヤスパースは、ランケとブルクハルトにたいしてよりもウエーバーのほうに軍配をあげているとみてよい。つまり、ウエーバーはだれにもまして「価値と認識作用との緊張」を明らかにし、「現実的な認識作用の慎重な吟味」をおこなったわけである。

時期的には前後するが、ウエーバーは一九二〇年六月中旬、急性肺炎のためミュンヘンで没した。五十六歳であった。かれの急逝からほぼ一カ月後、ヤスパースはハイデルベルク大学学生組合の依頼により追悼講演をおこない、その年これを『マックス・ウエーバー』として公刊した。これは、ウエーバーの死の七日後に書かれた盟友エルンスト・トレルチユの「マックス・ウエー

パー（一九二〇年六月二十日の追悼文）」と並び称せられるものである。

後者は、トレルチュがウエーバーをたたえる挽歌に相当する。そこにみられる切々たる哀悼の言葉に読者は感銘を覚えるにちがいない。ここではウエーバーは、国民が「指導者能力におけるこの財宝」としてのかれを認識せず、利用しなかつた点で、「両腕と両手のないラファエル」にとどまつたと描かれている⁽³⁾。これにたいして、量的にみて後者の四倍ほどある前者において、ヤスパースは自己の実存哲学を投影してウエーバーのうちに「実存的哲学者」を認める。そしてウエーバーの中心が社会学にあり、かれの研究がすべて断片的であつたのはかれの「哲学的実存」のうちに深い根拠があつたことが強調されている⁽⁴⁾。ここにはヤスパースのウエーバー像が端的に示されている。

ウエーバーのための追悼講演をおこなつてから十二年後に、ヤスパースは別個に『マックス・ウエーバー』を公刊した。「政治的思考、研究および哲学的思索におけるドイツの本質」という副題が示しているように、この本においては政治家、研究者および哲学者としてのウエーバーが論じられているが、その力点はつぎの点に求められよう。すなわち、ウエーバーは「哲学者」であつた。かれは哲学的体系をまつたくつくらなかつたし、哲学者と呼ばれることを拒否した。それにしても、ウエーバーが生きていたわれわれの時代にとつては、かれは「真の哲学者」である。かれの仕事は「具体的な哲学的思索の独特の表現」であり、この哲学的思索が政治的判断と学問的研究を媒介として実現されたのは、ちょうどかれの生活が「かれの生存を媒介とした独特の哲

学的思素」であつたのとおなじであると解される。

さらにいえば、ウエーバーは政治家、研究者、哲学者であつたが、しかしそのどれかの一つではなく、「全人」であつたし、世界をかつてなかつたような広さにわたつて、かれの本質の深みからとらえた人であつた。かれの本質は不可分な一者であり、真に人間が人間としてありうるものなのである。すなわち、ウエーバーは「真理の探究者」である。つまり、かれは「哲学者」として政治家、哲学者として研究者」である。このようにいわれるのも、かれを「哲学者」とみるウエーバー像がヤスパースのうちに存するからである。ここでは、ヤスパースはさきの追悼講演のばあいよりもはるかに自己の実存哲学に引きつけてウエーバーの人間像を描いているようにおもわれる。この点でヤスパースのウエーバー像がリツカートのそれといかに異なるかは、のちに示されるであらう。

ところで、「研究者としてのマックス・ウエーバー」にかんするヤスパースの叙述にしたがえば、ウエーバーの研究は多方面にわたつていたが、「すべてのことが人間、に關係づけられ、しかも歴史的に變化していく社会における人間に關係づけられた」ことによつて、はじめてその軸を獲得した。つまり、「人間にかんする問題」がかれの関心の的であつた。そしてかれは世界史家としては人間の世界の全体を求めるわけではない。人間の世界の全体という存在は疑わしく、とにかく無限であり、研究にとつては汲み尽しえないものだということを、かれは知っている。かれは出来事のとらえうる諸事実を求めるので、相対的な全体を知っているだけで、「人間的諸事物の全

体の、制御しうる構造」を知らない。

このように断念すれば、ウエーバーは歴史的諸事実の収集家になることもない。また、かれは諸形態を直観したり依存関係を直接観察したりして惑わされることもない。かれは究極目標として、「精神的にすぐれた人間の現実を如実に描き出すという造形的な満足」を求めない。したがって、ウエーバーはランケ、ヘーゲル、グスタフ・フォン・シユモラー、ブルクハルトらとは異なり、社会学者として世界史家であるとみられている。

「研究者としてのマックス・ウエーバー」は挫折したという非難があるが、これにたいしてヤスパースは、「事実、ウエーバーは挫折したけれども、それは真の学問という意味に属する、真の挫折という意味においてである」と擁護する。そしてウエーバーの挫折は、知識が該博になるときには、ますますいっそう深く存在に導く。だから、かれの研究計画はきわめて膨大なものであるので、かれはそれをけつして完成することができなかつたし、かれの諸著作は広範囲にわたるにもかかわらず、「巨大な断片」であり、「巨人の、立往生したままの建造物」とみなされる。

ここからヤスパースのつぎのような発言がみられる。「マックス・ウエーバーが社会学のなかでどんな変装した形においても形而上学を拒否したこと、つまりかれが学問的信念をいわば禁欲的なものにしたことは、かれが真の挫折の可能性を隠蔽しなかつたし、偽造されている学問における偽りの満足を阻止したことを意味する⁽⁵⁾」。ここでは、禁欲的な学問的信念をもつウエーバーが経験科学と形而上学との違いを確認した人としてとらえられているとみてよい。こうしてヤス

パスはウェーバーの学問を、「それが仕えるある実存の機能」とみなすわけである。だから、ウェーバーの社会学もまた「哲学者としてのマックス・ウェーバー」という「かれのいつそう深い本質の一本の腕」にすぎないとみられるのである。

一方、ヤスパースは「政治家としてのマックス・ウェーバー」を取り扱うにあたって、ウェーバーが指導的な政治家にはならず、政治的著述家にとどまったことから始める。このようにウェーバーは行動するにはいたらなかったにもかかわらず、いつもその準備をしているかのように生活した。かれの思考はあらゆる細部にわたって政治的な人間のあらわれであったし、歴史的な瞬間に仕える政治的な活動意志であったとみなされる。

ここでとくに注目されてよいものは、ヤスパースによるつぎの点の指摘である。「意識的な責任倫理 (Verantwortungsethik) が結局やはり自己をとおしてのみみずからも存続するために、信念倫理 (Gesinnungsethik) を問題にするようにみえるばあいの不気味な限界はもろもろの倫理的逆説としての二律背反を示すもので、これらの倫理的逆説を説明することでもってウェーバーは、単なる悟性上の公正さでもって唯一の正しいものを知るのだと単純に考えるすべての人びとにたいして圧力を加えた⁶⁾」。いうまでもなく、このばあいヤスパースは、政治的行為をも含めて人間行為における責任倫理と信念倫理とのからみあいをウェーバーが「もろもろの倫理的逆説としての二律背反」としてとらえるものとみている。と同時に、ウェーバーが単なる悟性的判断を越える高みに立つてこうした倫理的逆説を説明したことが示唆されている。この点については

他の機会にふれたので、ここではくり返さない⁽⁷⁾。

ともかく、ヤスパースは自己の実存哲学に引きつけてウェーバーを「哲学者として政治家、哲学者として研究者」と解し、かれの本質を「哲学者」、いや「真の哲学者」ないしは「実存的哲学者」に求めたといえる。くり返すまでもなく、ここにヤスパースのウェーバー像がある。これにたいして、リッカートのウェーバー像はどのように描かれるのであろうか。

- (1) K. Jaspers, *Psychologie der Weltanschauungen*, 1919, 4. Aufl., 1954, S. 14.
- (2) K. Jaspers, *Einführung in die Philosophie*, 1950, 2. Aufl., 1953, S. 160.
- (3) E. Tröltzsch, *Deutscher Geist und Westeuropa*, 1925, S. 252. 参照。
- (4) K. Jaspers, *Max Weber: Eine Gedenkrede*, 1920, Aufl., 1926, S. 15. 参照。
- (5) K. Jaspers, *Max Weber: Politiker, Forscher, Philosoph*, 1958, S. 63-64. ちなみに、本書は初版(一九三二)の新版である。
- (6) *Ibid.*, S. 41.
- (7) 拙著『ウェーバー社会学の視圈』勁草書房、一九七六、三二二ページ、八〇ページ参照。

リッカートのウェーバー像

ウェーバーは一八六四年の生まれであり、リッカートは一八六三年に生まれたから、一つ違い

であった。二人は少年時代から熟知の間柄であった。ヤスパースよりさきに一九一六年以降ハイデルベルク大学の哲学正教授を務めていたリツカートは、おくれげではあったが旧友の死をしのんで、一九二六年論文「マックス・ウェーバーと学問にたいするかれの態度」を『ロゴス』に発表した。かれみずからいつているように、かれはまさに「友人として」誇張をおさえて、とくに「ウェーバーの学問的態度」に焦点をあてて書いた。そこには二人の出会いについてもふれられている。

ウェーバーの父マックス・ウェーバーがベルリン在住の国民自由党選出の代議士であったように、リツカートの父ハインリヒ・リツカートもハンザ都市の一つダンチヒから選出された国民自由党代議士であった。二人の父の名前が息子の名前とおなじであったことも、偶然の一致である。かれらはおなじ政党に属していたために、親しく交わっていた。息子のリツカートも「若き日の健康かつ快活なマックス・ウェーバー」をよく知っていた。かれらの父親ばかりでなく、とくに母親同士も親交を結んでいたようである。

ウェーバーとリツカートが最初に出会ったのは、ほぼ同年齢のギムナジウムの生徒としてであった。それにしても、当時はまだそれ以上の関係をもつにはいたらなかった。それは、一つにはかれらの住居がとても遠く離れていたという外面的事情によるものであったし、二つにはかれらの関心がきわめて異なっていたことにもよるものであった。少年リツカートは、少年ウェーバーが古銭の収集家であることを知っていた。少年ウェーバーがいろんな古銭をみせて歴史的知識を

くり広げたので、少年リツカートはそれに怖気をふるったようである。この分野では一つ年下の少年にはとてもたち打ちできないとおもったため、かれはつきあうことをも恐れた。

学生時代には、かれらはごく稀にしか会わなかった。二人が出会ったとき、青年リツカートは青年ウエーバーから再三再四「非常に博識な人という印象」をうけた。そしてかれは、青年ウエーバーが学問の領域でいずれ非凡なことをなし遂げるにちがいないという確信をその都度もつた。ともかく、前者は哲学へ、後者は法律学へというふうに別個の道歩んだ。

一八九四年、ウエーバーは三十歳のときベルリン大学員外教授（商法およびドイツ法担当）から国民経済学正教授としてフライブルク大学へ招かれた。当時、リツカートはこの大学の哲学私講師を務めていた。古くからの家族ぐるみにつきあいであつたので、二人は個人的にもたがいに往来し、かれらの関係は急速に以前のそれとはまったく異なるものとなつた。かれらはしばしば会つた。そしてウエーバーの魅惑的な親切心とならんでかれの素晴らしいユーモアからリツカートは影響をうけた。当時のウエーバーについてかれはつぎのように語っている。「即物的にはまず、ウエーバーの偉大な歴史的知識が再びわたしを驚かした。しかし、わたしはいまではもはや少しもそれを恐れなかった。逆に、わたしはかれから学ぼうとした。かれが研究者であるとおなじく政治家である点が、わたしの興味をひいた¹⁾」。こうしてリツカートは、ウエーバーがその該博な歴史的知識に裏打ちされていたので、時局にかんする決まりきつた言説の水準をはるかに越えているとおもつた。

当時のリッカート家とウェーバー家との関係については、マリアンネ・ウェーバーも一九二六年に夫の伝記のなかでふれている。それによると、結婚後間もないウェーバー夫妻は同年配の若手の哲学者リッカートとその妻ゾフィーのもとでは、「自分たちにとつて生涯の宝となる大きな精神的内容に充ちた友情」をみつけた。ウェーバーはすでに何年か前にリッカートの初期の認識論上の諸著作『定義論』、『認識の対象』などを研究し、その論理的な鋭さと明晰さに驚嘆していた。かれは、同僚の哲学者アロイス・リールがベルリン大学に転出したあと、学部内のさまざまのつまらない反対を押し切つて、空席になつた講座をリッカートのために確保した。ちなみに、リッカートは一八九四年員外教授となり、一八九六年正教授となつた。

一方、ウェーバーにはもはやこれ以上認識論上の諸問題に沈潜する余裕がなかつたので、その代わり今度はマリアンネ夫人が現存と世界の意味について思索しようとする望みを充たそうとしはじめた。彼女はリッカートの熱心な女弟子となつて、自分の学んだことをたえず夫に知らせた。夫人たちも親しく交わつた。マリアンネ夫人は、妻であり子供の母である女流彫刻家ゾフィー夫人のうちにはじめて新しい女性のタイプをみた^②と記している^③。

ひるがえつてリッカートの叙述に戻れば、フライブルク時代のかれとウェーバーを精神的に緊密に結びつけたものが、さらに加わつた。概してかれらの学問上の研究関心は、そのときでもきわめて異なる領域に導いた。「ゲーテも自己自身についていったように、ウェーバーは「本来の意味での哲学」を「少しも理解する力がない」のであつた^④」。このようにリッカートは往時を回

想して、ウェーバーが「本来の意味での哲学」には向かなかつたと述べている。かれのこうしたウェーバー像はその後もひきつづきもたれたようで、それがヤスパースのウェーバー像とは対照的であることに気がつくにちがいない。いわば、ウェーバーを哲学者とみるかみないかという、両者の把握の相違の原点がここに見出されるであろう。

リッカートによれば、当時のウェーバーはたしかにいくたの哲学書を読んで理解していたが、しかし普遍的世界観それ自体の諸問題を学問的に取り扱うことは、かれの関心事ではなかつた。にもかかわらず、かれは、学問と政治にかんするかれの二重の天分によつて必然的に論理学の諸問題へ導かれていった。それは、当時のリッカートにとつても関心の中心にあつたおなじ問題であつた。つまり、歴史科学の論理的構造を理解することがかれらにとつて重要であつたわけである。ウェーバーは、すでに青年のころ学問上の歴史的思考の明晰な概念から出発して論理的諸問題に当面せざるをえなかつた。ここからかれは方法論を純理論的な視点に立つて扱うことになり、この領域でかれとリッカートはたがい助けあうことができた。まさにかれらはきわめて異なる出発点からおなじ問題に到達したからである。こうしてかれらは学問の領域においても友人となつた。リッカートは、「非常に該博な歴史的知識をもつたひとりの人」ウェーバーといつしよに自己の論理的諸問題を話しあうことは自分にとつてきわめて有益であるとおもつた。

ところが、リッカートにとつて残念におもわれたのは、ウェーバーが僅かの年月しかフライブルク大学に在職しなかつたことである。一八九七年初頭、ウェーバーはカール・クニースの後任

としてハイデルベルク大学に転じ、国民経済学講座を担当することになった。その年の初夏、かれは父との衝突とそれから間もない父の突然の死からうけた精神的打撃により激しい鬱病の症状に悩まされ、一八九八年以後四年間の療養期間がつづく。リツカートの眼にもウエーバーはフライブルクでは頑健で研究能力旺盛とみえたのに、いまのかれはひどく神経質と映った。こうしてウエーバーは自己の学問的活動をまったく中断するの止むなきにいたった。また、かれが政治的活動のことを全然考えることができなかったのも当然である。その上、個人的にはかれは家に閉居するか、あるいはしばしば旅行をした。この時期には、かれらは稀にしか会わなかったようである。

このようにウエーバーが政治的に活動することができなかったのと反比例して、かれの理論的研究への意欲はますます強くなった。そこで、社会科学や社会政策の方法論にかんするかれの諸論文が執筆される。これらの論文は二人を精神的に緊密に接触させることになった。それはリツカートの『自然科学的概念形成の限界』の第二部で扱われた歴史科学の論理的序説と大きなかわりをもった。しかし、論理的研究はウエーバーにとってはけっして自己目的ではなかった。かれは間もなく改めて社会生活の即物的な諸問題を取り扱うようになった。そしてかれの研究の特質は、いまや以前のフライブルク時代のものとは本質的な変化を示しているとリツカートにはおもわれた。

ここで理論的な側面だけをとり上げるリツカートは、そうした変化の核心をつぎの点に求める。

すなわち、ウェーバーは相変わらず専門研究者にとどまった。しかし、かれは、以前それに没頭すると同時に政治家として関心をもっていた諸対象を越えて自己の領域を広げただけでなく、別種の研究をおこなうにいたった。青年時代にはかれはマルクス主義に多くのものを負っていた。かれはいまや、その一面性をますます看破した。いまのかれにとつてとりわけ重要なのは、いわゆる理念的な力、なかならず宗教が「物質的」利害すなわち経済生活にあたる影響を理解することであった。「それは、純歴史的な考察、すなわち具体的な個別事象の個性化的叙述を越えて、社会的文化生活における一般的諸関連を明らかにする試みへウェーバーを導いた⁽⁴⁾」。この点にウェーバーの関心事を見出すリツカートは、ウェーバーが個性化的認識をめざす「歴史家」から普遍化をおこなう「社会学者」となったことを認める。

リツカートの眼からみれば、ウェーバーはいわゆる唯物論的歴史哲学との止むをえない戦いをとおして哲学上の諸問題にも接近していった。しかし、同時にかれは一般化するにさいしてきわめて慎重に仕事にとりかかり、そしてあらゆる本来の歴史哲学をたえず拒否した。かれはあまりにも「歴史家」であつたために、「世界史全体の思弁的叙述を企てることができなかつた」とみなされる。このような批判を加えるリツカートは、ウェーバーが「社会学者」としてもまた意識的な方法的明晰さでもつて一個の専門研究者以外の何ものでもあろうとしなかつたとみている。いわば、社会学を「哲学」としていとなむというあらゆる考えがウェーバーにはいつもまつたくみられなかつたというのである。

すでにふれたように、ウエーバーの療養期間は一八九八年から一九〇二年までおよそ四年間つづいた。病氣回復後、かれは一九〇三年から論文発表を再開しはじめ、その年に論文「ロツシャーとクニース」の第一部を発表した。翌一九〇四年晩夏から年末にかけての四カ月にわたるアメリカ旅行に出かける前に、かれは論文「プロテスタントイズムの倫理と資本主義の「精神」」の第一部を書き終わった。帰国早々の翌年一月から三月にかけてその第二部を書き終えたかれは、フライブルクのリックカートにあてて手紙を出し、そのなかでつぎのように書いた。「六月か七月には、近代の職業文化の基礎としてのプロテスタントイズムの禁欲——近代経済の一種の「唯心論的」構成という、おそらく貴君の興味をひくような、文化史上の一論文がお手許に届くことでしょう⁽⁵⁾」。これによつてみれば、かれらはハイデルベルクとフライブルクというふうに分かれた土地に住んでいても、かれらの親密な関係がずつとつづいていくことがわかるであろう。

ところで、それから十年あまりのち、リックカートは、一九一五年に没したヴィンデルバントの跡をついで、翌一九一六年ハイデルベルク大学正教授となつた。そこで、かれはまたもやウエーバーと親しく交わることになる。すでにハイデルベルク大学を退職していたウエーバーは、そのころ宗教社会学研究に没頭していた。リックカートは、いくたの点でウエーバーがとくにフライブルク時代と比べて非常に人が変わったことに気がついたし、長期に及ぶ病気がかれにいやしがたいう傷跡を残していたことを認めた。折しも第一次世界大戦のさなかであり、前年には愛弟カールが戦死したこともあつて、ウエーバーの気持は厳肅になつていた。かれの好ましいユーモアがも

はや稀にしか聞かれなかったのも当然である。かれは禁欲的な、いや、ときには陰鬱な相貌をみせることがあった。しかし、結局ウェーバーは、青年時代のかれを知っていた人びとにとっては元のままであった。かれの政治的思考はけっして眠ってはいなかった。いや、それは「歴史家」から「社会学者」への移行にさいしてもすでにある役割を果たしたのである。こうしてかれにあつては社会学への方向転換をとおして理論的考察と政治的行為とが以前の時代におけるよりもはるかにたがいに近づいてきた。政治家にとつて社会学はいまや道具となることができたとみられている。

ウェーバーは研究者であり、政治家であつた。リツカートによれば、ウェーバーはこうした二面性をもつにもかかわらず、「分裂」性格の人ではなく、結局「すぐれて統一的」であつた。かれ自身は両者を区別しようとしたけれども、一方で学問的に世界を「呪術から解放し」、他方で自己の人格の魅力でもつて政治家として人びとを引きつけたとき、かれは「おなじマックス・ウェーバー」であつた。「それと同時に、ウェーバーは自己の存在をとおして、理論的態度と実践的態度との分離こそ、哲学が人間とその人生の意味とにかんして語らねばならない究極のものでありうるとする考えを論駁する。こうしてわれわれは、ウェーバーが哲学者であろうとはせず、事実「専門家」として哲学者ではなかつたと解する⁽⁶⁾」。このようにリツカートはヤス・パースのウェーバー像とは対照的に、「哲学者」ではなく「専門家」にとどまつたとするウェーバー像を終始抱いていた。

- (1) H. Rickert, *Max Weber und seine Stellung zur Wissenschaft, Logos*, 15, 1926, S. 226.
- (2) Marianne Weber, *Max Weber: ein Lebensbild*, 1926, Neue Auflage, 1950, S. 235. 参照。
- (3) Rickert, *op. cit.*, S. 226.
- (4) *Ibid.*, S. 228.
- (5) Marianne Weber, *op. cit.*, S. 393.
- (6) Rickert, *op. cit.*, S. 237.

ヤスパースとリックカート

ここでとり上げたヤスパースとリックカートのウェーバー像がいかに対照的であるかは、これまでの叙述からも察知されよう。つまり、実存哲学者ヤスパースはウェーバーを「哲学者として政治家、哲学者として研究者」と解し、かれの本質を「哲学者」、「真の哲学者」ないしは「実存的哲学者」に求めるウェーバー像を描いた。これにたいして、批判哲学者リックカートは、ウェーバーが「歴史家」から「社会学者」へ移行した点に注目しつつ、「哲学者」ではなく「専門家」にとどまったとするウェーバー像を描いた。それというのは、かれが少年時代いらい歴史的知識旺盛なウェーバーをあまりにも知りすぎていたせいであろうか。

このさい、注目されてよいのはつぎの点である。すなわち、ヤスパースがウェーバーの人間と思想に完全に傾倒しつつ自己の実存哲学をウェーバーのうちに投影しているのにたいして、批判

哲学者としてのリツカートはウェーバーが「哲学者」ではなく「専門家」にとどまったとして批判していることである。こうした対照的なウェーバー像がみられるのは、これを描いた二人の哲学の体質的な相違によるのであろうか。

ヤスパースとリツカートのかかわりについてみれば、一九一六年後者が哲学正教授としてフライブルクからハイデルベルクに転じてきたとき、前者はおなじハイデルベルク大学哲学部の心理学私講師であった。リツカートは一八六三年ダンチヒの生まれ、ヤスパースは一八八三年オルデンブルクの生まれであったので、二人のあいだには二十歳の年齢差があった。すでにふれたように、ヤスパースは一九二六年心理学員外教授となった。かれは一九二二年哲学員外教授に転じ、この年ベルリン大学へ転出したハインリヒ・マイアーの跡をついで、翌一九二二年哲学第二講座担当の正教授となった。だから、リツカートとヤスパースは一九一六年以降おなじ学部で講義をしてきたわけで、とくに一九二二年以後は哲学講座の同僚となった。とりわけ、一九二二年からかれらはそれぞれ第一講座、第二講座の担当者という関係にあり、一九一六年以前の二人の関係は、リツカートが一九三六年に死去するまで二十年間つづいた。こうした二人の関係については、ヤスパースが一九五三年にバーゼルで執筆し、のちにかれの『哲学と世界』（一九五八）に収録された「哲学的自伝」のなかのリツカートにかんする部分が参考になるとおもわれる。

それによると、ハイデルベルク大学に着任早々のリツカートは若い人たちと話をすることを喜びとした。かれらはしばしば会って、なんの遠慮もなく討論したようである。ヤスパースもかれ

のところでは無作法御免であった。ヤスパースはもともと精神病理学と心理学を専攻していたので、ヴェインデルバント・リッカート学派つまり西南ドイツ学派の主張する「哲学と心理学との絶対的分離」とはまったく関係がなかった。かれはリッカートと初対面するとき早くも、「貴君は一体何を指望みですか？」と聞かれた。「貴君は二兎を追っています、精神医学を止めたのですか、それに哲学者という柄でもないでしょうね？」とリッカートがいったとき、ヤスパースはそれにしたいてつぎのように答えた。「わたしは哲学講座の一つを受けもつでしょう。大学で哲学と呼ばれるものの漠然とした形を考慮すれば、わたしの仕事は、何をしようと講師の自由に従うことになるでしょう。」かれのいう「こうしただうしき」をリッカートは心から笑った。

ヤスパースの『世界観の心理学』（一九一九）にたいしてリッカートは不機嫌であった。これは、さきにふれたウェーバーのこの本にたいする評価とは正反対であるといえる。ヤスパースからこの本の校正刷を示されたとき、リッカートは、そのなかで「価値体系」の構想としてフーゴー・ミュンスタールク、マックス・シェーラー、リッカートらが並べて引用されている一つの注を取り消すようにと切に勧めた。その注は些細なことなので、ヤスパースは喜んでリッカートの望みをかなえた。この本の公刊後、リッカートは『ロゴス』にかれの意向では否定的な批判を書いたが、まだヤスパースに致命傷をあたえないだけの好意ある心根を残していた。こうしたやりとりが二人のあいだにあったことを、ヤスパースは率直に記している。

かれは、一九二二年にいたるまでの数年間に及ぶリッカートとの何度もの話しあいにおいて、

自己の思索の展開にとつてつぎの一つの問題が何よりも重大だとおもつた。すなわち、リッカードが「科学的哲学」を普遍的かつ必然的に妥当するものとしようとする要求をもっていたのにならして、ヤスパースはこうした要求を疑つたことである。たしかに、以前からヤスパースにとつては科学的認識は不可欠の生命の糧であつた。しかし、科学的認識だけではかれは満足しなかつた。「真に科学的であるものは、自己の限界を知っている批判的知識であつた」とかれにはおもわれたからである。スピノザを読んでいらい、かれは、哲学的洞察をもたらしはするが、それだからこそ科学的には通用しないある仕方では思案した。しかし、こうした洞察は当時のかれの研究にとつては何の効果ももたらさなかつたようである。

ところが、このことがかれとリッカードとのあいだでいつもくり返される論題となつた。ヤスパースは、リッカードの哲学をその科学的要求にかんじて攻撃した。つまり、かれの攻撃の的はリッカードの「価値体系」にしばられた。そして概してかれは、リッカードの哲学がけつして一般の賛成をえられるものではないと強調した。と同時に、かれは、科学とはまったく異なるものとみてよい哲学にかんする一つの考えを展開した。すなわち、哲学は、科学の知らない真理への要求を満足させるべきであり、科学とは関係のない責任をもち、あらゆる科学が到達できないという何かをやり遂げるものだという考えである。こうした考えにもとづいてヤスパースはリッカードの思考の形式に反対して、「リッカード自身はそもそも哲学者ではなく、物理学者のように哲学に従事している」と言明した。つまり、ヤスパースは、物理学者なら自己の思弁をリアリステ

イックに検証するとき、実際に何かを認識するのに反して、リッカートは「全体としてシャボン玉の泡のような、洗練されすぎた理論的展開」をしているにすぎないと声明した。こうして哲学の本質をめぐって二人の考えはまったく平行線をたどることになった。

しかし、ヤスパースは、リッカートが「明敏な思想家」、「教養の高いゲーテ愛好家」、「文筆家としての才能がある人」、「学部内では抜群の人物」であることを認め、かれが「マックス・ウェーバーの友人」であることをも知っていた。ウェーバーの生存中はさきの『世界観の心理学』の存在はあらゆる良好な可能性の防壁のようであったし、同時にリッカートの自信を制限するものであった^[1]。このように述べるヤスパースは、かれとリッカートのあいだに占める「マックス・ウェーバーの存在」が示す力が絶大なものであったことを認めている。

かれによれば、ウェーバーは歴史家、国民経済学者、社会学者としてえたかれ独自の方法的見解をリッカートの『自然科学的概念形成の限界』のうちに再認していた。ウェーバーはきわめて過度に謝意を示していたので、こうした論理的諸問題においてはたえずリッカートを引きあいに出し、いくたの自己の叙述がリッカートの思想の単なる帰結と応用であるかのようにおもわせた。事実、かれはのちに「社会学の基礎概念」の「緒言」のなかでリッカートのこの本を挙げている。

ウェーバーが一九二〇年六月十四日に亡くなったとき、ヤスパースは「この世が一変したかの

ような気持」がした。「わたしの意識にたいしてこの世を是認し、魂を吹き込んでくれた偉大な人は、もはや存在しなかった。マックス・ウエーバーは権威であつたが、けつしてお告げを下すこともなければ、責任を減らす権威でもなく、ひとを鼓舞する権威であつた。このことは、かれの人間の思索の厳しさと清澄さの点で人びとの同意が確かめられていた⁽²⁾」。このようにヤスパースはウエーバーの死について語つて、これから受けた打撃を率直に告白した。

ウエーバーの死後、ヤスパースははじめはリツカートを訪れることをためらつたが、五日後によく意を決して訪れた。はじめのうちはかれらは感動の言葉を二言三言交わした。それについて、リツカートはウエーバーを「自分の弟子」として語り、ウエーバーのすぐれた人格は認めるが、「かれの著作は悲劇的に崩壊しており、こうした認識の影響はあまり期待できない」と強調しはじめた。これを聞いて怒つたヤスパースは、おもわずつぎのように叫んだ。「貴下が自分の哲学にかんして将来もひとに知られるとおもうならば、それは、マックス・ウエーバーが自己の著作を書くさいにつけたある注のなかに、論理的見解にたいして感謝を示した人物として貴下が出てくるからだけです」。こうした口論があつていろいろ、二人の関係は当然うまくいかななくなつた。

それから二、三週間後、ヤスパースはハイデルベルク大学学生組合の依頼によりウエーバーのための追悼講演をおこなつた。その内容を読んだリツカートはヤスパースの訪問をうけて、怒りをこめてかれに向かつて叫んだ。「貴君がマックス・ウエーバーから一つの哲学をつくり出すこと

は勝手ですが、貴君がかれを哲学者と呼ぶのはナンセンスです」。それらしいヤスパースにとつてはリッカートは「わたしの敵」となり、二人の関係は決裂した。にもかかわらず、ヤスパースは、リッカートにはすぐれた点があることを認め、何よりも「かれにはユーモアがあった」点を認めている。

ヤスパースとリッカートとのこのような対立は、基本的には何に起因するのであろうか。それは、リッカートが「科学的哲学」の立場をとつていたのに反して、ヤスパースがつぎのような哲学的立場をとつていたことに起因する。かれは、リッカートと討論するうちに「ウェーバーを顧慮しながら」明らかになった二つの哲学的前提としてつぎのものを挙げる。すなわち、その第一は、科学的認識が哲学的思索における不可避の契機であること、その第二は、科学とおなじ意味では必然的かつ普遍妥当的ではない何らかの思考、つまり哲学的思考 (*das philosophische Denken*) が存在するということである。こうしてかれが一九六九年八十六歳で亡くなるまで一貫してもつていたのは、一つには「科学への不断の関心」、二つには「哲学的思考への関心」である。結局、かれにとつては科学の側からの哲学の軽視と哲学の側からの科学の軽視は耐えられないものであった。そして、研究する人間と認識されたものの内容とが分離できる科学とは異なり、哲学的思索においては人間はかれの哲学的思想 (*der philosophische Gedanke*) からは分離できない。人間から遊離できるような哲学の問題はけつして存在しない。ここには、「科学的哲学」を求めるリッカートとは相いれないヤスパースの基本的立場がある⁽³⁾。

さきにヤスパースからウェーバーへいたるわが道からはじめて、ヤスパースのいわゆる「人間にかんする諸科学」と実存哲学との関係、ウェーバー社会学の位置づけにふれた。そのあとで、ヤスパースおよびリッカートとのウエーバーとのかかわりや、ウエーバー像をめぐるヤスパースとリッカートとのやりとりとその根底にある二人の哲学の基本的な相違にもふれながら、かれらの対照的なウエーバー像にアプローチしてきた。ここでは、ウエーバーが「哲学者」であるかどうか争点となつて相異なるウエーバー像が生まれたといえよう。ヤスパースがウエーバーを師とも仰いで畏敬の念をもつてかれに密着していたのにたいして、リッカートは少年時代いらいの友人としてかれに親しみをもつ反面、一步距離をおいてかれをみつめていたようにみえる。つまり、前者が実存哲学者としてウエーバーを自己と一体化してとらえたのにたいして、後者は批判哲学者としてかれを批判的にとらえたといつてよい。両者の対照的なウエーバー像をみると、その根底に実存哲学と批判哲学という二人の哲学の体質的な相違があるようにおもわれる。

初期に法律学に志向し、中期に経済学に志向したウエーバーが後期に社会学に志向して初期いらいの政治、宗教、法、経済などにかんする関心と歴史的関心とを打つて一丸とする歴史的・体系的社会学の形成を企てた点については、他の機会にふれた¹⁾。そうした歴史的・体系的社会学を構想するにさいして、かれは方法論上哲学を検討したわけである。そうだとすれば、ヤスパースのようにウエーバーを「哲学者」、「真の哲学者」まして「実存的哲学者」とみることは行き過ぎである。また、リッカートのようにかれを「哲学者」ではなく一個の「専門家」に限定するこ

とも行き過ぎである。逆に、ウェーバーは「社会学者」として哲学にかかわっただけで、「哲学者」といふべきでもなければ、一個の「専門家」といふべきでもない。このようにみえてくると、哲学をも無視しない「社会学者」にウェーバー像を求めることが妥当だとおもわれる。

最後に、わたしがこのようなウェーバー像を提示したのには理由がある。それは、一九六四年四月ウェーバー生誕百年を記念してハイデルベルクでおこなわれた第十五回ドイツ社会学会大会の議事録、オットー・シユタンマー編『マックス・ウェーバーと現代社会学』のうちにみられる編者のつぎのような開会の挨拶に触発されたからである。すなわち、マックス・ウェーバーの評価をするにあたっては、今日一つにはつぎの点で批判的におこなわれなければならない。「それは、自己の思考と体験においてウェーバーの影響下にあつた世代が描いた『マックス・ウェーバー像』のようなウェーバーの精神的形姿を公平な距離において批判的に評価しなければならないであろうということだ^①」。ヤスパースもリツカートもともに、ここにみられる「自己の思考と体験においてウェーバーの影響下にあつた世代」であつたことはいうまでもない。そうした世代に属するかれらのウェーバー像を比較検討しながら、「公平な距離において批判的に評価し」て第三のウェーバー像を提示することがわたしの意図であつた。

(1) K. Jaspers, *Philosophische Autobiographie, in Philosophie und Welt*, 1958, S. 309.

(2) *Ibid.*, S. 310.

- (3) ヤスパースのこうした哲学的立場については *Ibid.*, S. 318-319. 参照。
- (4) 前掲拙著、「序」参照。
- (5) O. Stammer (Hrsg.), *Max Weber und die Soziologie heute*, 1965, S. 9.

(出典…名古屋大学最終講義、一九七七年一月二十六日。阿閉吉男『ジンメルとウェーバー』御茶の水書房、一九八一年、所収)

現状分析をすすめるためのいくつかの基本的視点

北川隆吉

現状分析を行なうためには、それが明示的であるか默示的であるかはともかく措くとして、第一に、いずれかの過去の時点との比較において現状の特質・特性をあきらかにすること、つまり継時的かつ定量的な比較がおこなわれること、第二は、形態的側面とともに、定性的、質的な特性があきらかにされること、この場合は必ずしも継時的であることが必要となるのではなく、ホリゾンタルな文化比較であつてもよいが、ともかく質的な特質の解明がすすめられること。そして第三には、一定の現象、現状の特質の形成、存在を誘発した要因相互の因果連関の解明をおこなうことがなくてはなるまい。これらの点をふまえた上で、現状分析の方法そのものが、それぞれに、個性的であることは、いかなる形のものであれ許容されるべきである。しかし、少なくとも上記の三点ばかりのことは、——もちろん他にいくつかを加えてよいが——現状分析の際、まもられてしかるべき必須の要件あるいは前提といつてよからう。そのことをふまえて、ここでは、わが国の現状分析の前提であり、基礎的とも考えられる現実的要素の二、三をあげておきたい。わが国の現状分析をすすめるのは、全体社会の変化あるいは動向を全体的・総合的にあきらかにすることでもあるはずであるから、それを規定する重要な要因を摘記しておくべきだと考えるからである。

紙幅の制約もあるので、要点的、箇条書き的に、統計その他は一切省いて、論点のみを示すこととする。

まず第一は、わが国社会の内的構成の根幹である人口構造の移動、現状の構成の特質の分析の必要である。この領域の問題の解明の必要が、戦後社会では、さし迫ったものとなったことが少なかつたために、わが国の社会学的研究のなかで、「人口」についての深い考察はほとんどおこなわれなかつた。そのことの可否は、いまここでは問わないとしても、すくなくとも、六〇年代から七〇年代にかけての大量の人口の地域間移動や、産業別人口分布の急変や、出生率の低下がもたらしている社会的効果などを無視したり、軽視したりすることはできないであろう。

一、二の例示をあえておこなえば、第一次産業部門従事者が優位を占めている状態と、第二次産業部門従事者への人々の移動、それは都市への人口移動とオーバラップしているものもあるが、そのことが家族構成なり、社会関係あるいは生活の様態そのものに、いくつかの重要な変化をうみだしていることはあきらかである。

また現在、小・中・高・大学をとわず、一クラス程度の人数で、長男（女）、二、三男（女）別をきいてみれば、特殊な場合をのぞいて、四分の三ないし三分の二は、長男、長女である。このことよって、就職の構造が変化している場合もあり、先行きの高齢化する親たちの扶養の問題は、きわめて深刻なものとなりつつある。これが、地域生活のあり方や、福祉・保障問題への人々の関心をつよめている原因でもある。同時に個人の（自由）の確保への強い願望ともなっている。

そして、すでにそうした問題は、将来の問題ではなく、現実の問題として、存在し、進行しつつあるのである。

人口の側面に限定し、しかもやや大げさにいえば、明治以来のわが国の近代社会の歴史のなかで、人口構造、構成の上での不可逆的な変化が、ここ二十年ほどの間に顕著にあらわれてきている。現状分析が、その底に未来予測を必然的に大なり小なり伏在させるものであるとすれば、「人口」問題およびその波及効果について、われわれとしては、なんらかの分析あるいは洞察が必要となると考える。

第二番目の領域、問題としては、一括していえば技術革新の進行に関することがある。これについては、二つの側面がある。一つは、生産現場（事務部門もふくんで）での側面と、他の一つは市民の日常生活での側面との両面である。後者については現在ニューメディア問題が喧伝されはじめているが、綜括すればコミュニケーションの総過程に変化が生じつつあることであり、それが何をもたらすかである。前者については、象徴的にいえばロボット・コンピュータなどの利用、使用の日常化の問題である。わが国が世界第一位のロボット保有国であることが、いま国内外でどのような問題をはらんでいるかは、時々刻々にあきららかとなり、深刻な問題を生みつつある。しかもこの傾向は、強化こそすれ、弱化はしない。現状にとつてのみならず、今後にとつて無視軽視することのゆるされぬ問題であろう。それが、個別の企業内の労資関係においても、ナショナル・ワイドな労働戦線問題についても、重要な規定要因となつていくことへの省察が必

要となろう。

ここでも、一、二の現実的な事例をあげておこう。

高齢化社会の伸展のなかで、老人たちに限ったことではなくよりひろくいえるのだが、これまでそれぞれの人間が習得してきた技能なり経験なりが、今後の技術革新のもとでは、一挙に烏有に帰してしまうこととなる。現在「窓際族」といった言葉が流行しているが、それは「窓外族」の一步手前ということである。すでに欧米では失業者が一〇%台をこえているが、ロボットの利用などはさらにその率をひきあげることとなるとする警戒感が、ILOでも、OECDでも強まりつつある。配置転換でとどまっていればともかく、失業ともなれば、それまでの「経験」は無にひとしくなる。しかも、こうした変化が、一生のうちにくたびおしよせるとすれば、それがなんらかの社会的効果、変化をうまないわけにはいくまい。

また、当然のことながら、こうした問題は生産コストとかかわっており、低廉な労働力をもとめるとすれば、それは国外でのその獲得へとおもむくこととなる。つぎにふれる国際化が、軍事力によるものではないにせよ、侵略的、強圧的なものとならない保障はどこにもない。とりわけそれは環太平洋地域についておこるであろう。その際の挺子は、技術であり、工業化路線である。こうした「新しい」方向への転進への重要な要因として、わが国の「技術立国」路線があることを見のがすことはできまい。

第三には、これとふかく関連して、ますます重要さをましている国際化の問題である。これに

は、たとえば現在の世界資本主義の問題とか、国際金融機構、通貨制度といった大問題もふくまれるであろうが、それらをすべてとり扱うか否かは別としても、アジアにおいて、国際的諸関係のなかで、わが国がいかなる位置と関係を保持していくかといった視点は、現状分析の上では非とも必要と思われる。今日のわれわれにとって、よしんばそれが直接的でないとしても、国内的な問題は、国際的問題であり、また逆の関係になっており、両者の相互規定的関係は、ますます強まりつつあることは事実である。

日常的問題としていえば、海外への旅行者数は、二十年前とくらべて比較にならぬ増加をみせているし、諸外国からのわが国への来航者もふえつつある。このこと一つをとってみても、その影響や効果がいかなるものであろうかは、いまでは測りがたい。しかし、それらの事実が、なんらのインパクトをも、われわれにあたえていないとは、考えられない。

こうした日常的な問題から、高度に政治・経済的側面の問題まで、ともかく、われわれは、われわれ自身の現状の国際的位置について、たしかめること、およびそれと国内的諸変化との関連を、みきわめることは、今後ますます大切なこととなるであろう。

以上、わが国の現状分析の上で、前提的におさえておかねばならぬと考える問題、そしてそれは分析をすすめるにあたって、それとの関連やそれらのもつ規定性を明確にさせておかなくてはならぬものとして、三つの点をあげてきた。分析をすすめる上ではこれをさらにこまかく分節化し、具体化し、諸現象との媒介項を見つけ出し出していかななくてはなるまい。そのことは、ここでは

おこなわれていないのだが、現状分析にあたっては、現段階を現段階たらしめている基本的要因をあきらかにし、たとえば特定の社会体制にとつて一般的な特性を述べるだけでなく、現段階に固有の特性・特質が抽出さなくてはならない。そのためのいわば外枠とよんでもよい問題点を、ここでは指摘することとした。

これらの点を、さらに個々人、市民などの主体的条件や意識にまでたち入って考察するのは、次の作業となる。一つの補足的意見として、以上の視点を提示するにとどめる。

なお、おわりに附言しておけば、現状分析をすすめるにあたって、とくに人々の意識や行動様式などにわたつて言及する場合、八〇年代から九〇年代にかけて急激な世界的変動期をむかえるにあたって、現象記述的であつたり、実証主義的であつたりするだけでなく、思想的考察ないしは文化論的視角がとりわけ必要となろう。強いていえば、それを欠いてはならないと考へている。つまり、表層的事実の把握から、事象に内在する質的要素を掘り出し、それを全体的構造との関連において、しかも規定的土台と結びつけて明らかにすることが、より一層必要とされてくると考えられるからである。

(出典：『社会学評論』三十四卷二号、一九八三年)

卒論と大学のオートノミー——『卒論必携』へのまえがき

折原浩

ここに『卒業論文執筆必携』が編集されて、四年生の諸君に手渡されるにあたり、一言、まえおきを述べさせていただきます。

「卒論の比較歴史社会学」は、わたくしとして、いつか手を染めてみたいと思っているテーマであるが、残念ながら、いまだ機会をえない。しかし、「卒論」はおそらく、西洋中世のツンフト (universitas) としてのローニャ型大学で、その主体的構成員たる学生が、みずから学問的カリスマを証明し、「師匠 magister」の資格を取得するための要件として、創設されたものである。それが、十九世紀初頭、「フンボルトの大学理念」にもとづく近代型大学（代表例としてベルリン大学）に継受され、これを範として、わが国の大学にも移入されたものと思われる。この間、卒論が、学生と教師にとり、また卒論を仕上げて無事合格した卒業者を受け入れる社会にとつて、いかなる意義を帯び、この意義がいかなる変遷を遂げてきたのか、を比較社会的に考察するの
が、上記テーマの課題である。

それはともかく、わが国の現状をみると、卒論がこれほど軽んじられている社会状況はないといっても過言ではあるまい。昨年夏休み明けの卒論中間発表会のさい、四月の構想発表会のレジユメと照合しながら、ひとりひとりの報告を聴いたところ、その間、ほとんど進捗がみられない

のを知って愕然とした。これで、残り四カ月足らずのうちに、はたして作品を仕上げられるのか、と心配したものである。ところが、いざ最終提出物を読んでみると、みな、けっこうよく書けており、なかにはすぐれた論考もあつて、当初の危惧は杞憂に終わってくれた。思うに、夏休み中は、みな、就職活動に奔走していて、卒論など、ほとんど手につかなかつたのではあるまいか。

この経験から考えると、本学の学生諸君は、よい素質と能力に恵まれている。ところが、学問は、素質と能力に加えて、なによりも集中の持続を必要とする。これがなければ、よい作品は仕上がらない。そうした集中の持続を、学業期間中であることを承知しながら、割り込んで中断させ、あるいは少なくとも攪乱するのが、①企業の「青田刈り」（近視眼的な人材漁りのエゴイズム）であり、②大学を就職予備校であるかに思いなして入学し、就職活動を優先させる学生と家族の短見であり、③これらに抗議して、制度上、求人・求職活動を卒業後に繰り延べさせ、在学期間中は学業に専念できるようにして、学問・教育の府としてのオートノミーを確保し、その責務をまつとうする方向に、改革していこうとしない、大学教師一般の事なかれ主義である。

いずれも、状況論としては、無理もないといえるかもしれない。しかし、原則論としては、近代社会とは、諸君も知つてのとおり、産業・政治・学問・芸術などの諸領域が、社会的分化を遂げ、それぞれがオートノミーを取得し、相互に尊重しあつて、それぞれの責務を果たしあつていくような社会でなくしてなんであるう。とすれば、卒論をめぐる上記の現状は、わが国が、ポストモダン論議華やかな影で、実態としては依然として近代社会の体をなしていない、という実情

の証左ではあるまいか。

では、学問・教育の府としての大学に固有の責務とはなにか。それは、状況の〈流れに抗して〉、右顧左眄することなく、原則的に間違っていることを「それは間違っている」とはっきりいえるような、批判的理性をそなえた主体を育成し、わが国がふたたび、とんでもない方向に流されていくのを防ぐことであろう。あるいは、もつと積極的にいえば、「国家百年の計」を案ずるのが政治家の任務であるとすれば、二十世紀の地球と人類のあり様を見通して思考を凝らすのが研究者の責務である。そして、諸君は、将来、たとえ大学や研究所を職場とする狭義の研究者になるのではなくとも、それぞれの職業現場で、未知の問題に挑戦する広義の研究者として生きていつてほしい。

しかし、わたくしたちは、この現実から出発する以外にはない。その第一歩は、諸君が、卒論への集中を妨げるような、状況の〈流れに抗して〉、卒論執筆への集中を持続し、教師も、その作品を、もつぱら学問的な観点から、厳正に評価することであろう。

こうした方向への一助として、今回この『卒論必携』が編集された。資料蒐集・独自編纂・印刷・製本などの労をとられた丹辺宣彦講師と院生の石原紀彦君に、記して深く感謝したい。(一九九七年四月七日)

(出典…名古屋大学文学部社会学研究室編『卒業論文の TATSUJIN への道』一九九九年)

第三部

歴代スタッフのメッセージ

本田喜代治先生

中田實

本田先生のプロフィールを描くことは私の力の及ぶところではないが、編集委員会のお求めなので、亡き先生はじめ各位のご寛容をお願いして、先生の名大在職中のご様子の一端を、当時ご指導をいただいた学生の一人として記してみたい。

発足したばかりの名大文学部社会学研究室は、物的な教育・研究条件は劣悪をきわめたが、精神的には、戦後民主主義の息吹きとそれが早くも「逆コース」期に入っていた緊張感とを反映して、日本社会の非合理性の徹底的な剔抉と民主的社會建設の理論の探求への熱気をはらんでいた。その先頭に立たれたのが本田先生で、広い視野と現実的關心からさまざまな問題を提起され、議論を呼びかけられた。

先生は、社会について具体的実践的に問題を確立してこれを徹底的に追求するとき、そこに社会学が存在するといわれ、これからの社会学の勉強のためには、フランス革命、明治維新、史的唯物論の研究が欠かせないと繰返された。しかし、どちらかというと実直で学問研究の訓練もされておらず、学問への厳しさを体で示してくれる先輩もいない当時の学生たちは、先生の展開される鋭い現実批判と広く深い学識に魅せられつつも、茫漠とした社会学の大海の中で、問題意識と現実分析能力との乖離に悩み、頼りなげにただよっているといたった状態にあったことは否定で

きないであろう。

そのこともあつてであろう、先生は、講義では、東洋文化史の白鳥庫吉博士の例をあげ、「出来上った御馳走を出すより、台所での料理の仕方を見せたほうがためになる」といわれて、民族問題、アジア的生産様式論などの講義ではこの方法をとられた。先生の自伝『旃陀羅の子』（法政大学出版局、一九七〇年）では、「自分の台所を見せながら講義のできる先生はよほどの実力と自信のある人にちがいがなかった」と白鳥博士を評しておられるが、日本の問題を世界（史）的視野においてみようとする本田先生のこれらのご研究には、先生の確信と次の世代がそれをひきついでいくことへの期待がこめられていた。

先生は研究室が活発な討論による切磋琢磨の場となることを求められた。その具体化の一つが、演習「社会学の諸問題」である。それは本田教授、阿閉助教授、高橋助手をはじめとして、院生から学生まで、研究室の全員が集まって、報告・討論をするものであつた。この形式は、残念ながらその後姿を消してしまった。もう一つが各種の研究会の組織化である。その指導のために、先生は、当時教養部におられた田中清助先生（社会心理学研究会）、福祉大の三浦文夫先生（農業問題研究会）にご協力いただくことをお願い下さったようである。また、実証的研究の重要性も認められ、研究室をあげて豊田市の調査にとりくんたのも、私たちには楽しい思い出となっている。

これらの研究活動を基礎に、研究室の機関誌として『研究室月報』（実際はとても月報とはなら

なかった)が刊行された。その創刊号に書かれた先生の「そのもとに帰るべし」は、短いものながら、本田社会学の特質をきわめてよく示している。

先生は一九五五年以来、文学部長、学術会議会員としてご多忙な日々を送られたが、どちらかというと小柄な体躯には似合わないスケールの大きい構想と、あの柔らかな容貌にふさわしい暖かく陰日向のない、そして本質的に民主主義的な態度とを随所で遺憾なく示され、教職員、学生の誰からも敬愛の念をもたれていたことは今に語りつがれている。

(出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年)

本田さんと知り合ったころの思い出

平山高次

今ふりかえってみると、本田さんとの交わりは三十数年間にも及んでおり、今さらながらずいぶん長いあいだ変わらぬものだったなと感じる。どういう機縁で知り合ったのか、その辺の事情はよくは憶えていないが、たぶん出版社関係を通してであったように思う。

本田さんが『コント研究』を出された翌年に、私は現在岩波文庫に入っているベルグソンの『道徳と宗教の二源泉』の翻訳を同じ芝書店から出版した。こうした関係で私は同書店によく出入りしていたし、本田さんが親しかった同書店主ともよく会っていたので、本田さんとは同学でもあるし、何よりも好ましいようなお人柄だったので、いつとはなしにおつきあいするようになったようである。たまたま友人の見田石介君が本田さんのお宅から中央線をはさんであまり遠くないところに住んでいたのです、私は同君のところへ散歩がてらによく出かけていったものである。

その行きか帰りに、時には見田君とともに、お宅にお邪魔したことがたびたびあった。私は昭和十年前後の数年間、下落合に住んでいたが、本田さんと最後のお別れをした落合火葬場前から本田さんのお宅の近くを通って見田君宅まで歩いていったものである。別に用件もなしの、約束もなしの、突然の訪問だったが、そんな場合も本田さんはいつも気さくに迎えて下さったものである。本田さんがどんな相手にもいつも気楽さと親しみを感じさせる何か庶民的なお人柄だった

からである。学者というものは何か気むずかしく親しみにくいというのが一般であるが、本田さんはそういう気配は少しもなく、人間味豊かな思想家というタイプの方であった。

戦後、名古屋大学に赴任されていくばくもなくして、本田さんのお話によつて私も同じ大学に勤めるようになり、学問上でも、公私の生活でも、種々の思い出が次々に浮かんでくるが、今は故人のお人柄の一端を偲ぶがにもと、一文を綴った次第です。

（出典…『日々の糧——本田喜代治追悼文集』一九七三年）

本ちゃん

阿閉吉男

本田喜代治先生をしのぶ文集に一文をもとめられ、さて何を書いたらよいかと一瞬とまどった。それというのは、先生と名古屋大学文学部で一緒に勤務しただけでも昭和二十五年から昭和三十五年までの十年間にわたるために、思い出すことがあまりにも多く、短文でまとめることは不可能だからである。そのほかに、先生とご一緒したのは第二次世界大戦末期の世界経済調査会での一時期や、さらに終戦直後の総合アメリカ研究所での一時期もあるので、なおさら思い出すことはふえるばかりである。そこで、戦時下のほんの一時期のことだけについて記してみたい。

思い起こしてみると、本田先生に面識をえたのは東京社会学研究会の例会のときで、たしか昭和十六年の末ころ、会場は神田の学士会館であった。この研究会は松本潤一郎先生や田辺寿利先生が中心となって催されていたもので、この方々はいずれも東大社会学科の大先輩である。その例会の折、本田先生に紹介の労をとっていただいたのは、わたしが学生時代から存じ上げていた田辺先生であった。

当時、わたしは東亜研究所に勤務していた。ここは企画院所管の国策機関であるために、自主的研究にはほど遠かったものの、勤務はわりにのんびりしていた。わたしは欧米の社会学書を読むことに専念していた。そのころ、本田先生は世界経済調査会編集課長を勤めておられたけれど、

フランス社会学研究の先達としてわたしの眼には映っていた。わが社会学研究において先生の著作から多くの示唆を受けていたからである。

その後、わたしは自主的な研究を求めて、昭和十八年はじめ東亜研究所を辞めた。その年の春から終戦直前まで世界経済調査会嘱託を勤めることになった。上田作之助さん、杉本俊朗さん、土屋保男さんがおられたドイツ経済研究部に籍を置き、週二回日本橋の事務所に通った。法政大学、共立女子薬学専門学校で社会学とドイツ語を教えるかたわらの勤務であった。こうして世界経済調査会の事務所では、本田先生とお会いする機会は当然ふえたわけである。

あるときは、土屋さんたちと一緒に神田の中華料理店で、戦局の見通しについて本田先生を囲んで語りあったこともある。そのとき、先生は透徹した予見をされていた。土屋さんたちは小柄な先生にずいぶん親しみを感じていたようで、略して「本ちゃん」という愛称で呼んでいたのをしばしば耳にした。いまでは、これも懐しい思い出である。

（出典…『日々の糧——本田喜代治追悼文集』一九七三年）

平山高次先生

板倉達文

先生にはじめてお教えいただくようになったのは、私が教養部一年のときであるから、もうかれこれ二十年近い昔のことである。いま二十年と書いてじつさいのところ自分でも驚いているのであるが、これはずいぶん昔のことである。ところが、昨年十一月の社会学研究室三十周年の記念の折にお見かけしたお姿は、当時とあまりお変わりがない。先生は当時もいまも、飄々としてしかもどこか精悍で、そして時折、やさしい目をされる。

教養部の頃の先生の講義はいつも大盛況であった。ところが私は遺憾なことに、先生の当時の講義内容を社会学そのものについては、ほとんど思い出せないのである。不出来な学生のつねとして、説明のための事例のみを頭に刻んでしまつて、何を説明する事例だったのかはどこかへ行ってしまふのである。

よく小説家林芙美子の話をなさつた。「おふみさん」と呼んでいられた。どうも先生が熱を上げられたのかあるいはその逆か、あるいはそのいづれでもなかったのかはつきりしなかったが、とにかく「おふみさん」の話はしばしば出てきた。「おふみさん」の時代の先生は、髪がふさふさとして真黒でいらしたのだそうである。いつも両手でそのふさふさの状態をあらわそうとされた。その度に当時の我々は、あの先生のお顔と真黒のふさふさの髪を頭の中で思い描こうとして成ら

ず、なんとなく落ち着きを失ったものである。

次によくなさったのが、いまの大学出のサラリーマンはかわいそうだというお話であった。先生が大学を出られたころは、新卒の給料が百円近くだったそうで、三食付下宿が二十五円、残りの七十五円をどう使ったものか、毎月々々頭を痛めたものだというお話であった。そのお話の都度、先生は、ほんとに困った、という表情をなさったのである。いま考えなおせば現代のホワイトカラーあたりについての説明だったのかなあとも思うのであるが、とにかく私は、金が余ってほんとに困るという状態の可能性やいかに、などと考えこんでしまい、そのお話の前後はすっかりぼやけてしまった。

大学院に入つて再び我々は先生からお教えたことになった。サン・シモンの『産業者教理問答』の講読であった。ここではじめて我々は先生の、いわば本格的なお姿に接することになる。あるいはその凄さをかいまみれるようになったといふべきか、とにかく厳しく面白い講読であった。平凡とみえる一句にどのくらいの背景があるかをしばしば説明された。もう「おふみさん」も出て来ず、もっぱら古典の厳密な読み方というものを仕込もうとされたのである。毎回、かなりきつい分量をこなさなければならなかったのであるが、当時の院生（鈴木俊道、吉田啓子、鵜飼照喜、の各氏と私）全員ほぼ皆出席で、一年間で『教理問答』は読了した。一般に講読の教材が読了されることは稀である（と私は思う）から、これは特記すべきなのである。

先生の講読の時間は一年きりでなくなった。サン・シモンを全部通して読んでみたいと思いは

じめていた私は、残念だった感じをいまも憶えている。

教えを受けた先生方に対する思い出の中には特に、どこか偏ったものが入るものである。平山先生のことを思うたびに、私はついつい、林芙美子を考え、黒髪ゆたかな先生を考えて困惑し、七十五円を使いあぐねて困って見えるお姿を想像し、そして最後に決定的に、講読の時間にきびしいお姿へと行き着く。

思い出すに畏敬の念と愉快さをもつてすることのできる師をもちうることは、人生における一つの幸運である。御健勝をお祈り申し上げます。

(出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年)

阿閉吉男先生

佐々木光

阿閉吉男教授は、東大社会学科をご卒業後、同大学院、共立女子薬専教授、静岡大学助教授等を経て、昭和二十五年四月、本学助教授（文学部）（なお教授ご昇任は、昭和三十五年四月）として着任された。以来、昭和五十二年三月、定年ご退官、同四月本学名誉教授、創価大学教授にご就任になるまで、じつに二十有七年にわたって本学文学部社会学講座において研究と教育に従事された。うち講座主任教授としてのご勤続は約十七年間。この間各方面に及ぶ多くの有為の人材を育てられた。それとともに、近代社会学の理論、とくにゲオルク・ジンメルとマックス・ウェーバーの社会学理論（前者については、哲学理論も）の研究において、あまたの輝かしい業績を残された。さらに、定年ご退官後においても『ジンメル社会学の方法』（御茶の水書房、一九七九年）、編著『ジンメル社会学入門』（有斐閣、一九七九）、『ジンメルの宗教的世界』（『ソシオロジカ』第四卷第一号）、『ジンメルとウェーバー』（『現代思想』第八卷第一号―第二号、一九八〇年）と最近においてもつぎつぎ業績を進展され、さらにこのたび見事に学士院賞を受けておられる現役の学者である。学界でもすでに日本社会学会会長、九学会連合会長、関西社会学会常任委員等を長らくつとめられた。

かたい話はさておこう。阿閉先生と私との関係について。この小文を依頼された理由は、どう

やら私が、人間的、学問指導的な意味で長年、先生に親しくしていただき、名大における直系の弟子の一人であるという一般の認識によるらしい。まことに不肖な弟子ではあるが、そのような認識がなりたつとすれば、私としては身に過ぎた光栄と考えたい。たしかに本田先生は旧制高校（三高文丙）の先輩であり、同先生からフランス社会学のてほどきをしていただいた。先生から大学院学生時代にご叱責を賜わったこともある。いまだに本田先生を心から追慕申し上げる気持はまったく変わらない。しかし、私が昭和二十四年四月本学——旧制——入学、同二十五年四月専攻決定という段階において、その時点にご着任になった阿閉先生は、そのご学識においても、そのお人柄、さらにご識見においてもまことに印象深いものがあつた。このような方こそが大学教官である、という気持ちがあつた私の胸をまずうつたのである。私のでた授業では、「社会学史」では先生のご学殖の深さは前評判であつたが、実際もその通り。「社会心理学」（と記憶しているが）もとてもすぐれたものであつたと思う。

当時、先生がたと専攻学生との交流はまことになごやかなものであつた。私たち最初のころの卒業生からみると、本田先生は研究室の父親、阿閉先生は兄貴、助手の高橋進一さんはわれわれとともに学ぶ先輩という感じが強かつた。欠食児童みたいなわれわれが、阿閉先生にゾロゾロついていって、名古屋市役所の食堂で昼食をごちそうになつたこともあつたと記憶している。

その後に私の大学院——大学若手教師時代がくる。そのころ、先生の私どもにたいする強力なご指導が始まつた。家庭事情とはいへ、一度は朝日新聞社に勤めた私が、記者生活一年ほどで退職、

大学院（旧制）に在籍をお願いして許されたことについては、阿閉先生のお力が大きかったときいている。大学院に二年間在籍して、昭和三十年四月、日本女子経済短大に赴任した。赴任前後に、私がだした「ドイツ・ファシズムの政治・心理構造」〔『社会学評論』一七号〕、「ドイツ・ファシズムの支配構造」〔『理想』二七一号〕、この私の初期の二作品に関しては、先生が朱筆をいれて下さり、何回も書き直して、みていただいた。その他、私の経歴に鑑みて新聞文章と学術論文文章の差異についてもご指摘いただいた。さらに昭和三十四年を中心とした時期に、先生から門下生が一冊ずつ訳書を出版するようすすめられ、ギュルヴィツチ『社会階級論』拙訳、レッドフイーールド『文明の文化人類学』安藤慶一郎訳、ラムネー、メイアー『社会学』小口信吉・横飛信昭共訳などがつぎつぎ刊行された。この間における阿閉先生のご指導ぶりは徹底しており、文献の選択や出版社のお世話はもとより、各冊の巨大な量の訳文に一々朱筆をいれて下さり、そのご努力たるや今もって頭の下がる思いである。

私事にわたることが多くなってしまつて恐縮だが、少なくとも私は、こんにちの私があるのは、けつして私の力だけによるものではないと痛感している。本田先生はじめ多くの先生がた、とくに阿閉先生のたいなるご学恩によるものであり、後輩諸君のなかにも同様な感慨をおもちの方も多々あるう。阿閉先生に心から感謝申し上げるとともに、今後のご健康とご発展を心からお祈りしたい。

(出典：『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年)

田中清助先生

神戸博一

田中先生というと、それほど多くはない髪を手でかきあげながら、ニコニコと笑顔で話される様子が思いだされる。先生のそうした姿にはじめて接したのは、金沢に集中講義でみえた時であり、大学の廊下で一学生だった私に「トリンケンにゆきませんか」と話しかけられたのである。それ以来私は先生に得もいえぬ親しみを感じ、その人間的魅力のとりこになったのである。

私たちが受けた先生の講義はソヴェト社会学、組織論、サン・シモンとマルクスなどをテーマとしていた。講義の調子は、時には酔ったかのごとく流暢になるが、喘息に似た激しい咳で中断したり、沈黙の時間がしばらくあつたりして、決してなめらかな語り口とはいえなかった。これは一面では言葉や表現を真に自分のものとして裏づけたいという先生の厳格な生真面目さと関係している。

サン・シモンやジンメルなどの原書講読では、ほんの一語の意味や訳語にも偏執的とさえ思われるほど考え抜かれる先生に時には辟易し、日暮れて道遠しの感さえたが、そうした訓練によって私たちは読書力や語学力を身につけたのである。そうした講義で疲れた後、誘いあつて喫茶店や時には今池の金福にでかけ、自由にいろいろな話題で大いに語りあつた。なつかしい思い出である。

ところで先生は、魚はにおいも嫌いで一切食べないという極端な偏食家である。好みといえばそれまでだが、先生の理由づけは納得しがたく、そういう意味で先生には言葉で表現しきれない、牢固として抜きがたいものがあり、そこに先生の人間をみる。

私たちは先生が阪大へ移られるという事態に直面したが、先生自身年齢上の一区切りをつけ、再出発をするということだったが、どうにも割り切れない気持であった。師弟関係を何か封建的な主従関係ではなく実質的な意味で考えられている先生であったが、私たちには一抹の寂しさを禁じえなかった。

結果としては、先生は大阪と名古屋を往復して教えられることになり、その多忙さも大きな一因だろうが遂に潰瘍の手術をされることになってしまった。お見舞いでお目にかかった先生はげつそりやせ細り、痛々しかったが、当時は先生個人にとっても研究室にとっても大変な頃であった。

それはさておき、田中先生のマルクス主義社会学やソヴェト社会学の研究の功績をあげねばならないだろう。私はその面だけでなく、ドイツ社会学（ゾンバルト、シェーラー、マンハイムなど）や精神分析の初期の研究に魅力を感じていた。また先生は「白く塗りたる墓」（聖書）や「プロクルテスのベッド」（ウエーバー）などの表現で理論のドグマ化を戒められていた。マルクス主義やいわゆる先生の「アソシアシオン」論においても、人間、パーソナリティ、人格、思想への注目をみてとることができる。先生自身の思想や政治論について直接語られるのを耳にしていな

いが、論文の背後に先生の学問を支えている確固たる思想を理解することができる。先生は英・独・仏・露語などの語学を得意とし、いわば文献学的手法に徹しようとする姿勢がみられるのだが、やはり単にそれだけではなく、社会学の現代的課題への真剣で独自の取り組みに裏打ちされているのだ。私はこれらの先生の研究に、独自の境地を拓いた一個の職人芸を見いだす。

（出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年）

開講三十周年の挨拶

北川隆吉

本日は、社会学開講三十周年の集いを開きましたところ、遠路からもはるばると沢山の方の御来会をいただきましてありがとうございます。お休みで他のご用が御ありで御忙しいところ、あるいは、ゆつくりなさりたいところをお集まりいただきまして、主催をいたしました私ども一同心から厚く御礼申し上げます。名古屋大学の社会学の講座というよりも講義は、昭和二十三年の九月一四日に名古屋大学文学部に設置されて、昭和二十四年の四月から、本田喜代治教授、当時立教大学の教授でありました本田先生によって開講されました。これは、私が調べたわけではございませんで、阿閉先生がお書きになりました二十周年のときの文章を少し覚えております、空で言っているだけの話なんですが、(笑)……だそうでございます。ただ、そこで面白いのは、本田先生は国文学の講座の教授としておみえになったそうで、ややふざけていいますと、そのままでも良かったのではないかと私は思っているのです。なぜなら、本田先生は、短歌を、和歌をお詠みになりました、本多秋五の日本文学史の中には、本田先生の名前が出てまいります。文学研究家、万葉の研究家としても、本田先生は著名でありますし、またフランス文学、哲学と文学の境のような領域につきましては、ご存知のように、平岡先生などと翻訳が沢山ございます。そういう点では、どの講座でおみえになろうと構わなかったのだらうと思いますが、正式には、

二十五年に社会学の講座が設置され、そしてさきほどお話がございましたように、阿閉先生が、併任の助教授として、おみえになりました。ですから、社会学の講座が設置されたのは、昭和二十五年であります。講義が実質的に開始されました時を私どもは起点と考えまして、今年を三十周年と考えたわけでございます。今日、こうして会をもつにあたりましては、井関先生の文学部長としての初仕事にふさわしいかどうか、私にはよくわかりませんが、お休みのところをわざわざお出でいただきました。また、この会を開くにあたりまして、同窓会の方々には、大変なご努力をいただきました。今日、こうした盛会でありますのは、同窓会の役員の方々が、大変熱心に会員の方々に今日の会のご勧誘をいただきました賜物と思っております。なお、こう申しては失礼ですが、お年を召されました本田先生の奥様、阿閉先生、平山先生、そして、一年半ではございましたが、併任教授として、名古屋大学の研究室を守っていただきました田中教授、四人の先生ともお出でいただきまして、私どもはこれほど嬉しいことはありません。その流れを受けまして、私どもが、現在の社会学研究室を預っているわけでありまして、この機会に、研究室のスタッフをこの席で紹介させていただきたいと思っております。今、司会をしております佐野勝隆さんが、社会学研究の助教授でございます。佐野さんは、東京大学の社会学の大学院の修士をわかりまして、昭和四十一年に名古屋大学に助手として赴任されました。以来、名古屋大学教養部の専任講師、助教授を経まして、今年四月一日から、文学部助教授として私とともに名大社会学講座を構成しております。よろしくお願いいたします。続きまして、神戸博一助手でございます。

金沢大学を卒業いたしましたして、私の伝え聞くところによりますと、田中教授を慕って名古屋大学の大学院にこられ、そしてドクターコースまでおわりまして、一昨年、昭和五十二年から社会学研究室の助手を勤めて下さっております。今後、研究室にお出入の節には、おそらく神戸君が、皆さんの応対をすることになろうと思ひますので、お見知り置きいただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。続きまして、本学の社会学の、制度としては第二回の卒業生であります。実質的には最初の卒業生であり、教養部教授として長く名古屋大学での教育に携わられ、今は教養部とともに学部及び大学院を指導していただいております。佐々木教授をご紹介します。なお、本学の第四回、新制の第四回の卒業である中田教授に、同じく大学院、学部をお持ちいただいております。すでに、地域社会学の研究等では、日本の社会学界の中で十分に活躍されておられる方です。私ども、以上五名が、今のところ、研究室を預っておりますが、なお、明年四月からは、教養部に新しく、若い先生をお迎えすることが決まっております。その六名をもちまして、これからの発展に心がけたいと思っております。なお、本日、黄色いリボンをつけております若い人たちがおります。入口でお金などを丁戴したりいたしましたでしたがこれは、大学院、ならびに、学部学生でございます。現在、大学院に十名在籍をいたしております。それから学部は、三、四年生をあわせまして、三十二名、第四期といたしまして十四名進学ということでございますので、それを含めると、私どもスタッフをいれまして、約六十五名の人員をもって構成されております。数ばかり多ければいいわけではございませんが、かなり、賑々しくなっておりますので、お

いでいただきますと、少しアカデミックではないのかといったお気持ちをおもちになるかもしれません。活気があるということで、お許しいただきたいと思います。学部の学生諸君を含めまして頑張ってくださいと思っております。

最近の研究室の活動をおしらせしますと、別に私は本屋の代理人ではございませんけれども、入口に三冊の本を並べておきました。これは、佐々木教授、それから佐野助教授、本研究室御出身の戸谷修さん、安藤慶一郎さん、それから中田教授といった方々が、それぞれ編者になりました。名古屋を中心にした方々によつて三部作としておそらく初めてだと思えますが、作りました。純粹の専門書というには、あたらないかもありませんが、内容豊かな書物であります。こういうものが出来あがるほどに活動は活発化しております。それから、東海社会学研究会が、今年の夏に結成されて、百名近い方々がご参加をいただいております。報道関係や、あるいは自治体関係などにお勤めの方で、いわゆる研究者とはお呼びできないかもしれませんが、そういう諸先輩、知己の方々にお集まりいただきまして結成されました。大体こういう会は、早くつぶれるものなんでありますが、コンスタントに大体一月半に一回の割で確実に研究会を開いております。その中でいろいろな新しい問題や、雰囲気、私も研究室の中に取り入れたいと思っております。もちろんこの研究会はわが研究室の若い人たちがこれを支えているわけです。さらに、この三月には、研究室といたしまして、『名古屋大学社会学論集』といったものを若い人たちを中心に、研究室の紀要として発刊するために、いま論文を集めているところでございます。さらに、

本田先生や阿閉先生、あるいは、田中先生の頃から見ますと、やや、邪道かもしれませんが、実証研究にも精を出しております。調査研究の成果をはじめとして、この一、二年、毎年三人ずつぐらいが、日本社会学会大会で報告ができる状況になってきております。私どもは決して思い上がっているわけではありませんが、この東海地方で講座制を持ち、研究室らしい研究室をもっております社会学研究分野の場所としては、名古屋大学文学部社会学研究室をおいてない、と私は思っております。この研究室が中心になって動かない限り、東海地区における社会学的研究は伸びない。その力を基礎にしながら、口はばつたい言い方ですが、やはり、日本の社会学研究の一つの拠点として、名古屋大学文学部社会学研究室が発展するようにしたい。これは、願望でありませんが、私どもはそう考えております。

そのためには何よりも、私どもは、多くの力をお借りしなければなりません。先輩の方々には、気楽に研究室にお出かけいただきたいと思えますし、そしてまた、身近なことで申し訳ございませんが、就職その他、物心両面にわたってご援助をいただきたいと思えます。私どもは、学の内外に社会学の存在を示していきたいと思っております。その基盤をお造りいただいた、本田先生や、阿閉先生や平山先生、田中先生の遺産を、私どもは正當に引き継ぎながら、さらに創造的に発展していく、その道にのりだしていきたいと思っております。その一つのきっかけとして、私どもは、この三十周年の集いを非常に大事に考えているわけであります。これから四十周年、五十周年となっていくのでありましようが、その時には、さらに盛大な集いが開けますことを私ど

もは祈念しております。重ねてではございますが、この会のために、大変なご努力をいただきました。皆さん方への感謝と、私の所感の一端を申し述べてごあいさつとさせていただきます。ありがとうございます。

（出典：『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年）

開講三十周年の挨拶

阿閉吉男

本日は名大文学部社会学講座開講三十周年記念にお招きいただきましてありがとうございます。同窓会の皆様方のご援助もあつたということのを伺いまして非常にうれしく思っているしいでございます。

私はさきほど佐野さんからご紹介ありましたように本田先生のもとに昭和二十五年から、赴任いたしました。そのように申しますけれども、じつはその時、兼任助教授で、当時静岡大学の文学部が本務でありまして、一年ほど兼任いたしておりまして、その後昭和二十六年から三十五年まで合計しますと十年間、本田先生の下に助教授をつとめていました。奥様にもいろいろと個人的にもお世話になりました。本当にありがとうございます。

本年度、社会学の講座が開講されました三十年ということになります。月日の経つのは非常にはやいものだということは、よくいわれるのですけれども、三十年というのは、私個人にとりましても人生の半分近くですが、あつというまに経ってしまいました。

それから、退官いたしましたのは五十二年でございますから、名古屋大学に二十七年ほどご厄介になりました。

今から当時を思い出してみますと、二十五年の四月に新任助教授としてまいりました時には旧

名古屋城内に、現在は明治村にあると思いますが、歩兵六連隊の二階に入りました。それから、別館みたいなひどいアバラヤのような二階へ移りまして、それが三十七年まで続いたと思います。その当時は思いだしてみますと、三十一年から田中教授がおみえになりました。私は三十五年から先ほどのご案内のように教授になりましたけれども、田中教授は五十年までいらつしやつたと思います。そして、阪大の人間科学部のほうへご転任になりました。

その間、いろいろな思い出もございますが、中でも一番私に思い出深く、また、じつに驚いたことは、昭和二十五年の四月に研究室が生まれました時に、本といたしましては洋書が十七冊、それもなんと神宮皇学館大学という、現在の神宮皇学館大学の前に戦時中にできた旧制神宮学館大学というのがありまして、洋書が十七冊、和書が五十冊ぐらいその大学から移管されたのでした。それで本田先生とお話いたしております、こんなことでいったい私に勉強してくれといわれるんでしょうかと話したことを覚えております。

静岡大学の文理学部のほうが旧制高等学校であります、ずっと本が多くありました。その後、昭和二十六年と思いますが、ゼリグマンの『エンサイクロペディア・オブ・ザ・ソーシャルサイエンス』という全部で八巻本か十六巻本か今記憶にありませんけれども、たしか社会学研究室にあると思いますが、それを買いました、二万五千円で、あと二万円ぐらい予算が残っております。四万五千円が現在の価格にして二十万ぐらいと思えますが、それで一年の予算がふつとんでしまうんです。それからしだいにふえて昭和五十年ごろ、実験講座になりました、四百万円ぐ

らいになったと思います。日本の大学がいかに戦後最初、貧弱であつたかを思い起こすだけであります。

本日、時間をかけてはと思ひまして、はなはだ簡単ではありますが、これでご挨拶に代えたいと思ひます。本日はありがとうございます。

(出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年)

開講三十周年の挨拶

平山高次

年寄りが、だいぶ昔のことから話すのは、あとがないということなんでしょうが、勘弁していただきしたいと思います。

さきほどお話がありましたように、名古屋大学の社会学研究室も三十年の道のりを経てきて、今たいへん活発に活動されていて、他の学科からもうらやましがられているような状況のようです。

出發当初は、阿閉先生からのお話にもありましたように、たいへんなひどい所でした。私は最初は教養部の教授として来たのですが、じつは、文学部とばかり接触しておりました。四月から来るように話があったのです。ところが、私の来るより少し前に、みなさんが承知のように、ラニア事件が突発いたしましたして、係だった部長さんが、責任を取って辞職とかいうようなことになりました、最初は工藤さんがおやめになりました。その次が服部さんですが、服部さんが代理部長の時に、私のほうに直接お話がありました。ところが、服部さんもやはりいろいろなことがあってやめられることになりました。そのあと、おなりになった部長さんが、中村先生でして、私は、形としては、中村さんの時にこちらへ来たようなわけです。ですから、四月から来るのが、半年遅れまして二十七年の十月から来ることになりました。東京におりましたので、しばらくの

間は、東京の学校を離れることができないで、集中講義で名古屋に来ておりました。二十八年の四月からは大学院に配属されました。それで泊まるのは、兵舎の中の宿直室とかというところだったわけですが、まあ蚊の多いこと多いこと。もつとひどいことはですねえ、講義をしておりましてですね、気がつきますと、下のほうがもさもさ、もさもさやっています。ちよつとおかしいと思つて、どうも講義のほうに熱心になれないんです。さては、ノミらしいということ、後から小使さんに、教室にノミがおるんじゃないかときましたら、「ああ、おりますよ」というんだから、けしからんじゃないか、こんなことでは講義ができませんからつていうんで、DDTをまいておつたんです。というようなことばかり思い出されるひどい状態でした。それに阿閉先生のおっしゃいましたように、もちろん、研究施設は、状況も悪いし、本もないし、ないないづくめの環境だったわけです。当時の学生諸君もよく辛抱して勉強されたものだと思います。

本日、三十周年という長い年月を無事やつてこられたということになるわけですけれども、過去のことでは過去のごさいますが、とまれ、ここまで来ましたら、人生では男盛り、働き盛りでしょう。過去を振り返るだけじゃなしにですね、今後、新たな出発のために、一同協力一致して、新しい学問の創造とか、あるいは真理の探究に、一層訓練、精進されることを切に祈つてやみません。本日はどうもありがとうございます。

(出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年)

開講三十周年の挨拶

田中清助

まあ、僕の話なんかは後でお酒でも飲みながらのほうがいいと思うんですけど、ご指名によりましてやらざるを得ないわけです。だいたい僕は、大学を出ました頃は、人格の全面発達というのを考えていたわけです。そのためには、いろんな仕事をしたほうがいいと思ったわけなんです。それで、一年ごとに職業を変えていこうと思ひまして、十年ばかりそれを実行したわけなんです。そうしたところが、その頃にちょうど本田先生のご尽力もございまして、名古屋大学へ入れていただいたわけなんです。けれども、そうすると気が変わりました、つまり、今までも一年ぐらいすると、まあいい加減でいやになるわけですけれども、大学へ入りまして、非常に住みやすいように思ひまして、こういうところならばこれから定年まで、石にかじりついて居ようと思ひ定めたわけなんです。

で、最初、教養部に入りまして、五年間いて、文学部の社会学に移ったわけなんです。本来、本田先生、阿閉先生の学風を受けて、それを伸ばしていくべきなんです、足かけ十八年ぐらいいることになったわけですが、まこと、あまりよくない教師だったと思うんです。そのうちに、文学部に入つて十年ばかり経ちましたんで、もうそろそろ変わらなないと、いよいよ策が尽きて、どうにもしようがなくなると思つたんです。けれどもちやうどそのころは、紛争とか、い

ろいろな問題がありました、なかなか出ることができず、そうこうしていますうちに年も五十になつたわけなんです。それで、そういう紛争なんかのも、いちおう片がついた形になりましたので、この機を失すればもう、これはどうもしようがないと思ひまして、大阪大学の人間科学部という、何だかあまりよくわからないようなところに移つたわけなんです。

僕は大阪に移つて、その学生諸君と接しますと、やはり名古屋の方と、だいぶ性格において違ふわけなんです。名古屋大学の方は非常に真面目であつて、着実に勉強されるわけですね。大阪の人々はそれほど真面目じゃないんですね。何というか、ちゃらんぽらんのところがあつて、例えばこういうような会を設けた場合、何人出てくるかと思ふことがありますね。ただその反面、やはり面白いところがあつて、放胆というのか、勝手なこと、大胆なことをやる者もいるわけなんです。だから、そういう意味から言えば、名古屋の方も、着実に真面目にやるのはもちろんとして、研究の面でも大胆な試みをなさつていくのがいいんじゃないか、そういうふうに思つたわけなんです。それぐらいで挨拶に代えたいと思ひます。

(出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年)

開講四十周年の挨拶

北川隆吉

本日、社会学研究室創立四十周年を記念する会を開催いたしましたところ、かくもたくさんご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。主催者を代表いたしましたして、ひとことご挨拶並びに研究室の近況について、ご報告をさせていただくことにしたいと思います。

本年は、本田喜代治先生が名古屋大学ではじめて社会学を開講されました、ちょうど四十周年に当たります。さきほども何人かの先輩の方、と言いますか、卒業生の方とお話をしていただけであります。最初は、お城の中にあつた兵舎で講義がもたれたようではありますが、いまは東山に居を移しまして、それからでもすでに二十年近くなるうとしております。

まず、こうした会を開きますに当たりまして、同窓会の役員の方々には大変お世話になりました、ありがとうございます。お力添えをいただきましたお陰で、こうした会がもてますことを心からお礼申し上げます。最初にまずお礼を申し上げておきたいと思ひます。

さて、研究室の状況についてでございますが、三十周年を愛知会館で開きまして以来、十年ちよどたつているわけでありますが、この間に、学部が学生が三六名、大学院の修士修了者が十五名というふうな、年々新しい卒業生を送り出して来ております。ちなみに申し上げます、本社会学研究室は、第一回の卒業生以来四一四名、修士修了者、マスターの取得者五十名という数

になっております。これだけのたくさんの人々が世に出て活躍されているということに、大変喜ばしいことだというふうに思っています。最近の動向は、一般の企業にもたくさん務めるようになりまして、限られた範囲ではなくて、かなり広い範囲にわたって就職をするというようなことが広まって来ております。そういう学生諸君を送り出し、まあ今日ご出席いただいているわけですが、その十年間、三十周年から十年の間に、まず、研究室といたしまして、『社会学論集』という論集を紀要として出しておりますが、これも毎年回を重ねまして、今年で十号になるというところにまで達しております。若い人たちの執筆のチャンス、それから書くことに慣れるということ、業績の取りまとめ、というようなことを考えまして作りました紀要であります。こちらで参考にして下さるといふ方々も増えているような状況であります。

それから、この十年間で、実証研究といたしまして大変数多くの研究を重ねまして、尾張旭市を始めといたしまして、岐阜の東濃・西濃各都市を調査いたしました。その報告集だけで二十点、年平均約二点、厳密には十八であります。十八点の報告書を出すというところになんてなっております。これも院生のみならず、学部の学生諸君が調査に参加して、調査実習ということで、理論研究と同時に実証研究に参加するといふ最近の動向の表われでありまして、他に誇つてと言いますか、よく続けられているものだ。そして数多く着実に研究が積み上がっているという点は誇りにしてよいというふうに思っております。

それから研究会でありますけれども、この東海地区を中心にいたしました。東海社会学研究会

というものを設立いたしましたして、毎年、研究会の大会を開くということが続けてきております。この中心に名古屋大学の研究室が座って、と言いますが、中心となつて事が運んでいる、という意味でも地域的な活動にも何らかの貢献をしているというふうに言つていいのではないかと思ひます。

大雑把な報告でございますが、研究室といたしましては、毎年、冗談のようにして申し上げますならば、すこし四期生、つまり、教養部のほうから入つてまいります学生数が多くてですね、人をふるわなければならぬという状況になつてきております。そういう意味でも繁栄を続けているというふうに言つていいと思ひます。その繁栄を基礎づけます陣容が、申し遅れましたけれども、着実にまた拡大をいたしております、文学部のほうでは、多年の希望でございました一講座が、比較社会学ということで講座を増やすことができました。今の御時世なものですから、一講座と言つても完全な講座が増えるというわけには参りませんが、人員として一名が増えるというだけでありますけれども、講座増になりました、その席に東京大学の助手をしておられました松本康さんをお迎えして、専任講師として現在教鞭を執つていただいております。それから、大変不幸なことでございますが、一昨年になりますか、佐野勝隆助教授が急逝されましたので、今日司会の労を取つていただいております貝沼さんに、教養部のほうから文学部のほうに移籍をしていただくというのをいたしました。そして教養部のほうは、これも不幸なことでありましたけれども、定年に先立ちまして佐々木教授が退職されましたので、それとも合わさりまして、昭和四十

四年にマスターを修了された板倉達文さんを教養部の助教授として、それからまた神戸大学から、神戸大学の社会学研究室の助手をしておられました、本日参加をしておられます藤井勝さんを専任講師としてお迎えをいたしまして、陣容的にもそういう意味では一名増しということで、発展をいたしております。

今後これから、さきほど申しましたように、学生も数が増えておりますので、今後ますます研究室としては発展をしていくだろうというふうに思います。どうかこれからも研究室の動向にご注意をお傾けいただいて、お気配りいただいて、さらに研究室が発展をするように、私ども関係者はそれなりの力を出して頑張つて行くつもりでおりますが、先輩諸氏にも何分のご高配を賜わりたいというふうに思っております。大変飛び飛びな話になりました恐縮でございますけれども、時間の関係もございますので、私の報告はこれをもって終わりいたします。どうも本日はありがとうございます。

(出典…『名古屋大学社会学研究室四十年小史』一九九〇年)

北川隆吉先生の御還暦をお祝いして

貝沼洵

北川先生が一九七八年に名古屋大学に御着任されてから、すでに十一年が経過した。その間、先生は、ありあまる情熱のほとばしりでもって、私たちにじつに多くのことを教えて下さった。先生のその己が身を擦り減らすごとき御教授がなければ、今の研究室も私たちもなかつたといえる。

研究室としての地域調査は、毎年欠かさず続けられるようになった。「仕事は降る星のごとく」であつた。先生が着任される前にしばらく続いていた研究室の沈滞は一掃され、活気がみなぎるようになった。いうまでもなく、先生の御業績は、私たちにとっては進むべき方向を考えるうえでの目標でもあつたし、道標でもある。また、講義や研究会などで、先生の驚嘆すべき博識、それは、社会学にとどまらず経済学、歴史学、哲学、文学などに及ぶものであつたが、そのストツクの一部に触れることができたことや、アクチュアルなトピックや各分野の基本的課題についての理論的動向やその捉え方を教えていただいたこと、さらには、調査法などのいわば社会学のイロハにいたるまで手ほどきしていただいたことなど、私たちにとっては幸運なことであつた。それらを通じて、私なりに言えば、特に、社会学と近代社会・現代社会を捉える理論的スタンス、あるいは思想とすべきものを教わつた。それは、先生のマルクス主義も含め、「近代」社会学と

「近代社会」へのこだわりとも言うべきものである。

もちろん、西欧近代社会の一方的礼讃とそれに基づく日本社会への「日本近代主義」的な批判ではなく、わが国の資本主義的成長と大衆社会化の進展にもなつて生じた、一方での「技術革新」とともに社会の最末端にまで及ぶ支配管理の組織化、機構化、システム統合の進展という新しい事態と、他方での労働者、ホワイトカラー、エリートたちの階層分化の経験的把握と、それが競争と孤立、疎外の深化と同時に、新しい労働者の自立的運動や階級連帯の可能性をも開くものであるという洞察とをかいぐぐった、または、そうした現実の冷静な分析を貫徹していった果てに得られる近代へのこだわりであったと言える。

古色凄然たる西欧近代でも社会主義の硬直した現実態でもなく、高度に資本主義的大衆社会の発達したわが国にふさわしい未だ在らざる近代のあり方への希求といつてもよい。そうであるがゆえに、近年のME、コンピュータ・情報ネットワークの調査研究に至るまで連続と続けられている先生の「技術革新」の諸研究にしても、あるいは研究室などで取り組んでいる地域社会の諸問題に関する調査にしても、社会体制や社会の全体的変動との関連、したがって先に述べた意味での社会構造の全体的分析が極めて重要視されることになるわけである。

失礼を顧みず言うならば、先生は、一九五〇年代から今日に至るまで、こういうスタンスで、あたかも自らの生命と戦後史とを重ね合わせるがごとく、日本社会の現実と猛烈に格闘しながら、戦後社会学の先導者としてひたすら駆けて来られたのではないか。私たちは、このスタンスと格

闘を受け継ぎたいと思うが、今日、「四全総」にせよ、平成の「大衆天皇制」への代替わりにせよ、最新の統治技術を駆使した秩序の再編成を目の当たりにするにつけ、あるいは、「フォード主義」的段階すら達成しえなかった「社会主義」の破綻と、資本主義体制の延命能力の強さを見るにつけても、先生の「技術革新」と「近代」へのこだわりは、今日においてこそ、その真価を発揮させねばならないとの感が強い。先生の御還暦をお祝いし、御長寿を祈念するものである。

(出典…『名古屋大学社会学論集』十一号、一九九〇年)

開講五十周年の挨拶

西原和久

ただいまご紹介いただきました西原です。本日はお忙しいなか、名古屋大学社会学研究室創設五十周年記念パーティーにお集まりいただきました。誠にありがとうございます。私自身、まだ着任して二十三日目という、大学の中の右も左もわからないような状態ではありますが、主催者を代表して一言、御礼とご挨拶をさせていただきますと思います。

じつはたまたまなのでありますが、本日は私自身の誕生日でもありまして、満年齢ではまだ五十歳には達してはいませんが、ほぼ同じ年月を名古屋大学の社会学研究室とともに歩んできたということになります。したがって、五十年、長いようでいてアツという間の時間だったという、そういう時間感覚を私自身も共有しているわけです。もちろん、幼い頃から名大社会学研究室を知っていたわけではありませんので、社会学研究室にある『名古屋大学社会学研究室・四十年小史』『同・三十年小史』などを紐解きまして、名古屋大学が新制大学として再スタートしたその一年あまり後に「社会学講座」が発足した、といった歴史を勉強して参りました。一九五〇年代は、まだ名古屋城の近くに研究室があり、その後、六〇年代に入って早々、現在の不老町のキャンパスに移って、名古屋大学社会学研究室はさまざまな形で拡大・発展してきたと伺っております。

一九五〇年代、六〇年代といえますと、私が申し上げるのも諸先輩方・諸先生方を前にしておこがましいことではありますが、戦後の世界の社会学ではアメリカを中心にパーソナルの構造・機能主義が一世を風靡するとともに、そのパーソナル社会学に対してもさまざまな対抗アプローチ、対抗パラダイムなどが現われてきて、それが今日まで続いてきているといったように、世界も、また高度成長に突入する日本も、そして社会学自身も大きく様変わりをはじめた時期なのではないか、と思っております。もつとも、名古屋大学の社会学はヨーロッパ、とくにフランスやドイツの理論や学説をしつかりと引継ぎ、さらに発展させる諸先生方を生み出し、そしてその学識にふれる卒業生を生み出してきたわけです。もちろん、これは本田喜代治先生や阿閉吉男先生のことを念頭に置いているわけです。

その後、七〇年代に入りまして、とくに七〇年代の後半からは社会学のもう一方の柱、あるいは車の両輪の一方の車輪と申し上げたらよろしいのでしょうか、理論研究とともに実証研究、とりわけ地域研究を柱とする実証研究が本格的に名古屋の社会学においても始まっていったということができると思います。もちろんこれは北川隆吉先生がご着任になってから、地域研究を柱としつつ、理論と実証の統合といった大きな足跡が残されてきたことを指します。八〇年代、いま手元に持っておりますが、『名古屋大学社会学論集』の第一号がちょうど八〇年に創刊され、そして皆様のお手元にも渡ったかと思えますが、一九九九年第二十号が今年出て、『社会学論集』のほうも二十歳を迎えるようになったわけです。この八〇年の創刊号の内容に関してですが、目次

をみますと「統計制度の問題——社会調査論の一面」という、まさに社会学のその一方の重要な側面を北川先生がご執筆なさり、そのほか近代化の話や、共同体の論考が載っております。と同時に、初期ルカーチ研究、マートンの科学社会学といった研究論考も掲載されており、さきほど来述べているような、あるいは社会学でつねに問われているような「理論と実証」のその両輪の統合、連動、相互刺激といったものが、スタート時のこの『論集』においても描かれているわけです。

もちろんいまは文学部の歴代教授に限って話をさせていただいたわけですが、そこから育った方々を中心にさまざまな領域でご活躍をなさっている方々がおられるわけですから、私自身が細かくフォローできてはいないとしても、お名前を挙げさせていただければ、中田實先生の地域共同管理論をはじめとして、現在、情報文化学部や人間情報学研究科にいらっしゃる、パレート研究の板倉先生やギデンズ研究の貝沼先生、そして若手の黒田先生や河村先生のお仕事も遠くからみさせていただいております。正直申し上げて、外側からひたすら学ばせていただくという関係だけで今までできたわけですけれども、遠くからみて本当にあこがれの対象の大学、社会学研究室だというふうに思っております。

さて、九〇年代に入りまして文学部では、九二年に北川先生が停年でご退官された後、松本助教を中心に文学部社会学研究室が運営されてきたと伺っております。その時期の松本先生のご苦勞を思うと本当に大変であったと忖度いたす次第ですが、九〇年代の後半には教授として折原

浩先生が着任され、ここでまた折原先生の理論・学説の根太い研究と松本先生の理論にも裏打ちされた実証研究という、これまた「理論と実証」の両輪がみごとに回転し始めていたのではないかと思います。ところが今年、両先生が名古屋大学を去られるということになりました、急遽、私と田渕六郎講師が着任したわけです。名古屋大学の社会学にとつて、九〇年代は、スタッフの入れ替わりに象徴される激動の時代の幕開けなのかもしれないと感じ始めております。

ただ、それだけではなく、着任後、二度ほど出席しました教授会で、私はいま名古屋大学がおかれている現状というものを少しずつ理解し始めるようになりました。その現状というのは、一方で大学院重点化にゴーサインが出て名古屋大学は大学院大学として進む方向に確実に一歩が踏み出しますが、しかし一方で、新聞等でもご案内のように、国立大学の独立行政法人化の議論が盛んになってきていて、この流れは各種の学内組織の再編も伴いながら、押しとどめることができないうものとして今後のわれわれにも押し寄せてくるだろうと思っております。これから先、新しいミレニアムを迎え、二十一世紀に入っていくわけですが、激動の九〇年代が、まださらに五年、十年というふうが続いて、名古屋大学の社会学が大きな変化の渦に巻き込まれていくだろうと思われます。しかしながら、われわれとしては、それらを逆に糧にしながら、発展の新しい潮流、発展の新たなうねりを主体的に作り上げていくようになればいいな、と考えております。着任早々であるにもかかわらず、見てきたように五十年間をふりかえりました。現時点からみれば、いろいろありながらも五十年間がアツという間に過ぎたといっても過言ではないでしょう。

しかしながら、その間、着実に今後のための土壌が耕され、切り開かれてきているのではないかと思っております。私の好きな逸話・エピソードで、しばしば自分の書き物の中でも紹介しているのですが、ジンメルがある本の中でこんな逸話を語っております。ジンメルは農夫の例を引き合いに出しているのですが、ある農夫が死の床で三人の子供たちを呼び寄せてこんなことを伝えた。つまり、自分の畑には宝物が埋まっている、畑に宝物を埋めたというふうに言って亡くなつていった、という話です。そのことを聞いた子供たちは、父の葬式を終えた後、必死になつて畑を耕したことはいうまでもありません。しかし、掘つても掘つても宝物は出てこなかった。しかし一見無駄に見えたその耕作、畑を耕すという行為が、翌年じつは実り豊かな成果・豊作を呼び込んだというわけです。よくある話ではありますが、この話は私にとってはとても印象深いものとして残っています。いままでの名古屋大学社会学研究室の五十年が日本の社会学を確実にリードし、着実な成果をあげてきたことは間違いありませんが、同時にこの五十年が、今後の社会学の発展に向けた、ある意味では、畑に鋤を入れ、そこを耕し、社会学のさらなる発展のための土壌を作り上げてきた、そうした耕作の時期でもあったのだらうと思っております。

着任早々で生意気なことを申し上げましたが、卒業生を中心とする同窓会の皆様、それから情報化学部の諸先生方、文学部の丹辺助教、田淵講師、魯助手とともに、そして院生や学生と協力して、新しい時代の新しい社会学の発展を目指して、微力ながら私もその輪の中に参加させていただいていこうと思っております。今後ともどうかご指導、そしてご協力を賜りますよう、

心からお願いする次第です。少々長くなりましたが、以上をもちまして私の挨拶とさせていただきます。

(出典…『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

適正規模できめ細かい研究者養成を

折原浩

ご紹介いただきました折原でございます。一九九六年の五月からこの（九九年）三月にかけて約三年間、お手伝いさせていただきました。ですから、「閉会の辞」は主催者側の役目といたしますと、厳密には、わたくしにはもう資格がありません。さりとて、これまでスピーチをして下さった大先輩と同様の賓客扱いとはいかないようで、いわば「ホストとゲストのマージナル・マン」であります。

さきほどは、山田現文学部長や北川名誉教授から、わが名大文学部社会学研究室の「苦難の歴史」ともいべき経緯に触れるお話がありました。それにひきかえ、わたくしの在職期間中は、諸先輩には申しわけないほど平穩無事で、お蔭さまでもつばら研究と教育に専念することができました。研究室運営も、わたくしが容喙しなくとも「ひとりで動く」といつていいくらい順調で、スタッフと院生が研究室会議を開いていろいろ議論し、決定を下し、分担して役割を担う、という民主的態勢がととのっております。

振り返りますと、わたくしが東大文学部社会学科に進学しました年には——一九五六年でしたでしょうか——、北川先生が主任助手で、わたくしたち学生を親身に指導して下さると同時に、民主的な研究室運営の基礎を築いておられました。わたくしがこちらにまいりましてから、「あ、

これはあのころと同じだな」と思うことがしばしばありましたが、これは、北川先生が着任後創始された運営態勢を、貝沼洵先生・松本康先生・丹辺宣彦先生・山崎仁朗助手など、歴代のスタッフが発展的に受け継がれ、社会学研究室の伝統ができて、それを、哲学科をはじめとする文学部の諸先生、中田實先生・板倉達文先生をはじめとする情報文化学部・人間情報学研究科の諸先生が見守り、支えて下さっていたお蔭、と思いがたります。

さて、名大文学部、いやどの大学も、これからはまた、大変な再編・激動期を迎えることになりましょう。大学には、①研究と研究者養成、②各種の専門家養成、③民主的な社会をつくる市民の教養形成、④生涯教育への関与、⑤地域（名大のばあい「東海三県」）の文化センター、などの役割が期待されています。ところが、こうしたニーズのすべてに応えることは、とても無理で、あえてそれをやろうとすれば、なによりもまず、スタッフが疲れ切ってしまうでしょう。そうしたなかで、名大文学部は、研究と研究者養成を主とする大学に特化していかざるをえないでしょうし、またぜひともそうしていただきたいと思えます。

そのさい、社会学研究室につきましては、現在の構成（あと一人補充して四人の教授・助教・専任講師、一人の助手、約十人の院生、五十人弱の学部学生）が、適正規模をなしているのではないかと考えられます。さきほどちよつと、わたくしの学生時代のことに触れましたのも、当時の東大文学部社会学科が、ほぼ同じ構成で——ただし、いまから考えますと贅沢なことに、助手が二人いて——、ちょうどこの適正規模に見合っていたと思われるからでもあります。

それに反して、かりに社会学内部の専門諸領域——社会学会では三十二に分類していますが——のスタッフを全部揃えるといった拡大の方向を追求しますと、スタッフには学生定員がついてきますから、たとえば現在の東大のように、教授・助教授は十人になっても、助手ポストがひとつ取り上げられて一人、院生がなんと約六十人、学部学生は約百人、というような肥大化を遂げざるをえません。これでは、研究と研究者養成に向けての、きめ細かい教育と諸領域間の切磋琢磨はとも無理で、どうしても各専門のスタッフに院生・学生が貼り着く「タコツボの束」となってしまうのではないかと危惧されます。

ところで、大学の制度が今後どう変わろうとも、学問は、教官と院生・学生との、きめ細かな、密度の高いコミュニケーションをとおしてしか、継承され、発展することはありません。幸いなことに、わが名大文学部社会学研究室は、まだそうした適正規模の長所を失ってはおりません。卒論構想合宿、修論構想発表会、卒論・修論中間報告会、スタッフと院生の全員が参加する「総合演習」、全スタッフが全卒論を読んだうえでの、全卒論執筆者ひとりひとりにたいする口述試験、全スタッフが全修論を読んだうえ、他専攻教官も審査に加わる個別の修論口述試験、院生の学会報告リハーサルと反省会、『社会学論集』の定期刊行、等々。日本、いや世界広しといえども、こうしたことを定常的にきちんとやっている大学・大学院が、他にあるでしょうか。

なるほど、研究と研究者養成を主とする大学として、もう少し広い領域をカバーできるように、スタッフを増やす方向を追求してもいいのではないか、というご意見はありましょう。しかし、

その点にかけては、名大文学部社会学研究室では、研究者となるための基本的なトレーニングを重点的におこなない、院生が現有スタッフの専門以外の領域を専攻しようとするばあいには、関東で十八の大学院が連携してつくった単位互換制度のようなものを中京地区にもつくって、他大学の専門家のところに出掛けて行って学んでくるという打開策もあるうかと考えられます。

もとより、退職した人間として後事はすべて後任に委ね、縛るつもりは毛頭ありませんが、徒に拡大を求めて漂流することなく、密度の高いコミュニケーションとその適正規模という長所を活かす方向で考えていっていただければ幸いです。また、同じ趣旨で付け加えますと、最終講義で、阪大文学部の川北稔先生の問題提起に応える形で述べ、これにかぎっては紙幅の制限を破って『社会学論集』に収録していただいたところですが、歴史と社会学との緊密な連携を制度的に損なうことのないように、と祈念しております。

さて、この四月から、わが社会学研究室スタッフの構成は、ぐつと若返りました。さきほど抱負を語っていただいた西原和久先生が理論・学説、いまや在籍最長で中軸となられる丹辺先生が産業・労働と階級・階層、四月着任で新進気鋭の田淵六郎先生が家族・福祉、課程博士第一号の魯富子助手が同族の比較研究と、原則上相互補完関係に立って、あとうかぎり広い領域の諸問題に対応していける布陣です。その他の主要な領域としては地域と環境が残りますが、このうちの前者は、十二年間重鎮として当研究室を背負ってこられた松本康先生が、担当されるはずでした。先生は、われわれにとつては遺憾ながら、この春、東京都立大学大学院都市科学研究科に転出さ

れました。が、これは、先生の歡送会でも述べましたとおり、残された院生諸君がいよいよ先生の弟子たりうるかの正念場にさしかかったことを意味します。というのも、学問上の弟子とは、いつまでも師匠のあとについていくのではなく、師匠から学ぶべきものを学びとったうえで師匠を乗り越えていく「先になるべき後なる者」にほかならないと考えるからです。じつさいには、松本先生を乗り越えるというのは、それは大変だろうと思いますが。

ともあれ、清新の氣風漲るわが名大文学部社会学研究室が、片や本田喜代治先生・阿閉吉男先生・田中清助先生、片や北川隆吉先生・佐野勝隆先生・松本康先生の築かれた伝統のうえに、適正規模の長所を活かし、きめ細かい研究・研究者養成の機能を發揮して、いつその發展を遂げていかれるように、祈念してやみません。

なお、三月のわたくしの停年退官に際しましては、なにか記念パーティーをといたいお話もありました。しかし、ご好意に逆らうようで大変恐縮でしたが、わたくしの勝手から、定例の期末納会をもって代えさせていただきます、在職中のご支援への感謝は、この五十周年記念パーティーの席をお借りして述べさせていただくことにした次第です。みなさま、ほんとうにどうもありがとうございました。

(出典：『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

二十一世紀社会学における理論・実証・実践

西原和久

はじめに

折原浩教授の後任として私が名大文学部に着任したのは、いまから二十年前の一九九九年である。まだ文学部は古い建物にあった。研究室は、阿閉研究室という名入りのゴミ箱もあつた古い室だった。だが着任後早々、社会学周辺は大きな変化に見舞われた。二〇〇〇年に大学院重点化で教員は文学研究科所属となり、翌年には社会学講座が心理学や地理学とともに新設の環境学研究科に移籍を余儀なくされるといふ大きな変化の波であつた。この問題で教授会は大荒れで、最終的には社会学という名は残すといふ条件付きで移籍となつた。私自身は文学研究科に社会学があるべきだと考えていたので、残念な事態であつた。二〇〇一年、環境学研究科社会環境学専攻社会学講座が誕生した。だが、こうした変化以外にも、この時期は私の研究にとつても大きな転機となる節目であつた。

二十一世紀社会学と東アジアへの視線

二〇〇一年、私は『意味の社会学——現象学的社会学の冒険』（一九九八年、弘文堂）を主論文とし、後に『自己と社会——現象学の社会理論と（発生社会学）』（二〇〇三年、新泉社）となる

論稿を副論文として、博士（社会学）の学位（論文博士）を取得した。そしてその翌年に英国のマンチェスター大学に半年間、在外研究に赴く機会が与えられた。いずれも、丹辺宣彦先生など同僚の配慮なしには成しえなかったことだ。いまでも深く感謝している。マンチェスター大学では、ニック・クロスリー博士のもとで有意義な時間を過ごした。彼の著作を邦訳名『間主観性と公共性——社会生成の現場』（二〇〇三年、新泉社）として刊行できたのは、マンチェスターで濃密な時間をもつことができた成果であった。その後も、彼の複数の著作を翻訳・出版した。

しかし私のマンチェスター体験は、想定外の研究主題上の変化をもたらした。産業革命の発祥地マンチェスターは、私が滞在した時には多文化社会に大きく変容していたのだ。その地で私は、数多くのアジア系の人びとに出会った。マンチェスターという多文化都市が、私にアジアに目を向けさせる契機となった。帰国後に頻繁に東アジアを回るようになったのは、この時の衝撃の強さによる。爾来、約二十年間、東アジアは私の研究と教育の、そして何よりも社会学の視点からの理論と実証と実践の場となった。

いま「理論と実証と実践」という言葉を用いた。それまでの私の研究は主に理論研究であったが、名大や南京大の教員との交流を含めた（私は二〇〇六年から三年間、南京大学の兼職教授を務めた）研究活動の中で、実証研究の意義を再認識し、さらに二つの点で「実践」という二文字も私の脳裏に刻まれるようになった。研究実践と社会実践である。二〇〇八年四月、私は長野県川上村のアジア系外国人農業「労働者」の調査研究実践を開始した。そして、こうした研究領域

の拡大は、じつは私の学生・院生指導にも大きく反映された。

ともに社会学する実践

名大時代のわが院生は、前半は理論学説研究で、後半は実証研究（より適切には歴史社会学的研究）で、博士号を取得した。理論学説研究では、差別や排除に焦点化したG・ジンメル研究、自我論と精神論を再検討したG・H・ミード研究、歴史社会学的研究では、国民国家形成期の発話障害に関する研究、帝国日本の民族研究の学知形成に関する研究であった。また、タイ日系企業を扱って異質な他者との共存様式を論じた研究もあった。なお、名大の博士課程修了者で、私の異動後に他大学で博士号を取得した者もいる。環境運動論で学位を得た者、国際養子研究で学位を得た者である。また、博士号取得までは至らなかったが、国内外の社会学理論などの研究から、障害者問題や養護教諭問題を研究した博士課程院生もいた。なお、指導過程で気づいたのだが、西原ゼミの「裏の」共通テーマは社会的マイノリティ研究であった。

こうした傾向は、卒論や修論にも反映された。特に東海圏の多文化社会化も顕著だったので、日系南米人や中国も含むアジア系日本在住者というマイノリティ研究が多くの学部生や修士院生の研究テーマとなった。在日コリアンやベトナムやフィリピンを取り上げた卒論、中国系マイノリティに関する複数の修論が印象に残っている。そしてこれらのうちの一部が、企業において、また家族生活において、アジアと深く関わる国際的な（というよりトランスナショナルな）仕事

と生き方を選択している点に関して、素直に「素晴らしいことだ」と喜んでいる。特に「ともに社会学する」実践が実生活にも役立っていたことを聴くと、本当に嬉しい。

「ともに社会学する」実践。私にとって、名大での経験は、この一言に尽きる。教えるというよりは、研究仲間として、院生・学生と「ともに」社会学研究を実践してきたのが名大時代である。特に大学院ゼミは、正規ゼミ生以外の研究者も加わって非常に活性化していた。名大他研究科の院生や名古屋の他大学の研究者も加わり、さらには東大、東北大、横浜国大、上智大、長崎大、南京大、リヨン第三大などの（国内外の在外研究者や学振等の特別研究生などを含む）研究者を交えて、侃々諤々の議論を重ねながら、共通のテーマに挑んだ。そうした「ともに社会学する」実践の成果は、二〇〇七年の『入門・グローバル化時代の新しい社会学』（後に『増補改訂版・グローバル化時代の新しい社会学』）や二〇〇八年の共訳書『社会学キーコンセプト——「批判的 sociology」の基礎概念57』（ともに新泉社刊）などの成果となつてあらわれている。

国家研究と社会実践

再び自分の話に戻ることにご容赦願いたい。私自身は、二〇〇八年からの外国人農業労働者調査に加え、東日本大震災後には宮城県の石巻市・女川町を中心とする外国人被災者の調査研究にも従事した。その過程で、宮城県登米市の山寄り地域から約四〇〇名のカナダ移民が出ていることを知って驚き、バンクーバーを中心にカナダでも調査・研究した。二〇一二年度に私は成城大

学社会イノベーション学部心理社会学科に異動したが、カナダ調査では国際結婚移住者などの日系新移民の存在にも関心が向き、二〇一五年には比較調査のためハワイ大学社会学部に赴く機会が成城大から与えられた（受入教員は社会運動研究者パトリシア・スタインホフ教授）。

だが日系移民の多いハワイで私が見出したのは、圧倒的な沖縄系移民の存在感であった。そして、学生運動世代に近く反戦運動や沖縄返還に初発の問題関心を抱いていた私は、集大成的な研究主題として沖縄系移民と沖縄問題・平和問題に没頭することになった。そう決意させたもう一つの理由は、琉球共和社会憲法案や琉球（沖縄）独立論、さらには東アジア共同体論などを展開している沖縄系知識人への強い関心があったからだ。本年度まで三年間得ている科研費の題目は、「沖縄独立研究と琉球社会憲法の国家観——沖縄県人・県系人にみるトランスナショナルリズム」である。その成果の一部は昨年『トランスナショナルリズム論序説——移民・沖縄・国家』（新泉社）となつて公刊されている。

思い起こすと、二〇〇三年の『自己と社会』の最終節で、これから国家論を展開すると私は宣言していた。その後、グローバル化論、入移民調査、出移民調査などを経て、沖縄における「国家観」研究を核とする私自身のトランスナショナルリズム論研究が現在進行中である。二〇一〇年に「国家を超える社会の可能性」という副題をもつ単著『問主観性の社会学理論』（新泉社）を刊行し、二〇一六年に単著『トランスナショナルリズムと社会のイノベーション——越境する国際社会学とコスモポリタンの志向』（東信堂）や共編著『現代人のための国際社会学・入門——トランス

ナシヨナリズムという視点』(有斐閣)を刊行して、私の研究の中心はいまトランスナシヨナリズム論にある。別の研究費を得て現在研究しているのは、国家論というよりも、正確には「脱国家的連携」というトランスナシヨナルな視点である。国家の枠を超えて人びとが連携し、「平和と共生」を——とりわけナシヨナリズム的な対立が際立つ北東アジアにおいて——実現していくためには、何が問われなければならないのか。これが当面の課題である。この夏も、吉林大学、琉球大学、済州大学などで「東アジア共同体」に関する講演をしてきた。これは理論研究をしてきた私が、名大時代にアジアに目が向き、各種の調査にも従事して実証研究に首を突っ込みながら、最終的に至りついている社会实践の課題である。

結びに代えて

二〇一九年春、二十年間近く交流してきた東アジアの社会学者たちと「東アジア社会学会」を設立した。理事として私は「トランスナシヨナル社会学」という常設部会を組織し、設立大会で二つのセッションを設けた。国家間比較というより、国家を超えた連携を論じる部会にしたいと思う。そして来年、私は古希に達する。だが社会学への自分なりの思いはいまも変わらない。まだまだやりたいことがある。そしてそれは、一人で実践し実現できることではない。ともに社会学実践している国内外の研究仲間と沖縄の基地問題などに関わっている当事者とのコラボが必須である。沖縄に関してウチナーンチュならぬヤマトウンチュである私が貢献できることは限

られるが、本土の基地問題の歴史社会学的研究をベースに東アジアの平和と共生のための連携を模索することは可能だろう。現在、旧米軍立川基地拡張反対運動を担ってきた砂川闘争関係者たちとのコラボを実践し始めているのは、こうした理由からである。その輪の中にかつての名大院生や現在の成城大院生たちも加わっている。名大時代に体得した「ともに社会学する」実践を念頭に置きつつ、理論と実証、そして社会実践にも従事することは、自己を突き抜け、国家を突き抜けて、現代社会を未来へと展望する名大時代の『自己と社会』『間主観性の社会学理論』以来の課題への対応である。その意味で名大時代は、私自身にとってかけがえのない時代だったのである。名大社会学研究室のかつての同僚、院生、学生に感謝しつつ、名大社会学の発展を心から願わずにはられない。

十六年間に在籍した社会学研究室の思い出

田中重好

私は二〇〇一年四月に名大に赴任し、二〇一七年三月まで十六年間に在職した。それ以前、名古屋大学とは全く接点がなく、名大の社会学関係者は北川隆吉先生と、地域社会学会やアジア社会研究会で一緒にしたくらいであった。名大のキャンパスにも、都市社会学会で一度行った限りで、その時に、やけに不慣れた場所にあるという印象と、たまたまお互いに周囲の人と「はぐれた」中村八朗先生と一緒に酒を飲んだ記憶しかなかった。

具体的な選考過程は知る由もないが、たまたま名大に誘われて、迷った末、五十歳を前にして「これで異動しないと弘前大学で一生いることになるが、それでいいのかどうか」迷って、異動してしまった。個人は、文学部社会学科出身ではなく、社会学を選択したのは消去法で「自分の研究が社会学にしか入らなかった」ので社会学者を名乗っていたにすぎない。そのため、自分の迷いの一因は、「正しい社会学者」ではない自分が「将来の社会学者養成機関」に就職することがいいことなのかどうかということであった。結論は、私以外全員は「正しい社会学者」だから、大丈夫かと思えたからである。

名大からの割愛願は文学部からいただき、着任後、辞令は発足したばかりの環境学研究科からいただいた。どちらがよかったかわからないが、私としては、どちらにしる、社会学の正統派だ

とは思っていなかったの、あまりこだわりはなかった。

自分のことはさておき、環境学研究科が発足したことは、それ以前の経緯はよく知らないが、このことよって、文学部と情報文化学部（当時）に分かれていた学内の合計九名の社会学者が一つのグループにくくられたことは、名大の社会学にとつて「画期的なこと」だった。大学の教員になって初めてわかったことは、人事権がどこにあるかがその組織にとつて重要なことだという点だが、この二学部の社会学研究室が統合されたことは、社会学の人事権が一本化されたことを意味している。その後、環境学研究科の社会学研究室であることを自覚して、それ以前には担当者がいなかった環境社会学者を二名採用したのも、統合の成果だと思う。

自分の研究については、最終講義や退職時の名大文学部紀要を参照していただくことにして、自分の研究以外で、名大でどんなことをやってきたかを思い出しながら、書いてみる。第一には、実証研究をしている人たち、大学院生を集めて「地域社会研究会」を立ち上げたことである。この研究会は今でも存続していると思うが、この研究会を立ち上げたのは第一に、「みんなで議論する開放的な場をつくること」、第二に学会発表のように十五分といった短い時間ではなく、できれば二時間くらい一人の発表者に話してもらおう場を用意すること、第三に「まとまった研究ではなく」、まとめている途中のいろいろと迷っている論文制作途中の研究をみんなで議論する場であること、さらに、社会学研究室に閉じこもることなく、学内の他領域の人はもちろん、学外の研究者に参加できる場であること、を考えた。最初の講師は、当時、弘前大学にいた山下祐介氏だ

つたと記憶している。この研究会では、名大の院生はもちろん、学内の文化人類学者の和崎春日氏、周辺の大学の数多くの先生や、たまたま日本に来ていた北京大の張静氏などから報告をいただいた。月一回をめざしていたが、平均年七回前後、在任中に百回を数えたところで、室井さんにバトンタッチをした。

これに関連して、東海社会学会をたちあげようと、丹辺さんらと一緒に取り組んだ。東海社会学者はそれまで、関東社会学会と関西社会学会との間で、名古屋在住の社会学者も両方の学会に、あるいはいずれか一方の学会に所属しており、その点では、地元で顔を合わせる機会が乏しかった。むしろ、同じ名古屋にいても、東京で挨拶することが多かった。東海社会学会は、かつて、北海道、東北、九州のように、ご当地の旧帝大の社会学研究室を中核とした組織とは違って、本当の意味での地域の社会学会となった。さらに、学会設立の議論から、研究者だけではなく、NPOの方々にも参加を呼びかけ、「市民社会の創造」にも貢献しようという目的を掲げた。その後、日本学術振興会の学術団体に認定され、最終結果は聞いていないが、日本社会学会の法人化にもなう地域割りで、はじめて東海地区が独立した代表者の選挙区となると思う。実際、北海道や東北の社会学会よりも、会員数が多いのである。

この東海社会学会の立ち上げの少し前に、主に社会学の学部学生の社会調査実習の共同発表会を実施していた。最初は、名古屋市立大と二校で行なっていたのが、名古屋周辺、岐阜、静岡県
の大学まで呼びかけ、正式に「インターカレッジ発表会」として発足した。これまで、各学校だ

けで行なわれていた調査実習の成果報告を「横につなぐ」ことによって、学生も指導する先生も、自分たちの教育研究活動を「鏡に映してみる」ことができるようになったと思う。以上三つの事業は、共通して、名古屋大学の社会学研究室を「開放的なものにした」のだと思う。

このインカレは、名大内では前史がある。私が赴任した時、名大の社会学のカリキュラムに調査実習という授業科目はなかった。その科目がなかったために、最初は、私の何かの授業名を読み替えて、実質的に調査実習を始めた。その後、正式なカリキュラム改正を行なって、調査実習を本格的に始めた。最初の数年間は私一人、あとは大学院生をチューターをお願いして担当し、報告書は第一回のまちづくり報告書から第十二回の「東日本大震災と東海地域(三)」までまとめた。私の努力というよりも名大の学部生の能力の高さと、惜しまぬ努力の成果であるが、調査実習報告書は「学部 of 学生の調査実習とは思えないほど」レベルの高いものが刊行されたと思う。その分、学部の学生たちの「時間外労働」は長時間におよび、長期休暇期間中も、フィールド調査が続いた。この調査実習の受講者を中心に、夏休み期間に、河川などの特定のテーマを決めて、半分調査半分観光の調査実習旅行で、西は柳川市から広島、京都、琵琶湖周辺、静岡、東京などを巡った。こうした忙しくしていた調査実習の授業であるが、卒業生から、「自分が一番思い出深い社会学の授業は調査実習だ」といわれると、担当した教員として密かにほくそえんでいた。この授業は、「頭のいい」学生にありがちな「抽象的な言葉遊び」に長けている学生が、自分の勉強した社会学の知識や概念を「生きた社会」とすり合わせる絶好の機会ではなかったか。

大学院のことでは、私が赴任してから、名大の院生に留学生が増えたことも印象的である。それ以前は、煙台の林明鮮さんや、吉林大の鄭南君など、一学年に一人もいなかったが、ある時期から、入学してくる院生の半分以上を中国の留学生で占めるようになった。この理由はいろいろあるが、教員の側の事情としては、留学生の選考と指導の方法がわかってきたことが大きいと思う。訳も分からずだれでも留学生入学させるのではなく（最初、そうした「失敗」例もなかったわけではないが）、個人の能力を見極め、さらに、その学生をどう伸ばせばいいのかがわかってきたのだと思う。学部で日本語しか勉強してこなかった留学生が、修士論文作成のころには、日本人と同一レベルの論文を「外国語で」仕上げるのを見ているのも、頼もしい限りであった。もちろん、マクロには、グローバル化が進み、さらに、中国国内の教育事業や経済成長が関係あることはいうまでもない。

社会学研究室全体ではないが、私個人としては、二〇〇四年十二月に起こったインドネシア、スマトラ地震津波の調査が大きな影響を与えた。私の災害研究は、弘前大時代、一九八三年の日本海中部地震調査から始まるが、災害研究は自分の研究の一部であり、しかも、大きな災害研究組織に所属していなかったために、割と近くで発生した災害について、研究費がないなかで細々と災害研究を継続していた。また、研究分野としても、面白さは感じていたが、自分の研究においても社会学会全体としてもマージナルなものと考えていた。しかし、偶然であるが、日本海中部地震、北海道南西沖地震、三陸はるか沖地震など、津波災害の研究が続いていた。そのため、

スマトラ地震の調査を、研究科の地震火山研究センターの安藤先生から呼びかけられたときに、すぐさま「面白そう」と反応してしまった。翌二〇〇五年の学年末試験が終了した二月上旬、名大の四人、フィリピンの研究者一人、バンダアチエの大学から豊橋技科大に留学していたインドネシア人一人で、現地に入った。その時に見た光景は、予想を上回る被害であった。それまで見ていた日本の津波被災地では、壁が押し流され家屋の柱だけが残る様子であった。だが、現地では、木造家屋はもちろん鉄筋の建物もすべて押し流して、なにも残っていない市街地が広がっていた。

調査内容はともかく、この調査が私としては、二〇一一年まで続いた（大学全体ではその後も地理学の高橋誠さんを中心に継続されている）。この調査によって、社会学研究室が環境学研究科と研究内容としてもつながりをもった。

私は、学生時代は法学部・法学研究科で社会学を続け（博士号は社会学でいただいたが）、弘前大学では文化人類学者に囲まれて社会学を自分流に行ない、名古屋大学では環境学研究科という文理融合型の場で社会学をし、現在の尚綱学院大でも一般教養学部のような場で社会学を教えている。これは偶然そうなったのだと思うが、自分の置かれた場で、何が求められ、何をしなければならぬかを考えて「正しくない社会学者」として研究を続けてきた。自分が研究者として「暮らしてきた」場が、純粹培養の人たちばかりの場でなかったことが幸せであったと、振り返って思う。こうした私の経歴からすれば、社会学は社会学に自閉したときには「終わりだ」と思うし、

いつも、卒業生まで含めて、社会学以外の幅広い分野に関心を寄せてほしいと考えている。そういえば、「社会学会以外の研究者から尊敬される社会学者でありたい」といつていた、故藤田弘夫さんの言葉を思い出した。

在職時代の思い出——中田實先生のこと

黒田由彦

わたしには恩師が二人いる。北川隆吉先生と中田實先生である。北川先生はすでに鬼籍に入られたが、中田先生は現在もお元気に愛知県現代史の編集の要として活躍されている。

文学部社会学研究室に学部学生として所属していたときの直接の指導教官は北川先生であった。当時教養部におられた中田先生は、週に一度、学内非常勤として文学部の授業を担当されていた。そのころ文学部の一階にあった社会学研究室の図書室で聴いた日本農村社会学史の講義は、半年で終わるのが惜しいと思うほど、知的な興味をかき立てられるものだった。

大学院の四年間も、北川ゼミと同時に中田ゼミにも出席しつづけた。その後、わたしは博士課程を二年で中退し、社会学研究室の助手となり、椋山女子学園大学人間関係学部講師を経て、一九九一年四月に名古屋大学教養部に専任講師として赴任することになる。中田先生とは、恐れ多いが「同僚」となったわけである。研究室は中田先生の研究室の真向かいであった。中田先生には、一九九七年三月のご定年まで、「同僚」として学部・院生時代以上にご指導いただいた。わたしは名古屋大学に二十六年間在職したが、中田先生とご一緒させていただいた最初の五年間は、研究だけでなく、様々な点で貴重な勉強の時間となった。

中田先生は穏やかで優しい方であるが、研究においては厳しい先生である。大学院ゼミで当時

出版されたばかりの地域社会学のテキストを輪読したことがある。それは当時第一線で活躍していた地域社会学者たちが共同で執筆した本であった。ある章についてわたしが報告したあと、先生は静かに「その章のどこが間違っていますか」と尋ねられた。有名な地域社会学の先生方が執筆した本に間違ったことが書かれているとは思っていなかったもので、絶句していると、先生は理路整然と事実に基づいて問題点を指摘され、最後にこう言われた——結局、地域社会で何が起きているかという現実を見ていないのですね。君も地域社会を知らないのです、この章の問題点がわからないのです、と。それは、本の世界だけに完結しがちであったわたしに、理論的検討に基づいた調査経験を地道に積み重ねることの大切さを教えて下さった言葉であった。同時に、権威主義に陥っていたことを気づかせて下さった言葉でもあった。

中田先生からその大事さを教えられて、しかしいまだ自分に欠けていると感じるものは、人としての包容力である。教養部で管理職としてご多忙であった先生は、夕方の六時頃になると研究室に戻ってこられる。その頃を見計らって、用事をつくってはよく先生の研究室を訪ねたものである。お疲れで仕事もたまっていたはずなのに、いつでも先生はいやな顔一つ見せず、お茶を入れて下さり、あちこち飛躍するわたしの話を聞いて下さった。話が弾み、八時九時になったこともある。様々なフィールドの話、同業者の評価、若い頃の話など、そのとき先生が話して下さったことは、その後のわたし自身の研究生活に大いに参考になるものだったが、それを超えて、持続低音として響く人としての「生きる姿勢」に感銘を受けた。いまでも、こういふとき中田先生

ならどう考えて行動するだろうか、と自問することが少なからずある。

最後に、最近の話である。愛知県現代史の編集作業は、来年三月の完成を目前に控え、最後の詰め段階にある。わたしは夏休み前に提出した原稿のゲラが返ってきたとの連絡を受け、校正のために丸の内にある県史編纂室に出向いた。それは、ようやく最後に残っていた原稿を脱稿した直後であった。すると、思いがけず編纂室で中田先生が待つておられた。原稿が遅れたことについて何かお小言があるかなとヒヤヒヤしていたが、先生はなにもおっしゃらず、わたしが校正を行う横で、膨大な原稿をチェックしておられた。わたしの作業が終わると、部屋の隅からなや箱を持ってこられて、「黒田君の原稿が全部終わったから、労をねぎらおうと思ってこれを買ってきた」と言われて、蓋を開けると、そこにモンブランが六つ並んでいた。

事務の方が珈琲を入れて下さり、皆でおいしくいただいたのだが、中田先生のこういう優しさには毎度本当に癒やされる。え、毎度？——この感覚、前にも経験したことがある、と思い出したのが、上に書いた教養部の研究室である。そしてその瞬間、中田先生は「恩師」というよりも、いまもお教えいただいている「現役の先生」だったのだということに気がついた。

「在職時代」からは大分はみ出した思い出であるが、ご容赦願いたいと思う。

理論研究から地域の実証研究へ——無謀な挑戦の舞台裏

丹辺宣彦

自分の研究、とくに過去二十年の研究を紹介するように、という執筆テーマをいただいたが、自分の研究を客観的に語ることはなかなか難しいものである。以下の記述はあくまでも自分勝手なとらえかた、後付けの理屈である。

筆者は学部の卒論ではヴェーバーの方法論の解釈に取り組み、その後大学院博士課程から助手の時代にかけては、マルクス派の階級論の枠組を修正して現代社会をとらえられないか、模索していた。しかし当然ながら、修正するといってもマルクス派の窮屈な枠組では限界があり、ある時に『資本論』の価値形態論や転形論に論理的におかしなところがあることを「発見」して、書きかけの博士論文を放棄してしまった。名古屋大学に講師として採用していただいたのはそのような時期であり、大した業績もないのに拾っていただいたことを大変感謝している。

マルクス派の論理や分析が使えないときに、計量的な階層研究に「転向する」という行き方はあったと思うが、筆者にはどうにもなじめなかった。何よりそこから出される結論が砂を噛むようにつまらなく思われ、やる気にならなかつた。いま振り返ってみると、個人の地位達成の要因や、それらを積み上げておこなう「移動レジーム」の分析が、社会学の重要なエッセンスを見逃してしまっているから味気なく感じたのだと思う。しかし当時は、計量研究のグループの人脈か

ら外れていたこと、計量的手法が苦手だったことが直接的な理由だった。そうした中で、常に救いの手を差し伸べてくれたのが、社会学の古典的著作群であった。とくに訴えかけてきたのが、かつて学んだヴェーバーの方法論と社会学を貫いている「価値」「社会的評価」「地位」といった諸概念であり、またデュルケムの集合表象論や集団的連帯をめぐる議論だった。そうした議論の背後に、階層構造の変動がある意識状態と行為へ、とくに集合財供給のジレンマを乗り越えて集合行為へと導かれていくことを示す論理が潜んでいるように思われたからである。こうしたロジックはマルクスの社会学論、コントの社会学の核心にも含まれているが、現在の計量的階層研究ではほぼ欠落している。むしろ社会運動論というジャンルがもつともよく引き継いでいる問題意識であるが、これを欠いていることが、筆者が計量的階層研究を不満に感じた——後から考えれば——根本的理由であった。

複雑な社会構造（階層構造）に直面して、個人はどのようにそれをカテゴリー化して意味づけ、集合行為をおこなうのだろうか。回答は一つに限られないだろうが、この難しい問いに多少とも答えるために、「物象化」というロジックを焦点にマルクスとヴェーバーを方法的に対決させたい。ここで、デュルケム社会学の論理と合理的な集合行為論を補助線として使うという構想が少しずつ浮かんできたのは名古屋大学に赴任してから四、五年が経ってからである。異質なロジックを持つ学派の議論を共通の土俵の上でつなげて論じるだけでもきわめて難しいから、作業は困難をきわめ、各章を何回も書き直し、なんとか不出来な学位論文が完成したのは二〇〇三年になってか

らのことである。いま振り返ってみれば欠陥も多い論文で、無謀な挑戦ではあったと思うが、ゴールにたどり着いた達成感は大きかった。二〇〇六年に学位論文が刊行されても、大部で難しいため読まれることはなく、少数の好意的なコメントをいただいた以外反応は乏しかったが、当然のことだろう。しかしこの作業を通じて、それまで感じてきた多くの疑問や違和感がかなり解消され、自分が追求すべき社会学のイメージが明確になったことは得難い経験だった。マルクスの理論に関しては、「付加価値Ⅱ生産的労働時間」という物象化Ⅱ象徴化された「等式」が理論的誤謬の核心にあるとともに、実践的には階級的な動員をする強い磁場にもなった、と整理して距離を取り直すことができた。

理論研究は、文献を読むのに時間がかかる割に成果が出ないものである。この間やりたくてもできなかったのが、都市・地域を舞台とした実証的階層研究であった。そこで二〇〇七年以降研究課題としたのが、自動車産業が立地している豊田市・刈谷市の研究である。よく知られているように、豊田市の研究は、トヨタ研究の文脈から数多くなされており、近年は保見団地の日系ブラジル人集住をめぐる展開されてきた。今さら何を研究するのか、と言われそうな研究テーマであるが、ここでも目指したのは、研究の枠組の更新であったし、底流には理論的関心があった。日本の地域社会学界、都市社会学界は、それぞれマルクス派、シカゴ派の影響力が強く、良心的かつ堅実な調査をおこなうが、理論的には獨創性に乏しい研究が多い。何か新しいことをしているように見える場合でも、流行や社会的変化・ニーズを表層レベルで追っていることが多い。

豊田の先行研究の場合は、巨大企業が地域に対しては資源を独占し、さまざまな経路を通じて支配をおこなうととらえ、従業員たちはトヨタ生産方式のもと職場でも地域でも疎外されているととらえ続けてきたが、これは明らかにマルクスのパースペクティブによるものである。たしかにこの見方は、企業進出が地域とのあいだに緊張を生む開発期には妥当するところが少なくなかった。しかし開発が一段落してから約半世紀が経ち、その間、各先進国の産業都市は、むしろ産業が衰退により工場が転出し雇用が失われることに苦しめられてきた。筆者が出会った幾人かのトヨタ従業員たちも、まったく「ロボット」のようではなく、むしろ過剰なほど人間味とやる気にあふれている人が多かった。地域経済が発展し住民が相対的に豊かで定住性が高い都市となつた豊田を、企業に搾取・支配された地域と見続けることはどこかおかしいのではないか、トヨタ従業員の働きかたは、搾取・疎外されているというより、ある種の「エートス」と考えることができるのではないか。こうした素朴な関心と、学位論文での関心がない交ぜになつた状態で地域に入り、調査を続けて六年ほどがあつという間に経ち『豊田とトヨタ——産業グローバル化先進地域の現在』という編著を研究仲間と刊行したのが二〇一四年である。インタビュも多数おこなつたが、価値判断を優先しないよう、量的調査データをなるべく重視するスタンスをとつた。調査を通じてしだいに浮かび上がってきたのは、定住性が高く、夫がブルーカラーか技術職にある中流的近代家族が多く、地域的紐帯に支えられた地縁的活動がひじょうに活発な（反面テーマ型の市民活動は低調な）地域の特徴であつた。そしてこれは動的密度が低いにもかかわらず、産

業の成長力と市民所得がひじょうに高い、成熟期を迎えた都市地域の特徴であり、企業と地域の社会的交換関係が長期間かけて変化した結果だと解釈できた。階層論的にみると、こうした都市では閉鎖／排除を基調とするヴェーバー派の階級論と、ソーシャル・キャピタル論の適合性が高くなるだろう。

このような内容に対して、学会報告では冷ややかに無視され、学会誌の書評ではもっぱらマルクス派的な立場から感情的な反発を交えた「批判」が寄せられた。同書の内容はマルクス派にたいてもシカゴ派に対しても死角になっていた都市地域の特徴を指摘するものだったので、守る側からこうした反応が寄せられることは不思議ではない。仲間内で集まって心地よい集団ムーラをつくってしまったイノベーションに不寛容になりがちな日本の社会・組織であるが、新しい知を追求すべき学会までもが同じ状態であることには怒る気も起きずただ呆れる思いである。これに対して、招聘されて講演をおこなった中国・台湾・香港、韓国の各大学では、聞いている研究者たちは常に内容を高く評価して面白がってくれた。教えている文学部の学生も優秀なのに「お堅い」就職先に入ることばかり考えていて、学問的意欲が感じられるのは中国、韓国、ブラジルなどからの留学生のほうである。

このように振り返ると、当時はそう思ってしまったわけではないが、筆者は理論研究、実証研究と二度にわたってリスクの大きい挑戦、無謀な闘いを仕掛けたことになる。肝心の身近な学界であまり受け入れられなかったのは残念であり、見ようによつては「愚行」だったのかもしれないが

何も後悔していない。現在は豊田研究の二作目（近刊の『変貌する豊田』）で新しい階層論のパーспекティブを展開し、四日市調査も進めて公害を経験した都市の「環境まちづくり」について検討しようと考えている。他方で実証研究にもそろそろ一段落つけ、古巣の理論研究でやり残していたネットワーク的集合性の研究に取り組みたい気持ちもある。定年までの任期も残り少なくなってきたが、もうひと頑張りして第三の挑戦はこうだったと後から振り返ることができれば幸いである。

食と農への社会学的接近

立川雅司

二〇一七年四月に、福井康貴先生と同時に着任しました。学部は情報文化学部（改組後は情報学部）を担当しています。

今回の異動は、筆者にとって二重の意味での里帰りとなりました。ひとつは、それまで暮らした、広島や東京、茨城から、高校時代を過ごした名古屋に戻ってきたこと、もうひとつは、長く勤務した農林水産省関連研究機関や農学部（茨城大学）など、農業経済学分野の世界から社会学分野への里帰りとなったことです。名古屋大学の社会学は、東海社会論など地域社会学分野などで研究蓄積を重ねてきたという印象を抱いていましたので、改めて自らが生まれ育った地域を研究の視点で見直す機会が与えられたことに感謝しています。筆者が中学時代に学んだ塾教師も、名古屋大学経済学研究科の水田洋ゼミの院生であったことから、名古屋大学にはそうした意味での親近感もありました。

筆者はこれまで農業経済分野のなかで社会学研究を行なってきたこと、また遺伝子組換え技術やナノテクなどの農業・食品分野への応用について研究してきたことから、食と農の社会学、科学技術社会論を主な研究分野としています。食に対する人文社会科学的研究は近年活況を呈しているように見えますが、その背景には、食が文化変容や社会関係のあり方を色濃く反映している

ことに幅広い分野から注目が寄せられているという事実があります。環境問題や格差、アイデンティティ、家族、地域、グローバル化、対抗運動などといった論点とも食は接点をもち、社会学の研究対象としても様々な想像力をかき立てます。しばらくはこのテーマをさらに深化できるような研究を進めていく予定です。また遺伝子組換え技術の農業・食品への利用に関しては、その後のゲノム編集技術への展開が近年みられ、こうした技術をめぐる海外諸国の政策動向、消費者の認識などについて研究を行なっています。このような先端科学技術と社会との接点に関わるテーマは、社会的な関心も高く、外部資金によって対応している状況です。

名古屋大学の社会学講座は大学院環境学研究科のなかに存在していることで、環境研究との接点という、独自のミッションが付加されていると思われまます。とくに環境学研究科を構成する三専攻のうち、第一専攻と第二専攻が自然科学系であることから、文理融合型の研究科のなかに講座が位置づけられることになり、専攻や講座に対する役割期待や評価の観点で、純粋な文系的環境とは異なったものとなっているように思われます。先にも書きました通り、筆者は長いあいだ農学系のなかで研究生活を送ってきましたので、部局の多数派が自然科学研究者の組織に属することに關しては、あまり違和感を持っていません。文理融合的な部局に所属する自然科学系研究者は、どちらかといえば応用研究的志向を有し、産業や社会に研究成果を還元することに関心を抱きますので、社会科学的視点と接点を持つことも比較的多いためです。ただ、業績評価（連名論文を含めた論文数主義）や研究の位置づけ（社会科学に研究の出口評価を求める）などをめぐ

つては、フィロソフィーが異なることが多く、相互批判の原因にもなります。また自然科学系の研究は、危険物の保管管理、多数の研究補助者の労務管理、多様な出所の資金管理、特許などの知財管理なども行ないつつ教育研究を進めていくということで、合理化や効率化を徹底し、即断即決の傾向がみられます（もちろん人にもよりますが）。いわば研究者の生活世界が人文社会科学系と大きく異なっていることが背景にあるといえます。

着任した時期は、名古屋大学が一連の内部改革を開始した時期でもありました。指定国立大学に向けて新たなビジョンを打ち出し、ガバナンス改革の一環として、東海国立大学機構を設置し、人事プロセスを見直し、各部署に将来ビジョンを提示させるなど、次々と降ってくる検討課題に判断を迫られつつあります。環境学研究科のなかでの社会科学系および社会学の位置づけも、改めて問い直されているこの頃です。いまやこうした改革は永久運動化、常態化していますので、教員の側もこれらの要求に対してどのように対処するか、様々なレベルでの意思決定を迫られてきます。トップは組織の形を変えることで、改革したという実績を対外的に示そうとしますが、組織の潜在的能力（や潜在的機能）にどのような影響を与えたかを評価することはありません。フォーマル組織とともにインフォーマル組織が、組織の生産性や統合に重要な役割を果たしていることは社会学では常識ですが、こうした点は組織再編では考慮されたことがありません。改革が常態化し、改革そのものが様々な面での疲弊をもたらしつつある今日では、組織の内外にわたるインフォーマルな関係がこうした疲労からの回復を可能にする、重要な拠り所となっている気

がします。こうしたインフォーマルな関係を豊かにする仕組みがますます重要になっていくと思われれます。また先に述べた食と農も、じつはこのインフォーマルな関係形成という点で、様々な役割を果たしているように思います。

自らが属する組織の変化も含めて、様々なものが加速化する社会において、社会学として何ができるか、微力ながら考え続けていきたいと思えます。

東日本大震災からエネルギー問題の政策科学へ

丸山康司

私が名古屋大学に着任したのは二〇一〇年の四月である。以来八年の年月を過ごし、これまでの研究歴で一番長く所属した組織となっている。着任したての年度末に東日本大震災がおこったため、専らエネルギー問題に関連したテーマに注力していくことになった。もともとは環境問題をめぐる社会的摩擦や利害対立に関心があり、獣害問題や風力発電のリスクガバナンスを研究テーマとしていた。当初は地に足のついた理論研究も行ないたいと考えていたが、早々の予定変更となった。

地震当日は学会出席のための海外出張でヨーロッパに滞在しており、今ひとつ現実感がないなかでネットでの情報を眺めていた。学会会場ではたくさんの人から声がけされ、注目度の高さに違和感もいだいた。翌週月曜日に発売された週刊誌の表紙は福島原発の事故の写真を見て、大事件であることを実感し、その日の夕方にドイツ政府が原子力発電所のモラトリアムを決めたニュースに触れ、短期間の滞在ではあったが社会が大きく変動する予感のようなものを感じた。実際、エネルギー問題をとりまく社会状況はその後大きく変化し、その変化を追いかけるように専らエネルギー関係の調査研究に携わってきた。

もともとの問題関心は環境問題という言葉の権力性や同調圧力にあり、環境言説の相対化を試

みるような研究を行なっていた。自然保護に対する獣害、再生可能エネルギーに対する環境影響といった問題提起を行なっていた。ある意味オーセンティックな社会学のスタイルと通ずる部分もあったが、現在と当時とでは環境にかかわる社会状況は大きく変化している。科学の不確実性やトレードオフは環境問題の宿痾ともいえるべきものであり、もはやそうした指摘そのものにはあまり意義がないような気がしてきている。例えば気候変動についての知見には不確実な部分が残されるため強権的な対応に疑義を提示することは可能であっても、全否定は不可能である。また不確実性を根拠に現状を批判することは次世代に対する不道徳という別の問題をも喚起してしまう。こうした諸問題を引き受けながらも、可能な限り共有可能な解を探索するのが現在の課題ではないかと考えている。社会学はもともと実証的なスタイルを得意としてきたが、政策科学的な領域での応用にも可能性があるのではないだろうか。

教育では科学の不確実性を前提としてリスク問題をどう考えるかということや科学技術と社会の境界で発生する問題を扱うテーマ群を講義している。いずれも事例の分析を紹介しながら考えるというスタイルをとっている。取り上げる事例も様々で、エネルギーや農業、生物多様性、獣害問題、自然再生などを紹介している。

環境関連という傾向はあるものの、問題関心も国籍も多様な学生の指導にあたってきた。論文指導ではエネルギー関係のテーマが多いが、ツーリズムや農業による地域起こしなど、環境と社会の相互作用を意識したものも多い。獣害問題を含めた人と動物の関係など、今後さまざまな課

題が予見されるテーマもある。学部のほうは多種多様なテーマで個人的な趣味であるサッカーつながりで担当が決まった学生もいる。こうしたテーマでの卒業論文はこちらが勉強になることも多く、楽しませてもらっている。

人のライフサイクルを超える長期的課題において最適解を求めることは、社会科学にとつては厄介な課題となる。これになんとか対応しつつも、現在世代の福利を実現するような工夫が社会学を含む社会科学への期待であると感じている。個別最適と全体最適をめぐる社会的ジレンマに加え、世代間をまたぐ利害を扱うのは大きなチャレンジでもある。

名古屋大学の大学院・教員生活を振り返って

河村則行

私は、大学院生として名古屋大学大学院文学研究科社会学専攻で、教員としては名古屋文学部社会学研究室の助手、情報文化学部・人間情報学研究科、環境学研究科と名古屋大学に三十五年間ほどかわり、その間、大学の独立法人化、大学院重点化、学部・大学院の組織再編などいろいろなことがあり、大学をめぐる社会の環境は大きく変わった。情報文化学部(教養部の改組)、人間情報学研究科、新設の環境学研究科、情報学部(情報文化学部改組)と、改組・新設で設置審を四回も受けることになり、それにともない研究テーマも多少変わってきたが、環境学研究科以降の時代を振り返りたい。

二〇〇一年に環境学研究科が設立され所属することになってから、いわゆる理系などの他学問分野の先生と研究・教育でつきあうことが多くなり、多くのことを学ぶことができた。特に環境学研究科ではO R Tという教育プログラムに協力教員として参加した。O R Tとは、On-site Research Training の略で、名古屋大学グローバルCOEプログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」(二〇〇九〜二〇一三年度)の時に始まり、「現場で研究に取り組むこと」を通じて「俯瞰力」と「現場力」のスキルの養成を目指す教育プログラムで、現在も継続している。私は伊勢湾流域圏のチームとして、これまで、愛知県阿久比町、榑田川流域の三重県松阪市、鳥羽市

答志島、岐阜県恵那市、白川町・東白川村、今年は長野県木曾町のフィールドをまわり、博士後期課程の学生とともに調査に参加し、森林や海洋などの他分野の専門の教員とも交流し、自然科学の知識も深めることができた。ここでは人口減少、高齢化、地域産業の衰退などの問題を抱える地方の現状を観察し、毎年開催される現地報告会では、地域資源の活用など問題解決にむけて自治体や地元の人たちと討論したが、改めて問題解決に取り組む地域コミュニティの重要性を確認できた。

また、二〇一五年八月〜二〇一八年七月の四年間、名古屋大学の社会学講座が事務局を担当している東海社会学会の庶務理事を務め、いくつかトラブルもあったが、東海地方の多くの社会学者と交流することができたこともよかった。東海社会学会は、二〇〇八年に設立された東海地方を拠点とする社会学の学会であるが、研究者だけでなく、市民活動団体との交流もめざしており、そこでも多くの人と出会うことができた。特に研究企画委員として大会シンポジウムの企画に関わり、「まちと縁の創造——人口減少社会を視野に入れて」（二〇一五年）、「まちと縁の創造——協働性を編み直す」（二〇一六年）を開催した。ここでは子育て支援、健康支援（地域包括型ケア）、多文化共生の地域活動など興味深い事例の報告があり、多様な活動主体が地域コミュニティの形成に関わり、テーマ型組織と地縁型組織の連携が模索されていることが明らかになった。製造業の衰退で人口減少・高齢化が進む名古屋市南部における、南医療生協の「おたがいさまのまちづくり」運動や、人口が増大し若い子育て世代が多い「若い街」である長久手市における、「混ざっ

て暮らす」まちづくりなど、先駆的な取り組みも学ぶことができた。

このシンポジウムをきっかけに、東海社会学会の会員の有志で、名古屋都市圏研究会を立ち上げ、現在、科学研究費「名古屋都市圏の「見えない格差」——何が地域社会のウェルビーイングを規定するのか」(二〇一八～二〇二二年度)を受けて研究を進めている。名古屋都市圏は比較的好調な製造業を基盤に安定した家族構造を持ち、格差が小さく「大いなる田舎」と揶揄されてきたが、ポスト工業化や高齢化のもとで、成長する地区と衰退する地区との格差が拡大することが予想される。そのなかで、地域コミュニティのあり方(つながり)は、住民のウェルビーイング(健康・幸福)にどのような効果をもたらし、まちの持続可能性を高めることができるのかを検証したいと考えている。退職まで残りわずかとなったが、引き続き研究・教育にいそしんでいきたい。

私は九州大学を出て福岡の私大に就職し、その後香川大学を経て、二〇一三年に名古屋大学に赴任した。もともとは理論研究から研究をスタートさせ、修論はギデンズの学説で書いたが、就職してからは実証研究に足場を移し、都市水害や瀬戸内離島の調査などに携わった。災害や離島の調査を体験すると、社会生活が自然環境的な条件に強く制約されていることを否応なく痛感させられる。しかし、そのようなことは社会学の世界では重要な研究テーマとはされていなかった。社会学からは多くのことを学んだが、そうした点では飽き足らなさを感じていたところがあった。そんな私にとって、環境学研究科という学際的な部局は魅力的に映った。

名大に赴任してからはもっぱら震災復興の調査に従事している。その背景にはいうまでもなく二〇一一年に発生した東日本大震災がある。しかし、私がまず関わるようになったのは二〇〇四年に発生したスマトラ地震の復興に関する調査だった。スマトラ地震が起きた直後から環境学研究科の研究グループが被災地アチエの調査に取り組んでいたことは知っていた。東日本大震災発生後、アチエの復興と東北の復興の比較研究プロジェクトが起ち上がり、そうした観点からあらためてアチエの調査が継続されることになったのである。この研究の中心にいたのが田中重好教授であり、私には田中先生の後任の役目が期待されたのかもしれない。

しかし、それまで海外の調査経験が皆無で、被災時のアチエを実際に体験していない私にとって、この調査は過酷なものであった。言葉がわからない、食べ物合わない、衛生条件が悪くすぐに腹をこわすといったことに加え、何よりも長く調査を継続してきた他のメンバーとの間に圧倒的な知識量の差があり、はつきり言っただけは私がお荷物以外の何者でもなかった。日中の現地調査を終えた後、よく田中先生たちはコーヒーショップに陣取って喧々諤々議論をたたかわせていたが、私は「こんなこともわからないの」と呆れられるのを恐れ、なかなか議論に入ることができなかったことをよく覚えている。

しかし、そんな私でも三年経った頃からようやく周りが見えるようになってきた。曲がりなりにもそう思えるようになったのは、その頃実施することができたサーベイ調査によるところが大きい。この調査はアチエ州の被災地全域のコミュニティを対象としたもので、現地のシアクラ大学の協力を得て実現したものである。サーベイ調査のデータが得られたことで、それまで「この村ではこうだった」、「あの村ではどうだった」でしかなかった断片的な事例的知識をある程度全体の中に位置づけて捉えることができるようになった。量的なデータ分析の結果からいろいろ発見があったことで、現地調査で聞くべきことが自分なりにはつきりするようにもなった。そうなることで気持ちにもある程度余裕ができ、調査には直接関係しない、日常生活のディテールにも目を向け楽しむことができるようになった。現地調査だけでなく、量的調査も行えることは社会学の強みだとしてつくづく実感した次第である。

もつとも、国際比較研究は難しい。様々な条件が日本とは大きく異なるアチエのような社会の一体何に注目し、何を比較したらよいのか、比較したところで何の意味があるのか。この問いはいまも頭を悩まし続けているが、ぼんやりと感じるようになってきたことは、コミュニティの原初的な成り立ちは自然環境条件への適応形態のようなものとして理解できるのではないかということである。災害はそうした点でのコミュニティの特性を照らし出す面があるようで、そういった観点から何がしか意味ある比較研究ができないかと考えたりもする。ともあれ、地方大学から名大に転任した私に、同様の経歴を持つ田中先生は「名大に来ると国際化が近くなるよ」とおっしゃられていたが、私はアチエの調査でそのことを実感したし、国際化を考える際に準拠点になっているのはそうした意味でのコミュニティである。

災害調査で得た知見を、社会学が専門ではない研究者を前にして報告することが多々あったのも、名大に来てはじめて経験したことである。時には地震学など、社会学とはおよそ関係のない分野の会合で報告を求められることもあり、何をどう話してよいものやら、頭を悩まされた。調査そのものも社会学以外の分野の研究者と一緒に行うことが多くなった。特に、地理学の高橋先生とは行動をともにすることが多かった。高橋さんには調査の現場で事あるごとに「この場合、社会学ならどう分析するの」、「社会学に何ができるの」と問われ、時には閉口し、口論に発展することもあったが、違う視点から社会学とは何かを問い直す経験は大いに刺激的だった。おかげで社会学の学会で災害に関する研究報告を聞いても飽き足らなく感じるが増えてしまった

が、それも視野が広がったせいだろうと勝手に自己弁護している次第である。

七十年前に文学部社会学講座が誕生したとき、大学院は環境学研究所ではなかった。しかし、私は環境学研究科ができた後に名大に赴任し、その恩恵を多く受けた。そうした恩恵を学部や大学院での社会学教育にどう還元していくかが、問われているのだらうと思う。微力ではあるが、その務めを果たすべく努力を続けたい。

着任十二年目の中間報告

上村泰裕

名古屋大学に着任してから十二年目を迎えた。政策社会学における名古屋学派を創設するといふ大きな抱負を持つて法政大学社会学部から移ってきたのだが、まだ実現できていない。いたずらに馬齢を重ねたことに気づいて呆然とするばかり、以下は忸怩たる反省文のような中間報告である。

私は自分の専門を説明する際には、福祉社会学、比較社会学、政策社会学と並べることにしてゐる。「福祉社会学」は、たんに福祉制度の細かいことを詳しく研究する学問ではなくて、私たちの暮らしがいかに福祉政策によつて条件づけられているかを明らかにする学問である。例えば、少子化は国の将来を左右する大問題だが、じつは福祉のあり方が出生率を規定する要因の一つになっている。

これは国際比較をすればはつきりすることだが、先進国に限ると、乳幼児の保育所利用率が高い国ほど出生率が高い。母親が働きながら子育てできるように支援する国ほど子どもが多いのは考えてみれば当然だが、自分の国だけを見ていたのでは気づかないことである。他の国のデータと比較することで初めて見えてくる。国際比較に限らず、他のものと比較しなければ対象そのものについてもわからない。こう考えるのが「比較社会学」である。

私は社会学もサイエンスだと考えているが、価値の問題（何が大事か）を扱うところが自然科学とは違う。社会科学では、メカニズムがどうなっているかの分析とともに、ではこれからどうすべきか、どう変えていくべきか、あるいは変えるべきではないのかを考える。どう改革すべきか、どんな政策を選ぶべきか。人によつて意見が違うが、意見の違いや対立も分析する。そういったことも含めて研究するのが「政策社会学」である。

私自身は、とりわけ東アジア諸国の福祉に興味を持つて研究してきた。福祉社会学、比較社会学、政策社会学のすべてを駆使した研究成果として、『福祉のアジア——国際比較から政策構想へ』（名古屋大学出版会、二〇一五年）という本を出した。つたない出来だったが、志を評価されたのか、毎日新聞社とアジア調査会から第二十八回アジア・太平洋賞特別賞（二〇一六年）をいただく幸運に恵まれた。また、この本をかなり書き直したうえで、遅ればせながら博士論文として提出することもできた（二〇一六年、東京大学）。

教育面では一人の博士も育っていないので反省するほかないが、及ばずながら小さな貢献はしてきたつもりである。着任早々、名大生の多くはそれなりに勉強ができるので、勉強だけではだめだと伝える必要を感じた。勉強と研究は別物である。勉強が既知の事柄の学習であるのに対して、研究とは未知の事柄を自ら発見することである。このことを学生諸君に訴えるべく、西原先生、田中先生、丹辺先生の助言も得て「卒論作成マニュアル」を作った（二〇一〇年）。先生方にはずいぶんわがままを聞き入れてもらい、隔週だった学部ゼミを毎週開講に変更すべくカリキュ

ラムを変えてもらったりした(二〇一〇年度から実施)。

たぶん誰も覚えていない貢献をもう一つ記しておきたい。二〇〇九年に社会学講座が全学教育棟北棟に集結した際、今の共同研究室の東半分には書架が並ぶはずだった。私はそれに反対し、当時の渡辺助教には申し訳なかったが、助教室を図書室にしてもらった。学生が集まって自由に議論できる空間が必要だと思ったからである。工事の手違いで、共同研究室の内壁が廊下と同じ灰色で塗られてしまった。これでは陰鬱になるからと、明るいクリーム色に塗り直してもらおうべく渡辺助教とともに事務に乗り込んで談判したことも覚えている。

社会政策に関する学際的な議論の場を作ろうと、中京大学の岡頼光さん、法学部の田村哲樹さん、南山大学の山岸敬和さんとともに社会政治研究会を立ち上げたのも二〇〇九年である。以来、二十二回の研究会を開催してきた。主目的は飲み会と言いながら、毎回新鮮な話題で印象に残る議論を重ねてきた。二〇一八年には、福井先生とともに経済社会研究フォーラムを立ち上げた。学問的議論を楽しく風通しよくできる場を作るのは主に自分のためだが、講義やゼミとは違う刺激を学生が受け取ってくれることも期待している。

名古屋大学から「海外研修」(いわゆるサバティカルではない)としてハーバード・イェンチン研究所に派遣されたことは貴重な経験だった(二〇一二〜二〇一三年)。昨年亡くなったロナルド・ドーア先生の推薦状が効いたのだと思う。メアリー・ブリントン先生、ピーター・ホール先生、エズラ・ヴォーゲル先生といった大御所と親しく交流したほか、毎日二つも三つも開催され

るさまざまな分野のセミナーで数えきれない耳学問を楽しむことができた。今でも、ハーバード時代に出会った人と国際会議で偶然再会したりすると嬉しくなる。

国際的な研究交流の重要性に気づいたのは東京大学社会科学研究所の助手時代（二〇〇一〜二〇〇三年）だが、名古屋大学に来てからは各種の学内制度を利用して海外の友人を招き、講義やセミナーをお願いしてきた。レイモンド・チャンさん（香港城市大学）、ムクル・アッシャー先生（国立シンガポール大学）、チェ・ヨンジュンさん（韓国・延世大学）、スヴェン・ホート先生（スウェーデン・リンネ大学）、ダニエル・ベランドさん（カナダ・マギル大学）などである。彼らとたまに会うと、名古屋のあれこれを懐かしがってくれる。

豊田講堂で東アジア社会政策会議（East Asian Social Policy Conference）を開催したことも思い出深い（二〇一七年）。二〇〇五年から参加している同会議は、留学経験のない私に海外の同業者との交流の回路を一気に開いてくれた。チェ・ヨンジュンさんと知り合ったのも同会議がきっかけである。国際会議の開催は一生分のボランティアをした気分だったが、感謝を込めてオーガナイザーを務めた。アトラクションとして宝生流二十世宗家の宝生和英さんに「杜若」を舞っていたいただいたその優美さは、今も参加者の語り草になっている。

ところで、内外の碩学に会うと、社交的な見かけの陰で禁欲的に業績を積み重ねている人が少なくない。私はと言えば、そういうことに無自覚なまま純粋に学問的社交を楽しんでしまっただろう。まことに、少年老い易く学成り難しとはこのことである。田村哲樹さんの先生の小野

耕二先生に、どうしたら田村さんのような学生が育ちますか、と聞いたことがある。小野先生の答えは、先生自身が研究することです、とのことだった。その田村さんによれば、院生指導では厳しさよりも励ましが大事だという。いずれも、むべなるかな。

私の研究人生もいつのまにか後半戦に差しかかっているが、いささかの志がないわけではない。その一つは、福祉国家の発展を国際関係のなかで捉え直すことである。グローバル社会政策と国内社会政策が時空のなかで相互作用しながら同時進行するさまを捉えたい。さらに、デジタル経済の到来とともに再生しつつあるインフオーマティを克服すべく、仕事と福祉を結び直す新たな政策構想を描き出したい。そのためには、歴史と比較の座標軸をさまざまに延ばし、社会学的想像力の翼を羽ばたかせてみなくてはならないだろう。

名古屋大学での十三年を振り返って

青木聡子

二〇〇六年十月の着任から十三年が経ちました。名古屋大学が教員として初めての職場だっただけでなく、名古屋自体それまでまったく足を踏み入れたことがない地だったため、文字通り右も左もわからない状態で働き始めました。最初の二、三年は、毎週の授業をこなすので精いっぱいだったのを、つい昨日のことのように思い出します。それでも当時のわたしが社会学講座でやっていけたのは、ひとえに同僚の先生方のおかげです。いくら感謝しても足りません。そしてその先生方も、現在では、大半が定年退職や転出で名古屋大学を去られました。気がつけば、わたしは丹辺先生と河村先生に次ぐ古株です。

この間の教育と研究を振り返ると、まず教育に関しては、修士九名、博士三名の指導をしてきたことが挙げられます。来年度、十人目の修士学生を受け入れる予定です。さらに学部学生も含めると多くの学生と関わってきました。そのひとりひとりが思い出深いのですが、なかでも、昨年度、博士論文の主査を初めて務めたことは貴重な経験でした。博士論文を執筆することの過酷さは、自分が院生のときに経験し身をもって知っていました。副査も何度か務めたことがあります。ですので、博論の主査をすることについてある程度の覚悟はもっていました。実際にやってみるとそれは想像を超える大変さでした。博論を書くのは大変ですが、書かせるのもまた大

変。自身の指導教員だった長谷川公一先生に改めて感謝した次第です。同時に、わたしの指導の下で粘り強く博論を書き上げてくれ、青木ゼミで博士号取得者第一号となった伊藤綾香さんにも感謝です。

研究に関しては、大きく三点あります。まず何といっても単著を上梓できたことがこの間(かんの)大きなできごとです。名古屋大学着任後の忙しきやデータの更新を言い訳に、博論の単著化を先延ばしにしていたのですが、田中重好先生から編集者の方を紹介していただいたことを契機に、『ドイツにおける原子力施設反対運動の展開——環境志向型社会へのイニシアティブ』を二〇一三年にミネルヴァ書房から出版することができました。人びとは何を思っているように運動に身を投じ、彼／彼女らのその身を投じるという行為はどのようなかたちで報われるのだろうか。これが院生時代から一貫したわたしの問題関心で、拙著ではこの問題関心にできるかぎり応えようと思いました。そのすべてに応えられたわけではありませんが、わたしなりに人びとの闘いっぷりや抗いっぷりを描き切ることができたと思っています。

その拙著のなかでも触れていますが、わたしの研究のフィールドであるドイツ社会は、二〇一一年の福島第一原発事故を受けて連邦政府が脱原発へと決定的な舵を切ったことで、大きな転換点をむかえました。これによって新たな研究テーマに取り組むことになったことが、研究に関する二点目です。具体的には、原発立地自治体およびそこに住む人びとの視点から脱原発やエネルギー転換をとらえるというテーマです。脱原発・エネルギー転換で話題にのぼるのは、とかくエ

エネルギー供給源の転換、すなわち原子力由来や化石燃料由来のエネルギーから再生可能エネルギーへの転換です。それが技術的に可能なのか、それによって十分な電力を供給できるのか、とりわけ重化学工業が盛んなドイツにおいて産業に負の影響を及ぼすことなく再生可能エネルギーへの切り替えは可能なのか、という点に関心がもたれがちです。もちろん、それらは重要ですが、原発が停止し閉鎖することによる「原発の地元」への経済的・社会的影響については、ドイツにおいても忘れられがちです。

そこで、これまで原発に依存せざるを得ないかたちで生活を営んできた人びとは、脱原発という「ピンチ」にいかに向面し応じていくのか、という問題意識のもと、原発が閉鎖した／しつつある複数の立地自治体で調査をおこなっています。この調査の結果が、ゆくゆくは日本の原発立地自治体にも還元されるようにと願っています。ドイツと日本とは原発立地の地理的な相違や交付金制度の決定的な違いがあり、端的にいえばドイツの立地自治体のほうが日本のそれよりも原発への依存度が低く、原発閉鎖による負の影響はまだ小さいようです。それでも自治体財政や雇用への影響や、地域のあり方の変化など、それなりに影響があるかなで、人びとはレジリエントに生きており、それは原発立地以前から人びとが有していたしなやかさやある種のしたたかさ由来するように思われます。今後さらに調査を重ねて、この点を検討していきたいと思っております。

最後に、名古屋に赴任して取り組むことになった研究対象として名古屋新幹線公害問題があり

ます。この、公害反対運動を経験した地域や人びとの「その後」を検証するというテーマに取り組むようになったことが、研究に関する三点目です。わたしが名古屋に赴任することになったとき、名古屋についてわずかに知っていたことといえば、かつて名古屋新幹線公害問題が発生し住民運動がおこなわれた地域であること、それについて一九八〇年代前半におこなわれた調査研究をもとに環境社会学ではお馴染みの受益圏・受苦圏論が精緻化されていたということでした。その成果は、船橋晴俊・長谷川公一ほか『新幹線公害——高速文明の社会問題』（一九九五年、有斐閣）として刊行されており、その刊行の数カ月後（一九八六年三月）に名古屋新幹線公害問題訴訟は、和解というかたちで一応の決着をむかえました。名古屋新幹線公害問題は法廷を舞台にした闘いを終え、やがて社会的に、さらには研究者のあいだでも、「終わった」事例とみなされるようになりました。

こうして「終わった」ことになってか二十年后に名古屋に赴任したわたしは、新幹線公害問題を経験した地域や人びとの「現在」に興味をもち、現地に赴きました。そこで目の当たりにしたのは、和解から二十年経ても三十年経ても沿線地域ではさまざまな問題が解決していないばかりか、和解当時には想定されていなかった新たな問題が生じていることでした。メンバーの高齢化により運動組織が縮小せざるを得ないなか、公害問題にいかにか決着をつけることができるのか、原告団・弁護団の活動に参加させてもらいながら、社会運動の「幸せな」終わらせ方について考えています。

こうして振り返ってみると、わたしの研究テーマは、院生時代には運動研究の王道たる「動員」であったのが、その後はそれ以外の部分へと拡大してきたようです。これは、名古屋大学で院生の皆さんや先生方とのコミュニケーションを通じて様々な刺激を受けたこと、そうやって得た着想を大学外の研究者の方々と議論して揉んだ結果であるように思います。調査先での多くの人びととの出会いも新たな研究の原動力となってきました。院生時代に加えて就職後に得られたつながりを大切に、今後も教育と研究に取り組んでいきたく思います。

着任三年目でおもうこと

福井康貴

私は二〇一四年に博士号を取得した後、母校で助教として過ごしてから、二〇一七年に名大の社会学研究室に着任した。今年でようやく三年目を迎えたところである。期せずして研究室開講七十周年という節目の年に居合わせたのは何かのご縁であろうか。

縁といえば、二〇一〇年に名大で日本社会学会大会が開催された際、私は博士課程の大学院生だったが、同時に学会事務局の庶務として名大の先生方に種々の面倒なお願い事をする立場にあった。当然のことながら数年後に自分がそこで教えることになるとは夢にも思わなかった。学会大会の会場はたしか全学教育棟と情報学研究科棟だったように記憶している。現在、自分の研究室が全学教育棟にあり、情報学研究科棟と行き来していることを考えると、なんだか不思議な気持ちになってくる。

まだ駆け出しの教員なので社会学を教えるのは手探り状態である。重視していることを挙げる とすれば、社会学の生産者になるためのトレーニングをすることである。社会学の生産とは、ある現象にたいして謎や疑問をいだき、問いと仮説をたて、社会学の概念と自分で調べた証拠を使って答えを出すということである。要するに研究者になるためのオーソドックスな訓練である。

ただ、そのように言ってしまうと研究者を志望しない大多数の学生の心には響かないので、もつと掘り下げて伝える工夫が必要である。私の授業では、社会現象を批判的に検討する作業は、社会の別様のあり方を構想するための土台だから、社会学は社会で生きる全員が身につけるベーシックスキルなのだと伝えている。いまのところこの説明で、学生たちは納得してくれているようである。現在の社会学研究室は文学部に学部があり、大学院は環境学研究科に設置されている。国立大学改革に文理融合型の研究科であることも加わって、最近では学問分野のアイデンティティについて反省「させられる」機会が非常に多い。改革者たちが私の説明で納得してくれるかは定かではない。

私の専門は社会階層論と経済社会学である。大学院の頃から、経済社会学に関しては大卒労働市場、社会階層論との関連では非正規雇用から正規雇用への移動について研究をしてきた。いわば若年層の職業キャリアにおけるコアの部分と周縁的な層を研究対象としてきた。こうした研究対象を選んだ動機はわりと単純であり、新卒一括採用から定年退職にいたる横並びのキャリア形成のしくみに窮屈さを感じてきたからである。もちろん新卒で入社して定年まで勤め上げる「標準労働者」が決して多くないことはよく知られており、とくに女性の場合はまったく標準的なキャリアとはいえない。雇用の流動化や不安定化も指摘されている。しかし「標準労働者」的な人生は社会的事実としての拘束力を失っていないように感じられる。こうした日本の常識は海外の非常識であり、この点を研究として上手く海外に発信していくことが目下の私の課題である。

現在は、日本の労働市場における転職と賃金格差、そして社会的企業の生態系やソーシャル・イノベーションの普及へと研究関心を広げている。これらも日本の会社やそのオルタナティブという意味では、これまでの研究と連続性があると思っている。社会的企業に関しては名古屋市の支援団体に協力をお願いしており、来年度の調査実習先としてもお世話になる予定である。

私の専門分野には古典的な著作の翻訳や日本語で書かれた入門書・教科書が少ないという残念な共通点がある。日本語の本が少ない分野で卒論や修論を書こうとする学生は少ないだろう。翻訳や教科書を出すといった研究の裾野を広げることにもチャレンジしたい。そうした思いもあつて経済社会研究フォーラムという研究会を上村先生と立ち上げた。関心がある方はぜひお越しください。

「研究・教育で特に尽力されたこと」という過去形のお題に反して現在や未来の内容に終始してしまつたが、それも「若手」らしくてよいのではないだろうか（自分でいうのもどうかと思うが…）。きちんとお題に向き合うのは二〇二九年までの宿題にしておこう。

名古屋大学社会学研究室的歴代スタッフ

年	本田喜代治 1896.5.19-72	阿閉吉男 1913.5.19-97	田中清助 1923.3.19-95	北川隆吉 1929.5.20-14	松本康 1955.5.5	丹辺宣彦 1960.5.5	折原浩 1935.5.5	田淵六郎 1968.5.5	西原和久 1950.5.5	田中重好 1951.5.5	上村泰裕 1972.5.5	室井研二 1968.5.5	福井康貴 1980.5.5	平山高次 1905.5.19-98	佐々木光 1926.5.20-04	中田實 1933.5.5	佐野勝隆 1937.5.19-87	貝沼洵 1946.5.5	藤井勝 1955.5.5	板倉達文 1943.3.20-12	黒田由彦 1958.5.5	河村則行 1961.5.5	青木聡子 1978.5.5	丸山康司 1964.5.5	立川雅司 1962.5.5
1949	■																								
1950	■																								
1951	■	■												■											
1952	■	■												■											
1953	■	■												■											
1954	■	■												■											
1955	■	■												■											
1956	■	■												■											
1957	■	■												■											
1958	■	■												■											
1959	■	■												■											
1960		■												■											
1961		■												■											
1962		■												■											
1963		■												■											
1964		■												■											
1965		■												■											
1966		■												■											
1967		■												■											
1968		■												■											
1969		■												■											
1970		■												■											
1971		■												■											
1972		■												■											
1973		■												■											
1974		■												■											
1975		■												■											
1976		■												■											
1977		■												■											
1978														■											
1979														■											
1980														■											
1981														■											
1982														■											
1983														■											
1984														■											
1985														■											
1986														■											
1987														■											
1988														■											
1989														■											
1990														■											
1991														■											
1992														■											
1993														■											
1994														■											
1995														■											
1996														■											
1997														■											
1998														■											
1999														■											
2000														■											
2001														■											
2002														■											
2003														■											
2004														■											
2005														■											
2006														■											
2007														■											
2008														■											
2009														■											
2010														■											
2011														■											
2012														■											
2013														■											
2014														■											
2015														■											
2016														■											
2017														■											
2018														■											
2019														■											

第四部

卒業生・在学生のメッセージ

兵舎で過ごした学生時代

安藤慶一郎

教師のいない研究室、本の並んでいない読書室、これが昭和二十五、六年ごろの「社会学研究室」であった。兵舎をベニヤ板で区切っているいろいろな部屋が急造してあった。

常住している先生がなかったから、集中講義にやってこられた先生方に親しみを感じた。古野清人（九州大学）、稲葉隆（愛知大学）の両先生などがそうである。古野先生の集中講義のときである。「君、タバコを一本くれないかね、兵舎に泊まっていて買うこともできなくてね」。学生の出したしわくちやのタバコを、先生はおいしそうに吸っておられた。戦後で、物資が欠乏していたから、一本のタバコですら貴重品であったのである。

当時は本も手に入らなかった。本田先生が Grintberg の *Sociology* を社会学概論に使うからと言われてもなんともならないので、わたくしと刈谷君とでひきうけ、一冊全部を原紙にきって謄写版で印刷した。悪いザラ紙で、一冊分はかなりの分量になった。概論と言っても、先生が講義されるのではなくて、一章ずつを学生が分担して報告するだけである。これが学生時代の唯一の「社会学概論」という講義であった。

卒業論文についても印象が強い。『中央公論』で、特殊な小作慣行の村落の記事を目にしたが、さてそれが愛知県海部郡のどこかわからない。県庁に行つて聞いてみたがはつきりしない。最

後に会った「小作官」が知っておられた。さっそく現地へ出向いた。窮すれば通ずで、ムラで知り合った児玉さん（岐阜高等農林学校卒）にすつかり世話になり、「小作慣行と村落構造」を一年六カ月がかりで仕上げることができた。最近、その下書きが書庫の片隅から出てきた。生硬な難しい文章がつづつてある。赤面のいたりであるが、ひたむきであった学生時代のひとこまとして、長く保有しておきたいと思っている。

（昭和二十七年卒）

（出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年）

あの三年間を回想して

上杉重吉

今から四十年前の日記（と言っても、覚え書や新聞の切り貼りのノート）を前にして、ひとり感慨に浸っている。

・一九四九年五月九日 十時半登校。尼ヶ坂から徒歩二十五分、健康のためにも歩くに限る。毎日、瀬戸電往復の十円を節約しよう。服部教授休講で全く講義なし。学生会館で静岡の旧友（学部は種々）数人とダべる。

・一九五〇年五月八日～十日 「世界文学講座」として東北大名誉教授・土居光知博士の特別講義。学生、堂に満つ。

・同年五月十三日～十七日 本田教授の集中講義、法経の学生も加わって多数聴講。十三日午後、教授は予算決定の教授会へ出席。われわれ社会学専攻学生は高橋助手を囲んで懇談。今日の欠席者にコンパの件を連絡。十六日四時～八時 社会学専攻学生コンパ。本田教授、高橋助手、学生：藤田・横飛・山田・佐々木・安江・安藤・刈谷・上杉。一年生二名も参加して賑やか！

「封建時代の遺物たる名古屋城を背に、数年前までは軍国主義日本の源泉であった旧六連隊兵舎の中では、今や若い世代の人間が勉学に励んでいる」（名大学生新聞）。

たしかに大学も新興の氣に溢れ、われわれ学生の意気も高かった。戦後の最悪の状況下、問題

も次々におこつて、幾度もストライキに立ち上がったものである。学部・学科によつてはとかく統一も欠きがちだったが、社会学部は教授とともに問題を考え続け、社会に接し、そして手足も動かして実践していたと思う。

「学生新聞編集部」で広告取り等のため法学部の下山定彦兄（国鉄総裁の長男）と街を歩きまわつたのも印象深いのが、生活のためアルバイトもよくやつた。競馬場・競輪場の払戻し係、野球の審判や家庭教師などなど。また、高橋さんが総理府世論調査室の調査員になられたことから、近郊の農漁村にも泊りがけで調査に赴いた。その体験から森永乳業の依頼で調査のすべてを任せられたり、思い出の多い三年間でもあつた。

本田さん、阿閉さんと高橋さんのご苦労はさぞ多かつたと思う。お三方の温かい理解のもとで学生は幸せだった。私も人間の運命を考える年になつた。昨年十一月ネパールトレッキングに参加し、五三六〇メートルの目的地ゴークョ・ピークからの下山途中、高山病のため生死の境を彷徨つた。何かにつけ、教室の内外を問わず肌でふれあつた三年間を回顧し、恩師や高橋さん、友人たちに心から感謝の言葉を送り続けたい。

（昭和二十七年卒）

（出典…『名古屋大学社会学部研究室四十年小史』一九九〇年）

夢多き若い時代をふりかえって

戸谷修

このたび五十年も前のことになる私たちの学生時代を回想する機会を与えられた。まっ先に浮かんでくるのが旧陸軍兵舎の二階の一室にあった社会学の研究室である。そこで、私たちはフランスの社会学思想を中心に研究されていた本田喜代治先生、ドイツ社会学理論を専門にされていた阿閉吉男先生、このお二人の先生からさまざまなことを学んだ。

本田先生はアンリ・ルフェーヴルの『マルクス主義』を使って講義や演習をされていた。史的唯物論を基礎において新しい社会学を構築しようという意欲に燃えておられた先生だった。当時はアメリカ兵が数多く名古屋にも駐屯していてジープで街の中を走りまわるといふ、まだアメリカの占領下に置かれたような状態であったから民族の真の独立ということが大きな関心事になっていた。このような雰囲気もあつてか、本田先生がそのころ訳されたジュールジュ・ユニョの『民族問題』を手がかりに、「民族とは何か」というテーマで研究室では熱い議論が闘わされていた。

一方、阿閉先生は若い新進気鋭の先生だった。先生はルネサンスから大衆社会までを幅広く対象とされた。『市民社会の系譜』という著書を出された時だったが、やがてご自分の研究をジンメルやウェーバーなどドイツ社会学理論の研究に研究対象を絞っていかれようとされている頃だった。したがって私たちの授業も、社会学史ではドイツの社会学者たちを丹念に紹介されていた

し、演習でもテンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の講読に集中しておられた。私たち学生は当時このお二人のすばらしい先生から学んだのであるが、勉強不足もあつてか、非常に対照的な先生方から学んでいるような印象をもったものだった。当時、名古屋大学には社会思想研究の分野では実にすばらしい先生方が数多く活躍されていた。本田先生は今までの社会思想史のあり方を厳しく批判して、思想の系譜をたどっただけでは十分ではなく、その思想が生まれ、育まれてきた社会との関連で思想の発展を捉えなければならぬことを私たちに強く訴えられた。この教えは当時の学生たちにとって、その後の人生の力強い糧となったように思う。

また、私たち学生は「禁じられた遊び」「カサブランカ」「生きる」「きけわだつみの声」など数多くのすばらしい映画もよく見た。ロマン・ロランの『魅せられたる魂』やルイ・アラゴンの長編『レ・コミュニスト』など、大きな感動を憶えた小説もよく読んだ。そして、それらについて互いに語りあつたものだった。経済的には貧しかったが、あの過ぎ去った若き日々は自分たちにとって夢と希望に溢れた実によき時代であつたように思う。

(昭和二十九年卒)

(出典…『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

私の本田先生

水野香織

時間はあらゆるものを浄化する。あの頃のことはずべて懐かしく美しい。

本田喜代治著『近代フランス社会思想の成立』は、昭和二十七年ごろ上前津の古本店で偶然に入手した。しかし講義の中ではこの著書の内容にはほとんど触れられることがなかった。

続いて『コント研究』、それに辰野隆先生とのご共著の『佛蘭西自然主義』に接し、先生の学識の深さ、学問の守備範囲の広さに圧倒される思いであった。

学部の間は破防法成立後の日本社会が、右旋回を鮮明にした時代で、革新側も五全協への方針転換の狭間の時期を迎えており、騒然とした雰囲気であった。その時、赤旗をうち振る民衆の絵をカバーにした、先生の『フランス革命史』を手にした時の感激は忘れられない。

当時はわが国に対する外国の植民地支配に対抗し、真の国際主義に基づく「民族」のあり方の問題が、学問——時に歴史学、国文学、社会学——の領域で盛んにとりあげられていた。本田ゼミでも「民族問題」がテーマとなり、同時に本田先生訳のジョルジュ・コニヨ『民族問題』が出版された。

それから三十数年。法学部出身の友人の話では、あの時期「民族問題」にこだわったことは、結果として特殊問題に重点を置きすぎたことになり、歴史発展の普遍性に着目して問題を解決す

るという方向の学問的追求を、一時的にせよ遅滞させたという批判があるということで、今昔の感が否めない。しかし、あの時代では「民族問題」は避けて通れないものであった。

本田先生が名古屋に引越してこられた時、先輩、同期の方々とお手伝いに伺った折、先生はベルグソンの訳書を下さった。今この原稿を書き始めて、その貴重な本を探したのだが、どうしても見つけ出せない。申し訳ない話だし、それほどにも不肖の学生というわけである。私などはもとより、一代の碩学であった先生の教え子というよりは、単に先生のファンであったに過ぎないようだ。「〃私の〃本田先生」と題した所以である。ファンは鑽仰の対象を敬慕はし得ても、自らは創造しない。しかし、人生も一巡しようという今、ファンになれただけでも至福のことであつたと、しみじみ感じているのである。

(昭和三十年卒)

(出典…『名古屋大学社会学研究室四十年小史』一九九〇年)

『社会学研究室月報』のこと

中田實

新制四回生の私たちが「四期生」として、当時名古屋城内にあった文学部の社会学研究室（ちなみに教養部はまだ滝子の、現在の名古屋市大人文社会学部のところにあった）に仮進学したのは一九五三年十月のことであった。「四期生」とは、教養部二年後期の学生のことである。

その一カ月後の十一月五日付で、社会学研究室的『研究室月報一』が創刊された。B5判八頁の孔版刷の小冊子は、巻頭に高橋助手による「発刊にあたって」、次いで本田教授による社会学の性格を述べた論考「そのもとに帰るべし」（「もと」とは、実践と良識とである）があり、以下、農業問題、社会思想史、文学、マス・コミの各研究会のうごき、四年生の「卒業論文の構想」、「大学院生・卒業生の研究テーマ」、「卒業生の生活と意見」、「研究室ニュース」等で構成されている。「研究室ニュース」には、本田教授の学部長当選、非常勤で来講された福武直・東大助教授（当時）を囲む座談会、他研究室の学生も参加した「民族問題」演習等についての、熱気が伝わる報告がある。

第二号は五四年四月（十頁）、第三号は五四年十二月（十六頁）、第四号は五五年三月（九頁）と、『月報』はオーバーだが、だいたい年二号のペースで六四年十一月の通巻二十二号（この号は三十八頁に及ぶ）まで刊行が続けられた。第七号から、タイプ印刷になっている。これらには、

学生の求めに応じて先生方も毎号執筆の労をとられている。六五年以後に『研究室ニュース』が出されたようであるが、詳細は不明である。

『月報』の刊行には二つの背景があったと、第一号に述べられている。一つは名古屋社会学会設立への準備であり、もう一つは、卒業生と在校生との「断層」を埋めることであった。その媒体としての『研究室月報』はなくなったが、前者は学会には至らなかつたとはいえ一九八〇年より研究室から立派な『社会学論集』が、後者は一九七八年より同窓会から『同窓会会報』が、それぞれ年一号、刊行されて現在に至っている。この点でも、研究室の問題意識が伝統となつて今に生き続けていることを感じさせる。

(昭和三十一年卒)

(出典…『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

研究室の思い出

倉知彦名

私が研究室にいた頃は、ちょうど六〇年安保闘争の最中だった。当時、文学部はまだ名古屋城内（現在大相撲の行われる県体育館あたり）にあり、しかも木造の旧兵舎であった。

教養部から自治会活動にのめり込み、学部へ来てからもデモにオルグに走りまわっていたので、あんまり真面目に授業に出た記憶がない。兵舎の一階に自治会室があり、丁度その上が社会学研究室であったが、一階にはいても二階にはあんまり行かない。二階に行くときはデモの勧誘が多いと言うわけで、教室の連中からは白い目で見られていたことだろう。阿閉教授からジンメルの論文の一部を訳すように言われていたが、私だけがいつまでたっても未提出で怒られたが、実は当時はそれくらいではなかった。

わたしが文学部の委員長として留守を守っていたが、哲学の三島君や高木君が県学連のトップとして活躍していた。現在この二人とも、今池と錦で居酒屋のオヤジをしている。私は商社を経営して小さな学習塾をやっている。

当時ソ連も中共も日の出の勢いで、どんどん原爆実験をやっていた。それに対して日共系の学生は、米国の原爆はきたない、共産圏の原爆はきれいだと言っていた。原爆にきれいなものもきたないもあるもんかバカモン！というのが私の立場だった。

赤い帝国主義も白い帝国主義も結局は亡びるだろうと信じていたが、ソ連が崩壊した時は正直驚いた。こんなに早く来るとはと。

残っている中共や米国の帝国主義にも未来はないだろう。二十一世紀はこれらの崩壊の歴史になると思う。話によると、現在文学部には学生自治会すらないという。学生が過度に政治的になる必要はないが、社会、政治に全くアパシーであるとはどういうことなのか。いささか心配である。

(昭和三十七年卒)

(出典：『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

なつかしき社会学研究室をふりかえって

前田孝敏

卒業してはや二十五年、記憶もおぼつかなくなってきたが、なつかしき学生時代を順にふりかえってみたい。私たちの場合は一言でいえば「移行期」の学生時代といえよう。入学したのは一九六一年だから「安保闘争」のあと、余韻のただよう大学生活だった。最初の教養部での生活は今になつかしき滝子の校舎で始まった。その時の正門（旧制の八高）は、現在は明治村にある。やがて東山の教養部へ移った。建物だけは新しいが、雨が降ると周りは泥んこ道、あたりに喫茶店も見あたらないという殺風景なものだった。四期生（教養部二年後期）の頃かと思うが（あるいはそれ以前か）、名古屋城にあった文学部の校舎に行った覚えがある。白っぽい古びた木造の階段をギシギシ音をたてて上がっていった印象が残っているが、これもまた今は保存されて明治村にある。

さて、私と社会学との出会いは教養時代の平山教授の「社会学概論」であった。ウルフ・チャイルドの話（社会生活なくして人間の形成はない）などは鮮明なものとして残っているが、以後、人間と社会の關係に興味をひかれ、社会学専攻への契機ともなった。

社会学研究室では、教授の阿閉先生の大学者然とした風貌と豊富な学識にまずは圧倒された。ジンメルの演習で苦勞しつつレポートした頃がなつかしく思いだされる。

ついで助教授・田中先生の、淡々とした語り口ながら鋭い問題意識に裏づけられた講義内容にもひきつけられた。

「労働社会学」に初めて接した時の新鮮な驚き、ここで触発された思いがマルクスの著作へと関心を広げていった。社会体制とその変革、そこでの社会意識の形成が私の主要なテーマとなった。

助手の安藤先生には、研究室生活に慣れぬ私たちに適切な助言をいただいた。さらにつけ加えれば、日間賀島など二回の研究室旅行は先生と学生が一緒に興じあえる楽しいものだった。

これらの大学生活の全体が卒業後の私の生活の基盤を形づくった。社会学研究室は今も社会科学教師としての源泉なのである。

(昭和四十年卒)

(出典…『名古屋大学社会学研究室四十年小史』一九九〇年)

安保の狭間

青山隆英

私が社会学研究室に進学したのは、戦後二十年を経た一九六五年であり、「六十年安保」と「七十年安保」の中間世代に属します。原潜寄港阻止、日韓条約反対などの学生運動はありましたが、名大祭への参加やクラス（研究室）活動の充実を地道に取り組んでいた学友が私の学年には多かったです。

さて、当時の社会学研究室は、阿閉教授、田中助教、安藤助手という構成でしたが、間もなく安藤先生が転出され、後任には東京から佐野先生を迎えることになりました。先生は独身で気も若く、また世代的にも比較的近かったため、私たちと一緒に他学科の女性群についてさまざまな論評をしたり、思いが募るばかりで一步を踏み出せない学友にハッパをかけたたり、あるいは学生運動について卒直に語りあうなどされ、大変親しい関係が研究室内に築かれました。こうした中で、田中先生という大きな存在があり、たった二年間の研究室時代が私に大きなものを残してくれました。

田中先生と言うと、あの風貌とともに、愛車スーパーカブと剣菱（酒）がまず思い出されます。今池の金福で、「自動車よりもスーパーカブのほうが直接大自然と接することができ素晴らしい」「頭をかくクセは薄くなった毛根に刺激を与えるためである」等々がよく話題になりました。講

義そのものは冗談などなく、先生のレベルでサン・シモンやフリードマンを語られ、決して「おもしろい講義」でなく「大学の講義」という感じでした。またロシア語講読の個人指導を松田昇君などと一緒に行っていたとき、とりわけ彼は強い影響を受けたようです。阿閉先生は、ドイツへ長期の視察旅行に行かれ、帰国後の講読（ジンメル）の中で、みやげ話をたっぷりしていただきました。

以上のような研究室生活で得たものが、今なお私の根底にどっかりすわっています。

（昭和四十二年卒）

（出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年）

人は恵まれた環境にいるとき、得てしてそのことを自覚できないものらしい。

阿閉先生、田中先生という第一級の学者のそばにいながら、その学問を吸収できず、惜しいことをしたと、いまになって思う。

田中先生とは自宅が近かったこともあって、私は先生宅に何度かお邪魔したことがある。試験前に泥縄で個人学習をお願いした覚えがある。日ごろ不勉強だったにもかかわらず、じつに親切に対応していただいた。

千種区の公務員住宅の先生宅は、狭い和室の四方に棚をつつて、本がぎっしり並べられていた。寢室兼書斎のようなその和室で夜、お話をうかがった。

何を聞いたかはほとんど忘れてしまった。しかし、その高潔な人格は私が先生から学んだ最大のものだった。確か、研究室の合宿にはバイクで遠くまでやってこられたはずだ。そこに先生の人柄がにじみ出ている。いつか先生とじっくりお話す機会を持ちたいと願いつつ、ついにその機会を逸してしまったことは残念でならない。

研究室では、勉強はそっちのけで、いつもわいわいがやがやいろんな話に熱中していたような気がする。それだけ自由な雰囲気になっていたのだろう。

政治や経済、社会の出来事のほか、将来の夢を語り合った。それは空想に近いことがあったかもしれない。だが、世の中、現実論ばかりがはびこる中で、ああした夢を語り合うときがあったのもいいのではないか。

研究室の自由は、私にとっては文学部の自由と同義語だった。小さな学部の中、ほとんどの学生は顔見知りだった。研究室の壁を越えて、友人たちと一杯のコーヒーを飲みながら長時間、話に夢中になった日々のことが忘れられない。

大学を卒業後、文学部も研究室も訪れる機会がほとんどなかったが、いまはどんな雰囲気なのだろうか。

大学改革が言われている。改革されなければならないことは多かるう。一方で、役に立つかどうかかわからない研究室のダベリングの空気は大事にしたい。卒業後、新聞社に入って、もつと勉強しておけばよかったと悔やむことは多かったが、いまの自分があるのは、ダベリングゆえだと聞き直つてもいい。いまのもの見方考え方も、夜遅くまで語り合つた中で知らず知らずに身についたのであるう。

社会学研究室は、いつまでも夢や理想を語り合う場であつてほしい。

(昭和四十四年卒)

(出典…『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

七〇年前後

三輪隆裕

社会学研究室へ出入りするようになったのは、昭和四十三年からと記憶しています。

当時の大学は、日韓闘争からベトナム反戦、公害問題、成田闘争と学生の政治関与がエスカレートし、ついに大学解体と自己否定の論理が確立されようとする頃でした。名大も、医学部の教授選任問題から火がつき、文学部では美学研究室の問題に端を発し、医局や講座制の排他的封建的な体質に問題が投げかけられていました。

わが研究室の名誉のために一言すれば、当時の阿閉教授、田中助教授ともに学生の意思を尊重される極めてリベラルな方でした。もともと、講座制はその指導者の人格に左右されすぎるところに大きな欠陥があるのですが……。

特に田中先生は、学生にはずいぶん甘かったようですが、学問と御自分には厳しい方で、教授会での進退や学生の指導に苦慮しておられる様子が垣間見られ、感激したものです。

私は生来の怠け者でしたので、勉強はほとんどしませんでした。それでも、そんな雰囲気の中で自分を確立しようともがいた結果が、今の自分を支えているような気がします。

当時の学生運動は、情況に対する認識と戦略については、マルクス主義の社会学理論を応用していましたが、自己存在の確定の問題については、実存主義の発想が基本でした。すでに教条的な

マルクス主義は死滅しており、マルクス主義による社会変動論と先験的な認識地平の接合の問題が研究されていました。

小生も影響を受けたのですが、何と言っても、自分の人生が、自己存在の不確定と社会矛盾への終わらない挑戦であると自覚できたことが、大きな収穫でした。まあ、わかりやすく言えば、放埒無比の生き方の理屈づけができたということでしょうか。

(昭和四十七年卒)

(出典…『名古屋大学社会学研究室三十年小史』一九八〇年)

四十年前の社会学研究室の思い出

大矢裕

このたびは、社会学研究室開講七十周年、誠におめでとうございます。卒業して四十年以上が経過して記憶が定かではありませんが、この紙面をお借りして当時の研究室の思い出を残しておきたいと思います。

私は、昭和五十年四月に教養部から学部に進学して当研究室に入りました。エーリツヒ・フロムの『自由からの逃走』を読んだのがきっかけです。教授陣は残念ながら、ジンメルの研究で著名だった阿閉吉男教授一人だけでした。研究室や文学部の講義だけでは単位取得が困難で、隣の教育学部や経済学部に出かけて関連の講義を聴講したり、夏休み等に開講された集中講義で単位を取得していました。専門の講義が少なかったのを補うためか、書籍購入費は比較的潤沢のようでした。また、当時としてはまだ珍しく貴重だった電子コピー機も入りました。ただ印字の性能が今一つで、インクが剥げて手が黒くなることもありました。

阿閉教授は定年間近になられて、週二日ほど東京から新幹線通勤されていました。授業のないときは、他の研究室生と一階の隅の廊下で卓球をしたり、天気の良い日には、グリーンベルト（現在は建物が建っています）で他の研究室の仲間を誘ってソフトボールをしたりで、おかげさまで体

を鍛えることができました。そのほか、夏休みに軽井沢（御代田）で合宿したこと、その足で上高地にも観光に行ったことを覚えています。

卒業後の進路ですが、当時はオイルショック後の不景気で就職難の時代でした。教職の採用はどの教科も少なく、私を含めて公務員（名古屋市職員・社会職、家裁調査官補等）になった人が多かったと思います。ちなみに、阿閉教授は、当時名古屋市職員採用試験（社会職）の試験官をされており、公務員試験についていろいろアドバイスをいただきました。

以上、取り留めなく青春の思い出を書かせていただきました。お世話になった研究室仲間に感謝です。

（昭和五十二年卒）

研究室の谷間の時代

谷真一郎

われわれ新制二十六期生の二年間の学部生活は、その中間に阿閉先生の御退官をはさみ、われわれの卒業と同時に北川先生が赴任して来られるという、まさに過渡期であった。

あれは確か三年次の冬休み明け早々のことだったと思う。学部生全員に招集がかかって研究室へ集まってみると、見知らぬ顔の哲学科の教授（あるいは学部長だったか）が冷酷にもわれわれに申し渡したことは、阿閉教授の後任は来年度は未定、もともと空席だった助教教授も空席のまま、大阪大学教授の田中先生に兼任教授としてさしあたり来ていただく、というわけであった。翌年度の社会学研究室は専任スタッフは助手のみという異常事態となったのである。しかもその助手の板倉先生（現教養部助教）も転出され、院生だった神戸先生に交替した。

こういう状態に突き落とされたわれわれが、しからは自力更生で自主ゼミ等に奮闘する意欲的な学生集団だったかというとは決してそうではなく、週にせいぜい三コマ程度の講義や講読の時以外は研究室はほとんど無人の状態だった。机が寄せられて即席の卓球台に使われていたのも今となっては淋しい思い出である。卒論の時期になっても互いの卒論の内容はほとんど知らず、知ろうともしなかった。卒論審査には本当に久しぶりに全員の顔が揃って、名前は忘れたけれど西洋哲学の教授が形式的に審査して、もちろん全員がパスしたのだった。

われわれは、研究室の体制の不備と、加えて自らの意欲の不足とで、社会学を十分に学ぶことができなかった。卒業後、「大学では何を学ばれましたか」「社会学とはどんな学問ですか」と人に問われた時の気後れと恥かしさとは、われわれ二十六期生に共通のものだと思う。そしてまた、われわれは自らの学問的怠惰の報いとして、同窓の友としての交わりを持つこともできなかった。卒業式の日以来一度も顔を見ていないメンバーが大部分である。

しかし、自ら慰めて言うわけではないが、大学生活は研究室生活に尽きるものではないし、あれこれの事情のおかげでわれわれは自由な時間だけはたっぷりと持っていた。お互い親しく知ることもなかったが、めいめいがその自由な時間を有効に使って、読書やサークルや、その他さまざまな活動で有益な大学生活を送ったのだと信じたい。

(昭和五十三年卒)

(出典…『名古屋大学社会学研究室四十年小史』一九九〇年)

トリス・ゼミのこと

黒田由彦

私は社会学研究室に、学部学生として二年、大学院生として四年、助手として三年、通算九年のあいだ所属した。教養部の最後の半年間も、先輩諸氏にうさんくさげに見られながらも足繁く出入りしていたので、それも含めると九年半ということになる。九年半も社研に関わったのは長い方だと思うが、かといつて一番長いわけではない。私以上に長く社研にいた人間をあと二人は知っている。それはともかく、二十代のほとんどの時間を過ごしたのだから、研究室の想い出は尽きない。

ここでは学部時代の想い出をひとつだけ書く。トリス・ゼミのことである。

私が学部の三年生になったとき、研究室には助手の神戸さんを除いて、専任の教官はいなかった。故・田中清助先生が大阪大学との併任でおられただけである。いきおい時間は豊富にあった。そこで社研によく顔を出す仲間と相談して、自由に討論できる学習会を学生だけで開くことにした。毎回、誰かが一冊の本を推薦し、みんなが同意すれば、全員がそれを読んでくる。そして推薦者が問題提起というかたちで口火を切り、あとは自由に討論するという形式をとった。推薦する本のジャンルは問わない。社会学の専門書でもいいし、小説でもいい。誰でも参加できるし、退会も自由である。題材となった本ではつきり覚えているのは、大江健三郎の『遅れてきた青年』

と大城立裕の『カクテル・パーティー』である。

何を議論したかは、すっかり忘れてしまった。覚えているのは、そのときの熱気だけである。場所は一〇二号室だった。あの部屋は今では移動書架が半分を占めて研究室然としているが、その当時はがらんとした殺風景な部屋だった。夏の暑い日に窓を開け放ってゼミをやっている光景がいまでも目に浮かぶ。それにしても、あのときの熱気はどこからきたのか。めいめいが自分の思いを素直に相手にぶつけることができたからかもしれない。たぶん専門書の輪読ではそうはいかなかっただろう。ただ、残念なことに、この種のゼミの宿命だと思うが、トリス・ゼミは数回開いたあと自然消滅してしまった。あの熱気はそれきりになってしまった。それもあって、トリス・ゼミの想い出はたまらなく懐かしい。

で、なぜ「トリス・ゼミ」という名称だったのかであるが、実は名前の由来については記憶が定かでない。案外、適当につけたような気もする。だれか覚えていないだろうか。

(昭和五十五年卒)

(出典：『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

研究室の思い出

渡辺俊子

私が学部に進んだのは、研究室に北川教授が来られた最初の年だった。社会学研究室は不幸なことに、それまでしばらくのあいだ専任教授が不在だったから、北川先生が来られることになって、研究室もまた新たに活気を帯びることになったようである。私もこのような時期に学部に進み好運だったと思う。

北川先生は、最近の大学生は宿題を出さなければ勉強しないと思っていたのか、よく宿題を出された。「〇〇について来週までに三十枚」「〇〇について調べてこい」といった具合に。いま思うとよくあれだけ書けたな思う。『リヴァイアサン』『職業としての学問』『共産党宣言』など、社会学を学ぶうえで古典となる書物を十冊講義で取り上げたのち、各自が書評を書くというものもあった。

十冊の書評が出来上がったあと、表紙に『〇〇書評集』と体裁をつけてリボンで綴じ、ひとり悦に入っていた。そのノートは今もわが家のどこかに眠っているのだろうか。

愛知県下の社会団体の調査を各自が割り当て調査してくるというのもあった。調べてみるといろいろな発見があつて、おもしろいものだった。尾張旭市の調査でも学部生は一調査員として雑用係を仰せつかった。調査結果の分析軸を立てるのにどこかのお寺で合宿したが、そのお寺の寒

かったこと！ 私は、心の中で思うことがあっても自信がないため何も発言できず傍観者をきわめていたが、調査は初めての体験だけにどう流れて進むのか目をみはるものがあった。調査、合宿、コンパとなると、院生、研究生、学部生全員が呼び集められ、学生が研究室に集まるのはここ数年では珍しいと言われ、活気があった。

とにかくいつ研究室に行っても誰かいて、言いたいことを言い、やりたいことをやっていた。後先を考えずに言いたいことが言えたのは、あの頃ではなかったか。卒業後研究室にはほとんどご無沙汰している。それにしても、今度研究室を訪ねる時には、飄々とした佐野先生にお目にかかれないのは本当に淋しいことだなと思う。

(昭和五十六年卒)

(出典…『名古屋大学社会学研究室四十年小史』一九九〇年)

共通一次世代の社研

栗田篤

僕たちは、あの悪名高き「新人類」の走りであり、「共通一次」一期生である。もちろん、当時の自分たちにそんな意識はなかったが周囲の見る目は少し違っていたようだ。

大体、教養部から学部へ進む時、僕たちは男七人、女七人の十四人という大所帯。もともと文学部は女性が多いのだから、男女比が同じでも不思議はないはずだが、どうも社研はそうではなかったようで、「社研の雰囲気が変わった」「華やかになった」と言われたりした（先輩諸嬢も才色兼備の素敵な方ばかりでした。僕たちは、ただ「派手」だったのです）。

確かに、僕らが入学した頃から社研の、いや名大全体の雰囲気が変わってきたような気がする。かつて「本山原人」と崇められた名大生はどんどん洗練され、クルマがなければデートできない僕たちはキャンパスにクルマを溢れさせて駐車規制を招いた。アルバイトと合コンに明け暮れて、ジメルとデュルケームの区別もつかず（実話）、山村調査に行けば研究室内恋愛は進めど調査は進まず（実話）、講義には出ないくせにクイズ番組には出る（実話。しかも二人）というやりたい放題。北川先生がウンザリして、「早く出ていけ」と言ったとか（噂）。

だが、しかし。この僕たちの遊び上手さこそ、現代の豊かな大衆が満ちあふれている日本社会を明るく楽しく生きるカギなのである（自己弁護）。先日、同窓会報の原稿のため同期生の近況を

調べたら、仕事も生活もエンジョイしている連中がじつに多い。特に転職組が目立つのが特色で、司法書士、行政書士、日本語教師など多士済々。この身のカルさこそ、「新人類」の面目躍如である。だいたい、社研を選んだ理由が「何でも社会学にこじつけられそうに楽しそう」という、よく言えば学際的かつ自由な雰囲気が入ってという連中だから（「語学が苦手」という本音が裏にある）、ひとつの道一筋にとというタイプより興味のあるほうへフワフワというタイプのほうが多いのだろう。

卒業後、僕は就職の相談で、よく社研の後輩に会うが、たいてい皆、僕たちと同じような大学生活を送っているようだ。北川先生の嘆息が聞こえてきそうだが、いやいや、社研の自由な雰囲気にあつてこそ、僕たちは実践的 sociology の場で頑張っているのですよ、先生。

社研とあの大学生活に感謝、感謝。

（昭和五十八年卒）

（出典：『名古屋大学社会学研究室四十年小史』一九九〇年）

研究室での十四年

魯富子

私は、一九八七年に韓国から来日して、一九九七年に博士学位の取得、一九九八年から助手に赴任、今年で研究室在籍十四年目を迎えるいわば最長老の一人である。

外国で初めての一人暮らしを始めた私は、最初の一カ月くらいは夜枕が濡れるほど泣きながら寝た覚えがある。当初のわたくしは研究室のなかに入るのが怖くて、いつも勇気を振り出して入ったが、現在は助手として研究室の古株になっているのである。自分のことながら、長生きするものだと思ってしまう。

当時の社会学研究室には、たしか十人を超える留学生がいたと思う。今は宇都宮大学の助教授であるタイ出身のマリーさんをはじめ、中国、アメリカ、韓国など多様な国籍の留学生がいた。当初の留学生は大学院進学を目標とする研究生が多くて、お互いに日本での勉強や帰国のことなどを話し合ったことをはつきりと覚えていいる。当時のわたくしは、日本人よりも留学生どうしの付き合いが多かった気がする。おかげさまで、世の中にはいろんな価値観があるんだなと身をもって実感することができた。いま、みんなはどこで何をしているのだろうか。

私にとって、社会学研究室での最初の二年間は楽しかったが、その後は修士論文や博士論文の連続でいつも論文のことを抱えながら過ごしたと思う。来日当初から指導して下さった松本先生

はふだん優しいのですが、論文の話になると涙が出るほど厳しかった。松本先生が求める水準まで論文をもっていくのが大変で、いつも書き直しを余儀なくされた。最も印象的なことは、松本先生に博士論文の結論部分を先に考えて論文にするように指導されたことである。実際、私が博士論文の結論部分を考え出し、論文の形にするまでには一年以上の時間がかかったのですが、不思議にもその後自分のやるべきことが一気にすつとわかってきたのである。その時点から、博士論文を仕上げるまでは、気持ち的には非常に楽であった。私のことを長い目で見て下さった松本先生のおかげで、社会学をやめずに続けることができたと思う。助手になった今でも、松本先生のことを思い出して参考にしながら、学生に接したりする。

自分にとつての社会学研究室は切磋琢磨していく場であつたと思う。これからも、社会学研究室が多様な人々を受け入れて、頑張っていける場であり続けてほしい。

(元助手)

(出典…『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

社会調査の記憶をたどって

渡辺浩子

社会学研究室で過ごした日々を振り返ると、真つ先に可児市、多治見市で行なった「まちづく
り調査」が思い出されます。一泊二日の調査中は、先生、院生、学生が縦割りで班分けされ各々
が調査票配布やヒアリングに明け暮れます。かの地では同姓世帯が何軒も隣接していることも多
いため、訪ねるべきお宅がわからないことはたびたび。ここはわかりやすいだろうと日没後に出
かけた集落では道が見つからず、仕方なく民家の明かりを目標に田んぼを横切つて調査票を届け
たこともありました。ヒアリング先のお宅では昼食やお土産で歓待してくださることもしばしば。
緊張感はほぐれましたが、知識、経験の少なさから差し障りのないインタビューしかできず「も
ういいんですか」と言われてしまうこともあり、話す気満々の方々を前に使命感だけが空回りし
ていました。インタビューもそこそこにフランス料理店に連れて行つていただいたこともありま
した。延々と武勇伝をうかがつて帰つてきた記憶がありますが、なんともバブル時代らしいエピ
ソードのひとつでしょうか。

学生にとっては失敗や苦勞の多い調査でしたが、自治体レベルの大掛かりな調査の一端に加え
ていただき地域社会を内外から眺められたことは得がたい経験でした。調査を含め、社会学の学
びから得た「事実を事実として捉える」「クリティカルな視点を持つて物事を眺める」といった視

座は三十年の時間をかけて自分のなかにしつかり根づいたようで、ともすれば感情や状況に流されそうになる日々を少なからず支えてくれている気がします。平成元年卒業の私たちも過去を懐かしむ年齢になり、ここ数年、何らかのご縁で恩師、旧友と過ごす時間が増えていることを嬉しく思っております。改めて絆を感じるとともに社会学研究室がいつまでも古巣としてありますよう、ますますのご発展をお祈りして七十周年のお祝いとさせていただきます。

（平成元年卒、平成九年修士修了）

十二年六カ月前の夏、いまの私自身と同年の松本先生が、社会学専攻希望の学生たちの集まる第四講義室に入ってこられ、「希望者全員を取っていた昨年までの前例から言って、悪いようにはしないから」と言われたのを昨日のことに思い出す。

当時、社会学研究室は人気急上昇中で、後の学年からは希望者が多すぎて選抜試験が導入されることになる。私たちの学年は、先生方の思惑以上に専攻希望生の数が急増した年だった。ふたを開けてみると、調査二回とも社会学志望の学生を選んだらしく、春の第一回調査時に他専攻に希望を出していた私は、見事落とされていた。私は、説明会での松本先生の言葉に安心しきっていたので、今さら人気があった他専攻に移れるはずもなく、途方に暮れてしまった。

その後、どういう経緯があったのかはあまりよく覚えていない。だが、次の記憶として鮮明に残っているのは、北川先生、貝沼先生、松本先生がお揃いのスタッフ会議の場に入り込んで、直談判している場面である。私のやりたいことはジェンダーの問題で（当時は「フェミニズム」と言っていたように思う）、四月の時点では私自身よくわかっていなかったのだが、それは社会学でしかできないのだ、どうか私を社会学研究室に入れて下さい、と訴えた。今から考えると、よくそんな度胸があったものだと思う。

頼み込んで社会学研究室に入れていただいたわりには、学部時代は、恐ろしく不真面目な学生だった。自分の読みたい本だけ読んで、勝手気ままに過ごしていた（今だから言えるが、提出期限に遅れて、松本先生の留学先のシカゴにまでレポートを送った不真面目学生のうちの一人である）。その後、就職浪人中にもっと勉強したいと思うようになり、学部時代のツケを払うことになる。

この春、長かった十四年間の名古屋大学での学生生活を終え、北陸に行くことになった。今となつては「社会学なしの生活」など考えられないが、もしあの時、直談判に行かなかつたら、と考えるととても不思議な気がする。

（平成三年卒）

（出典…『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年）

研究室の思い出

安藤匡宏

私たちにとって研究室の共通の思い出といえば、関市調査と三年次の社会学演習ではないだろうか。

私たちが教養部から社会学専攻へと歩み始めた頃、研究室には、貝沼洵先生、松本康先生、そして助手に河村則行先生がいらっしやった。貝沼先生は、教養部改革に伴い、翌年には情報文化学部との兼任となられたが、関市調査にせよ三年次の社会学演習にせよ、私たちがその指導の多くを直接賜ったのは貝沼先生からであったため、その意味では、私たちの代は貝沼先生の影響を非常に色濃く受けたということができるだろう。

関市調査は、研究室が長年積み重ねてきた地方都市調査の結びとなるものであり、私たちも足かけ二年にわたり参加することになった。今にして思えば、右も左もわからない状態で、先生や院生の方々の言われるままに右往左往するさまは、鵜飼いの鵜のようであったとも言えるが、同時に調査を通して何か非常に貴重な社会勉強を経験したということも大きな事実であったと思える。その後、この一連の調査をまとめた北川隆吉・貝沼洵編『地方都市の再生』（アカデミア出版会）という本が出版され、その中には、私たちの名前も調査参加者としてしっかりと記されており、とてもよい記念となっている。

一方、三年次の社会学演習に関して言えば、私たちは非常に苦勞したことを覚えてゐる。貝沼先生の演習の進め方は、ほぼ二週で一冊というペースで複数の文献をこなしていくというものであった。私たちにとつてはそれだけでも大変であつたのに、さらに大変だつたのは、同じ文献を二人の間が同時に報告しあうということであつた。そこには、同じ文献でも読み手が異なることによつて異なつた姿が描かれることになるということを私たちに教えるとともに、その違いを通じてより立体的な文献理解を促そうという貝沼先生なりのねらいがあつたと言えるかもしれないが、通常よりも倍のペースで発表がまわつてくるこのやり方は、私たちをかなり疲労させることになつたの言うまでもない。加えて、与えられた文献も難解なものばかりであつた。特に、最初の文献であつたミルズの『社会的想像力』は、生まれて初めて社会学についての専門的な教育を受ける私たちにとつてはあまりにも高度な内容であり、「誇大理論」「準拠点」などといった意味不明（少なくとも当時は）な専門用語も私たちを非常に閉口させた。全員が全員、即座に『社会学小事典』を購入しにいったことは、当時を懐かしむいい笑い話であると言えるだろう。そうした社会学演習の授業であつたが、演習全体を通したテーマであつた「ミクロ・マクロ問題」についての貝沼先生の「語り」は、確かに私たちにも伝わるものがあつたのであり、現代社会を見つめる「眼差し」としての「社会学的想像力」は、私たちの中にも大きく残されることになつたのである。

社会学研究室を卒業して、はや五年の月日が経つてゐる。五年と云えば、私たちそれぞれの人

生を大きく変えるのに十分な時間であるかもしれない。もちろん中には、私のようにあいも変わらずふらふらしている者もいるが、それぞれがそれぞれなりにがんばっていることは折に触れて伝わってくる。私たちにこれからどんな人生が待っているかはわからないが、ひとりの人間として「今」という時間を生きていくにあたって、社会学研究室で学んだ多くのことは、これからはきつと役に立っていくだろう。

(平成七年卒)

(出典：『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

社研室の思い出

林明鮮

私は社研室に十年間もいたので思い出が山ほどだが、紙面の都合で割愛し三つだけ書く。

もともと私は大学の日本語教師だったが、社会学に興味をもつ契機は北京外国語大学での田中先生の講義。当時、中国では離婚率が急上昇し、従来とは打って変わって離婚がごく身近な問題になった。なぜ離婚が増えるのか。この単純な疑問が、私を社会学へと導いた。

一九九三年、私は中国教育部の国費で貝沼先生の下で社会学を勉強する機会を得た。講義は面白く難しく、興味は増すばかり。それで、修士の試験を受ける決意をした。その時、故山崎さんが私のチューターとして、ギデンズの『社会学』を勉強することと週一回の勉強会を提案。彼は難問には懇切丁寧かつわかりやすく解説してくれた。彼の熱心な教えがなかったら、大学院には入れなかっただろう。

社研の先生方は、普段は優しいが学問には非常に厳しかった。「文革」の産児である私は、高校卒業まで英語には触れたこともない。「文革」が終わり、大学には受かったものの、知識は薄っぺら。だが、社会学のゼミでは、主に英語で文献を読み、それを発表する。英語のできない私にとつてそれは途轍もなくきつかった。発表の度、徹夜で準備したが結果はいつも超低レベル。先輩達は英訳をよく助けてくれた。それを知った松本先生は、「林さんを助けられないで、自分でやらせて」

と言ったそうだ。当時は少し理解できなかった。それが帰国後一人の研究者としてやっているうちにやっと先生の真の優しさに気づいた。あの時こつこつと自分でやらなかったら、今日の自分はないはずだと。

また、博論の結論が上手く書けず困っていた。田中先生は研究会を設け、毎回私を発表させた。おかげでようやく何とか結論が書けた。要するに、名大ではいかに自分で考え、自分で学問を研究するのが大事かを学んだ。ここで特筆すべきことは、田渕先生と丹辺にも大変お世話になったこと。田渕先生は私の博論の最終チェックをしてくださった方だが、当時先生の中では一番若く、私よりもうんと年下だが、先生の研究室に入る時が一番緊張していたのを覚えている。丹辺先生は、指導教官ではないにもかかわらず雑誌論文の発表の際の内容チェックや相談に快く乗ってくださったことが大変印象に残っている。

この場を借りて当時お世話になったすべての方に感謝の意を表したい。

(平成八年修士修了、平成十五年博士号取得)

研究室の思い出

伊藤僚啓

僕は社会学の研究室を卒業してまだ一年と半年とほんの少しという青二才、研究室に在籍していたのは、まさについ最近のことであります。いまだに自他ともに認める青二才の僕ですから、一年と半年とほんの少しの社会人経験を差し引いた研究時代というのは、それに輪をかけた鬱陶しい青二才ぶりです。先生方や先輩方にはずいぶんご迷惑をおかけしたなあ、と今さらながら反省しております。

その当時の僕はいつぱしの「センスのいい大学生」を気取って、アンダーグラウンドな映画や音楽に夢中で、さらに毎日のサイクルがアルバイトを中心にまわっていたので、正直な話、勉強に割く時間は微々たるものでした。要するに「今どきの学生」ですね。

しかし僕らが三年生の時に赴任してこられた折原先生は、そんな僕らに喝を入れるかのごとく、質量ともに恐ろしく過酷なノルマ（学生なのに勉強はノルマでも何でもないんですけど）を涼しい顔で課されて、二日酔いの頭を抱えながら半ペソをかいてレポートを仕上げたことを覚えています。日本が世界に誇るマックス・ウェーバー研究の権威である折原先生の頭の中には、たくさんの知識と理想社会に対する飽くなき追究心でいつぱいでしたが、僕の頭の中はと言えば女の子のこことしかありませんでした。いま思えばそれがとても申し訳なくて仕方ありません。研究室に

行けば生きた見本とたくさん蔵書があったと言うのに。しかし、二年生まではグータラ学生以外の何者でもなかったのに、折原先生によって学問に開眼した友人がいました。彼には頭が下がります。

当時を振り返って最も印象に残っていることと言えば、何と言っても卒論の執筆です。映画や音楽などのサブカルチャーにどっぷり浸かり、そっち方面の知識と愛情にしか取柄のない僕なので、まともな社会的テーマでは他の学生たちには太刀打ちできない、ならば「好きこそもの上手なれ」だとばかりに選んだテーマが、「流行歌の意味変容」でした。ふだんの不真面目の罪滅ぼしの意味を込めて僕の学生生活のすべてをつぎ込んだつもりです。出来の善し悪しはどうであれ、自分の人生の「集大成第一弾」です。A4のワープロ用紙百枚、原稿用紙に直して三百枚から四百枚という超大作です。どうやら新記録らしいです。「これは論文ではなくて大河ドラマだ」というお言葉をいただきましたが、「でも十年たつても忘れられない」と言われた時は、皮肉の意味もあつたのでしょうか、とともうれしかったです。こんなチンピラ学生でも認めてもらえたんだという思いが、今でも自信になっております。

今の僕は学生時代の趣味の延長で、音楽や映画などのサブカルチャーを提供する仕事をしています。それこそ「好きこそもの上手なれ」で始めた仕事ですが、好きなかだけでは飯は食えません。客観的に見て大衆に支持されるモノを分析できなければ、音楽や映画を商売のネタにすることはできません。そういうわけで、学生時代にはほとんど読まなかった社会学の本を、いまさら

引つ張り出してきては必死に格闘中であります。先生方、こんな僕で本当にごめんなさい。

しかし松本先生の都市社会学を少しかじった経験を生かして、「盛り場はラーメン屋を中心に発展する」説を実証すべく、日夜フィールドワークに勤しんでおります。こんなところで許して下さい。

(平成十年卒)

(出典：『名古屋大学社会学研究室五十年小史』二〇〇〇年)

研究室に関する数少ない記憶

松谷満

今でこそ偉そうに社会学を教えています。学部頃は授業を休みがちでバイトばかりしてました。ゼミを休みすぎだと丹辺先生や山崎先生に怒られた記憶もあります。当時の私にとって、先生方の授業は難しすぎました。あるいは、何が面白いのかよくわかりませんでした。それは先生方のせいではなく、私の不勉強と学習意欲の欠如が原因です。もったいないことをしたものです。

ゆえに、研究室の記憶はおぼろげですが、九六年春、周囲が少しざわついたのを思い出します。「あの」折原先生が着任されたのです。もちろん、私が折原浩というビッグネームを知っていたわけではなく、同期の超優秀な都村くん（現神戸学院大教員）などからの伝聞です。とにかく超有名らしいのです。

しかし超有名先生の授業もまた難しく、コピペすれすれのレポートをほめられて逆に恥ずかしかった記憶はありません（折原先生のことですから誰の本のどの部分を抜き書きしたのか丸わかりだったに違いありません）。思い出されるのは授業よりむしろ、合宿の微笑ましいエピソードです。

社会学研究室は中津川で毎年合宿をしていました。四年生の卒論構想のほか、三年生向けの企画なども用意されていました。その企画として、当時NHKで放送されていた『クイズ日本人の質問』に模した社会学クイズコーナーが実施されたのです。要は社会学にかんする質問に、三人の博士（折原先生⇨高橋秀樹役、松本先生⇨大桃美代子役、丹辺先生⇨矢崎滋／桂文珍役）がもつともらしい解答を示し、誰が本当のことを言っているのか当てるという企画でした（元ネタをご存じない方はウィキペディア参照のこと）。そんなしようもない企画ですが、あの超有名な折原先生がノリノリで高橋秀樹役を全うされていたことがなぜか今なお薄れない記憶として残っているのです。優勝賞品はサイン入り『デュルケームとウェーバー』というオチまで、意外と「すべらない話」として業界内で活用させていただいております。

（平成十年卒）

呼び名の効用

山口博史

文学部に三年次編入して社会学研究室に所属することになり、少し年齢が下の同級生ができました。何人かの同級生は私のことを山兄（ヤマニイ）さんと気軽に呼んでくれ、顔を立ててくれていました。この呼び名の起こりは不明です。同級生からみると少し年齢が上だったので、呼び捨ては気が引けたのでしょうか。なお、私自身は呼び捨てでいっこうにかまわないと思っていました。けれども、これはこれで新しい場に受け入れられた感じがして、どことなく嬉しかったことを記憶しています。

この呼び方は急速かつ不思議な広がりを見せました。同級生や下級生にとどまらず、大学院生や新しく来られた西原先生まで「山兄」と呼んでくださるようになりました。学生同士の口コミでしようか、留学生もしばらくして同じように呼び始めてくれました。また電子メールのあて名などにもこの呼び名は広がりました。最初は口頭で言われるだけであつたものが、書き言葉に進出することになり、「山兄」、「ヤマニイ」、「ヤマニー」、「やまにい」、「Yamani」など、表記が多様化しました。文脈や文体から判断するに、それぞれ少しずつニュアンスは異なるようです。なお、近年は「山ニイ」などのハイブリッド版も出現しています。世界にはさまざまな文字があり、「山兄」を別の文字に置き換えるとどうなるだろうか、と考えたりもします。新しく字をおぼえ

るのは楽しいことです。

もし今、私が与える印象にどこか「兄」らしい感じがあるとしたら、それはこの名を与え、その名で呼び続けた研究室の人たちから、何かを受け取ったものかもしれない。

(平成十三年卒、平成十六年修士修了、平成二十三年博士号取得)

かつて社会学研究室に「不老会」という院生中心の研究会があった。結成は二〇〇四年三月、同じ西原ゼミの先輩だった佐藤直樹さんと私、そして檜山和也さん（貝沼ゼミ）、辻村大生さん（田中ゼミ）の四人で立ち上げた。月一回のペースを目標に、当初は各自の研究テーマに沿った英語論文の講読発表から始め、ある程度共通のテーマが見つかった段階で一冊の本を選んで全員で検討会を開催したり、学会発表または修士・博士論文の構想発表前には発表練習の場としても利用した。開始はいつも午後（でも遅刻者が多かった）、途中おやつ休憩を挟みながら大体三〜四時間議論し、終わったら飲み屋に直行（そこでまた議論）という流れだった。実にゆるやかで、濃密な、充実した時間だった。

昔のファイルを探っていると、当時の不老会の記録が出てきた。そこには会を立ち上げた動機として、「院生たちがゼミの枠組みや《理論—実証》の対立を越えたところで自由に議論できる場を設けたい」という想いが綴られていた。今の社会学研究室には、当時の意味での「理論」研究自体が消えつつあるが、私たち世代の院生はまだ《理論—実証》の対立軸に取り憑かれそれに抗いながら——具体的な先生の顔を思い浮かべつつ——研究を進めていたわけである。懐かしくも戻りたくはない過去である。

不老会会報

第 1 号

2005 年 2 月 26 日

発行：不老会

お問い合わせ：jabe@cncw.ne.jp

不老会の趣旨と経過について

佐藤 真樹 (2004年度事務局長)

本研究会は、2001年3月15日に名古屋大学社会学の大学院生数名の呼びかけで始まったものです。ゼミや学命発表ではおさまらない中堅領域的な研究状況を消化すること、また、プライベートな会談では物足りない研究数々の発表の場を設けること、そうした期待意識のもと「とりあえず、やってみよう!」と呼びかけました。まずは、それぞれの院生が現在讀んでいる論文の要約発表を促がかりに、参加者個々の研究進捗の確、および参加者間の共同研究のための場をもとめこの1年の活動を行ってきました。第1回の参加者で以下のことを決め、スタートをきりました。

名称の決定：不老会（地名より決めました）

原則の決定：3つの原則を決めました

- 一、参加をした場合、必ず1回は報告をする
- 一、毎回の指定文献等は必ず目を通してくる
- 一、毎回4名以上の参加を達成する（努力目標）

参加者のあいだの高連発として、報告書以外への発表は行わずに、参加者の機嫌によってどのようにも変化していくということがめざされ、1年間の活動が行われた。事務局としては、予期外の参加者の意欲的な参加態度がこの会を支える力となっていたように回顧します。

現在では開催数も11回を数え、会の内容も参加者全員での総取り集や修士論文構想発表などへと広がり、このたび1年のまとめを相成りました。現在の参加者は8名となっている。いまま、来年度の共通テーマのDとつ「グローバルセッション」に関する講演会が確行しつつあり、潜在的に結成された参加者調査部門の活動が選択しつつあります。また、今後は他大学大学院生や社会人の参加を予定しています。さしあたり、今年度の成果をみなさまに見ていただき感謝のないご意見を賜れば幸いです。

〈不老会会報第一号（二〇〇五年二月発行）表紙〉

数年前、研究室のニュースレターに「不老会」の活動報告を見つけて、「まだあんのかい!」と驚き、嬉しくなった記憶がある。しかも書いていたのは、私と同じく名大文学部から大学院へと進学した西原ゼミの後輩、王昊凡君だった。今度の記念パーティで若い院生を見つけたら、今も不老会が続いているのか聞いてみたいと思う。

（平成十四年卒、平成十六年修士修了、平成二十二年博士号取得）

社会学との出会いに感謝して

岡村徹也

社会学研究室が創立七十年の節目を迎えましたこと、誠におめでとうございます。私は二〇〇二年に博士課程前期課程に入学し、二〇一〇年に後期課程を単位取得満期退学するまで八年間お世話になりました。研究については、前期課程では貝沼先生に指導を仰ぎ、日本の近代化における新聞社の役割について、新聞社が行うイベント事業に焦点をあて、「メディアとイベント」をキーワードに取り組みました。後期課程では最初の五年間を貝沼先生に引き続きご指導いただき、メディアイベントとしての愛知万博に関する研究に取り組みました。貝沼先生の退官後、後期課程最後の一年は、黒田先生にご指導いただき、「企業の文化支援活動」をキーワードに、トヨタ自動車を対象とした研究に取り組みました。

後期課程最後の一年は、研究内容を大きく変更したことから、苦闘の日々でした。限られた時間で博論をまとめるのは困難でしたが、このとき、幸運にも豊田市において地域社会研究を進めていた丹辺先生のプロジェクトに携わることができました。私は、豊田市とトヨタ自動車（トヨタ社員）との関係を社会貢献活動、トヨタの人材育成・教育プログラムへの注目によって、豊田市の地域社会構造と地域住民の生活・市民活動のあり方に関する研究に取り組みました。この研究は最終的に、丹辺先生との編著『豊田とトヨタ——産業グローバル化先進地域の現在』に結実

しました。

長く研究室に在籍したことで、私の研究領域は大きく広がりました。現在、中日新聞社でイベントづくりの仕事に従事していますが、いくつもの局面で、社会学で学んだ理論や考え方が役に立っています。また、長く研究を続けてきたことで、学会論文はこれまでに四本掲載することができました。こうしてそれなりに成果を上げることができたのはご指導いただきました先生方のお陰です。企業の社会貢献活動への関心は今も続いております。研究に取り組んで十年になりますが、ゆつくり着実に前進しています。自分の人生を豊かにしてくれる社会学との出会いに感謝しています。

（平成十六年修士修了）

社会学講座の思い出

甕佳代子

博士課程前期の頃、時間があれば研究室に入り浸っていました。どの時間にもたいてい誰かがいて、一人きりになることはほとんどありませんでした。自分たちのペースで本を読み、論文を書き、煮詰まると誰かが雑談に付き合うけれど、それすらも効果音のような、適度な距離感が心地よく、自分の研究に没入できる安心できる空間でした。お互いがどんな研究をしているかということは把握しつつも、乞われなければ口を挟まず、気分転換には映画やグルメなど研究には関係ない話で盛り上がり、ラーメン研究会だの焼肉研究会だの思いつきで作っては二、三回ほどですぐ散会してしまうという企画行動力があるのか、見極め能力が高いのかよくわからない面白い仲間がいました。

大きな繭の中に、皆で籠って蛹になるうと蠢いていた時期で、今では立派に孵った連中を見ると、光陰矢の如しという言葉を噛み締めずにはいられません。私は全く異なった種の雛でしたが、そういう者も鷹揚に受け入れてくれた貴重な場所でした。

大学院は本来、研究者を養成する機関ではありますが、私にとっては自分の携わっている仕事の課題・問題解決のヒントを見つけ、全く異なる角度から捉えなおす場所でした。後期は研究室に寄るすらなくなってしまうましたが、それを淋しがる余裕もなく、ただただ両立に苦心してい

たことすら今は懐かしく思われます。苦勞はしましたが、仕事をすればするほど感じる知識不足を補い、消耗していく氣力を充電することができるとは価値ある年月でした。

丹辺先生には長い間、名鶴匠のように懇切丁寧に指導していただき、感謝という言葉では表現しつくせません。ご恩返しではないですが、培った丹辺先生イズムで、次世代の若人を孵していきたいと取り組んでいるところです。

(平成十六年修士修了)

田中ゼミの卒業生、十年目の気づき

菊地桃子

文学部を卒業してから十年経ちましたが、嬉しいことに社会学研究室の恩師、先輩、学友と卒業してからもお会いする機会に恵まれています。最近では、先輩ご一家と弘前市まで田中先生に会いに旅行に出かけたり、学部同期たちと卒業十周年にランチ会を開催したりしております。社会学研究室でもにも過ぎました方々と、今でも会える関係を築けたことにはなによりの財産です。

学部、修士課程を通して田中先生にお世話になりました。在学中の一番の思い出は、学部時代は木曜日の調査実習、修士時代は金曜日のゼミの時間です。両方とも夕方スタートで後ろに他の講義がないため、終了時刻で切り上げられることは（飲み会でもない限り）ありませんでした。当時はその意図に気がつきませんでした。が、ゆっくりじゅくり話を聞き議論できたこれらの講義は、田中先生が作り出してくださった、学生時代しか享受できない貴重な時間でした。

さて、現在は育児休業を頂戴し、ほぼ育児に専念する毎日です。アカデミックな世界とはかけ離れた日常ですが、田中先生のある言葉を思い出します。「勉強すると今まで見えなかったものが見えるようになる」と。

いま私は「子育てすると今まで見えなかったものが見えるようになる」と日々感じています。ベビーカーを押しながらの移動で、今まで軽快に動きまわっていた街が全然バリアフリーではな

いことを知り、出産から仕事復帰後の働き方を考える中で、男女は未だ不平等だということに気づきました。また、散歩しているとこんなにも多くの他人が、わが子へ温かなまなざしを向けてくれることを知り、地域の方々に親しみを感じるようになりました。きっと子育ても勉強のうちです。

こうして振り返ってみると、社会学研究室で学んだ時間が今の私の生活を豊かにしてくれていると思います。これからも素敵な人の集う社会学研究室でありますように。

（平成二十一年卒、平成二十三年修士修了）

私が社会学研究室で得たもの

中根多恵

私が名古屋大学社会学研究室に進学したのは、今からちょうど十年前の二〇〇九年のことです。博士前期課程から後期課程までの学生時代を過ごし、また、学位取得後は博士研究員や助教としてお世話になりました。あの七年間、指導教員の丹辺宣彦先生をはじめ、講座の先生方や皆さまにご指導いただいたおかげで、何も知らなかった私が、研究・教育をするための基礎力を身につけることができました。

社会学をやつていて難しいと感じるのは、見たいと思う対象の見えにくさや、それを科学的に「見える化」することの困難さです。しかし、社会学研究室では、こうした難しさに真正面から取り組むための力を養い、そのプロセスを経験することができました。

たとえば、見えない社会を「見える化」するための方法を体得できたのは、ゼミや社会調査実習でさまざまなフィールドでの社会調査に携わる機会があったからです。問題の発見もフィールドの選定も仮説探求も、社会学研究室ではただひかれたルールをたどるのではなく、そこからはずれた想定外の発見を大切にし、面白がることのできることをできました。とくに私にとって印象深かったのは、やはり社会調査の全過程に携わることのできた豊田市での調査です。質問紙調査の設計やサンプリング作業の手伝い、聞き取り調査などへ同行させていただくなかで、研究の

成否は「丁寧さ」がカギであることも学びました。これは、たったひとつの変数について多くの人とじっくり議論を重ねたり、調査先とのつながりもゆっくり時間をかけて構築していくという「丁寧さ」のことです。

またさらに、ゼミや総合セミナーで「コメントをする／うける力」を習得し、客観的な視点をもつことで、研究どうしのつながりや新しい着眼点を発見できるようになりました。丹辺ゼミでは、学部生も院生も必ず全員がコメントすることを求められましたし、総合セミナーでも同様に積極的な意見交換の場がありました。修士課程のころはコメントすることが苦手でしたが、博士課程ではコメントを「うける力」を習得するほうが意外と難しいことに気づいたりもしました。こうした経験の数々は、今自分自身の研究を進めていくうえで本当に大きな自信と糧になっています。今後もこのような研究環境のある研究室であってほしいと願っています。

（平成二十三年修士修了、平成二十七年博士号取得、元助教）

十年の思い出

王昊凡

名大社会学研究室には、学部生として三年、大学院生として六年半お世話になりました。振り返ると思い出に尽きないのですが、字数に限りがありますので、「今、最初に思いついた思い出」を書きたいと思います。

「学部生のころ、名大祭に「しゃけんじゃけん」という模擬店を出していました。毎年違う食べ物を出していて、「インド風ナンさんど」を出した年の売上がとてもよかった記憶があります（おそろいの仏頭Tシャツを着て、模擬店に仏頭の貯金箱を並べていました。写真を見返すと迫力がすごいですね）。二〇七のリテラポに集まり、みんなでワイワイガチャガチャしながら出し物について話し合っていました。今思えば、ワイワイガチャガチャしていたからこそ、社会調査実習やゼミのグループ研究のときに活発な議論ができたのでしょうか、卒論提出日に装丁を助け合いながら、同期のみんなで提出できたんじゃないかなと思います。

名大祭といえば、「愛されてはんせいき」という安原先輩（学部二〇〇九卒）発案のスローガンが採用されるなど、何かと縁がありました。今この文章を読んでいる現役の学生がいたら、ぜひ次の名大祭への出店を検討してみてくださいね。

院生時代の思い出といえば、一にも二にもフィールドワークです。博論の調査地である上海は、

わたしの祖父母が若いときに暮らしていたまちでした。まちを歩いていると、ふと祖母の昔話を思い出し、感慨にふけることもありました。また、いろいろな中国人にヒアリングをすること、長年日本で暮らしてきたわたしにとって、「中国と出会いなおす」ことができたのです。何よりも、新しい発見に出くわす毎日が刺激的で、大変さはあっても幸せな日々でした。また、黒田由彦先生から調査のイロハを教わったG・C・O・Eの由布院調査も、忘れられません。

名大社会学研究室を離れ、大学で働きはじめてまだ間もないですが、学生たちが「しゃけん」くらい楽しいキャンパスライフを送り、研究に邁進できるよう、サポートしていきたいと思いません。

（平成二十二年卒、平成二十四年修士修了、平成三十一年博士号取得）

社研という言葉がもつあの空気

吉村真衣

「社研」という単語には、文字では表現しきれないほどさまざまなビジョンや感情がついてまわる。初期の思い出は、文学部での分属前のガイダンスだろうか。某先生が「社会学は何でも研究対象にできる」と過去のユニークな卒論をいくつも紹介なさっていた。その話しぶりに惹かれて社会学の門を叩いたわけだが、「何でも研究対象にできる」の裏に隠された「だからこそ研究能力が問われる」という（今思えば当然の）事実に気づき青ざめたのは、もつとずっと後のことだった。

しんどい、けれど楽しい、けれどしんどい……を繰り返した調査実習とゼミ。調査実習では夜遅くまで議論を続け、頭が回らなくなったところすべてひっくり返され呆然としたことは数知れず。みんなで歩いた大垣や弥富の景色はいつでももありありと浮かんでくる。ゼミのコメントは人生でかつてないほど一言一句に時間をかけ書き進め、発表直前には緊張で硬直ぎみだった。先生方に厳しくも温かい指導をうけ、頼もしい先輩にお世話になり、同級生や後輩と一丸となって調査に取り組んだ。卒論の提出直前には研究室に泊まりこむ人もちらほら。焦燥と疲労、高揚が一緒になった独特の空気は思い返すたび笑ってしまう。缶詰になりすぎて「社研の主」と呼ばれた同級生がいるとかいないとか。上から下の世代まで、個性的な面々に囲まれた刺激に事欠か

ない環境だった。先生方の、ときに笑いを誘う名言の数々は今でも仲間との雑談で顔をのぞかせる。

入学当初、研究はひとりきりで進めるものだと思っていた。自然とみんなが研究室に集まり、雑談とともに調査実習や各々の研究についてあれやこれやと話し合う、そんな空間に入れるとは思ってもよらなかった。少し遠めの過去になってしまったけれど、あの時間が自分のなかのどこかで、今でもひそやかに呼吸をしているように感じる。

（平成二十三年卒、平成二十九年修士修了、博士後期課程在籍）

多くの出会いに恵まれた二年間

浅井南

私は博士前期課程の二年間、名大社会学研究室でお世話になりました。私が在籍していた頃は、院生室に行くといつも必ず先輩が何名かいて、黙々と研究に取り組んでいました。先輩方は自分の研究を進める一方で、他の院生の研究テーマにも関心を持って積極的に議論したり、後輩に様々な助言をしたりと、いつも研究室全体に目を配ってくださいました。学年や所属ゼミにかかわらずお互いを高め合う、風通しのよい雰囲気は、先輩方の研究に取り組む姿勢から生まれていたように思います。そのような環境の中で、充実した院生生活を送ることができたことに、心から感謝しています。

また、中国人留学生の友達ができたことも良い思い出です。私は二〇一二年に名大に入学しましたが、その時の博士前期課程の院生は、ほとんどが中国人留学生でした。毎日中国語が飛び交う環境は、まるで自分の方が留学したようでも新鮮でした。留学生が書いた論文の日本語チェックをしたこと、中国のおみやげをもらったこと、火鍋を作ってもらったことなど、留学生と一緒に過ごした日々は大切な思い出です。

最後に院生生活を支えてくれた「フオノン」のことも書き記しておきたいと思います。フオノンは院生室の下の階にあったカフェで、ユーモアあふれる素敵なカフェでした。特に思い出深い

のは、バレンタイン限定メニューの「義理シヨコラーデ」「通常シヨコラーデ」「本命シヨコラーデ」という三種類の濃さのチョコレートドリンクです。そのアイデアもさることながら、告知ポスターも面白くて、みんな楽しんでいました。また、修論や就活に行き詰まったとき、店長の三原さんが明るく励ましてくださったことも忘れられない思い出です。

今回寄稿するにあたり、いろいろな人の顔が浮かんできました。研究室でさまざまな出会いに恵まれ、刺激を受けたことは私にとって大きな財産です。名大社会学研究室での経験を、これからも社会人生活の中で活かしていきたいと思えます。

（平成二十六年修士修了）

修士二年間の想い出

谷川彩月

博士課程の四年次まで計八年間社会学研究室にお世話になりましたが、「研究室の想い出」といわれると修士課程の二年間が色濃く思い出されます。それにはおそらく二つの理由があつて、ひとつは週二回のゼミに日々追われていたこと、もうひとつは同期の仲間がいたということですが、名大社会学講座では、主指導教員と副指導教員の二名体制で綿密に指導していただけますが、修士時代の私には研究の基礎体力のようなものがまったくなかつたため週二回のゼミがかなり忙しく感じ、毎週のゼミの準備に追われているうちにいつの間にか自分の発表の番がまわつてきてしまい焦つたりしていました。しかし、そうした日々の中で（そうした日々の中だったからこそ？）研究が毎日とても楽しかったことを覚えています。主指導の丸山康司先生、副指導の青木聡子先生にはこの場を借りてお礼申し上げます。また、博士課程在籍時には食料・農業社会学の専門家である立川雅司先生も着任され、よき指導者に恵まれて研究できた巡り合わせにつくづく感謝しております。

ふたつめの「同期の仲間」は、留学生の同期女子との想い出が特に感慨深いです。丸山ゼミで一緒だった陳さんは初めて近しく接する留学生で、私は当時陳さんのことがとても心配でひどく世話を焼きすぎ、調査先の方に「そんなに世話を焼いていたら陳さんが学ぶ機会を奪うことにな

る」と忠告されたこともありました。一方、修士二年の修論の時期には田中ゼミだった夏さんに、「谷川さんまだ買ってないと思つたから製本キット一緒に頼んでおいたよ」と絶妙なフォローを入れてもらい、いたく感動した覚えがあります。みんなで仲良く（だからだと）院生室に残って修論を書いていた日々が本当に懐かしいです。

こうした修士課程を経たのちに博士課程の学生としてもう四年在籍したのですが、博士課程こそあつという間に過ぎ、気がつけば卒業してしまいました。何にしろ、私の研究室の想い出は修士課程の二年間に詰まっております。

（平成二十七年修士修了、平成三十一年博士号取得）

研究することの楽しさとは

長田祥歩

私の社会学研究室生活は、焦りとむなしさから始まったように思う。学部二年生の四月から始まった調査実習で、アンケートやヒアリングのデータをもとに、ともに実習に取り組む仲間達が熱く議論を交わし分析を進める一方で、私は常に疎外感を抱いていた。私は決まりきった「正解」がないと不安になる。何が正解なのかわからず、実習では委縮して発言をためらい、結局最後まで主体的に調査に参加できなかったという実感はなままだった。

どうしたら彼らのように分析し議論することができるのか考える中で気がついたのは、彼らはそういったことが得意であるだけでなく、それ以前に、好きなのだということである。研究室の部屋で、(辛そうにしていることはあっても)嫌々ながら研究に取り組んでいる人を私はほとんど見たことがないように思う。しかし、私は彼らから溢れている、研究する楽しさを見いだすことができずにいた。

私とその「楽しさ」にやっと気づくことができたのは、卒業論文の執筆中だった。実習のように周りの仲間に頼ることができない中で、正解もわからずひたすらに自分が決めたテーマと真剣に向き合う日々が続いた。そしていくつかのことに気がついた。必要なのは正解そのものではなく自分で正解を導き出し創造していく過程であること。当事者も気づいていないような問題の背

景を浮かび上がらせることができるのは、第三者だからこそ、そして社会学だからこそできるのかもかもしれないということ。それから、社会学研究室にいた中で一番楽しいと思える日々だった。私の卒論テーマは、介護者の家族観とそれを取りまくサポートネットワークというものだったが、ヒアリングした介護者の方々の悩みがそれぞれ個人の枠を超え、家族や集団との関係性や時代背景と結びつき徐々に体系化されてきたときの感動は忘れられない。実習のときに、熱く楽しそうに議論を交わしていた彼らにやっと少し近づけたように思った。

今になって、実習の頃に戻り皆と深く議論してみたいと思う。それはもう叶わないが、社会学に対する向上心が溢れる彼らと研究室生活を送ることができたことに感謝し、いつまでも学ぶ姿勢を忘れずにいたい。

(平成三十年卒)

人は個々で動いてはいるが、皆つながっている

王黛茜

私は二〇一五年から研究生として在籍し、二〇一六年に社会学研究室に入りました。二〇一八年に修士を卒業し、引き続き博士課程に入り現在は博士課程二年目です。

この四年間、研究室のいくつかの変化を経験しました。修論下書きの提出制度の開始、田中重好先生の退職、黒田由彦先生の転任、立川雅司先生と福井康貴先生の着任、先輩や同級生の送別、読書会の開始などです。研究室のメンバーも変わり、魂のような存在であった辻さん、谷川さんも卒業されました。

いま振り返ると、研究室では基本的に各自で研究をしていますが、何らかの形でつながっていることを強く感じます。修士一年目は文献セミナーや講義で同級生と合う機会が多く、他の人の研究も聞き、議論などもできました。しかし、二年目に入ると、皆それぞれ現地調査に入り、顔を合わせる機会が少なくなりました。それでも、総合セミナーやその後の懇親会、新入生の歓迎会など全員が揃う場で会うことができました。また、修論完成までの過程において、同級生の寄り添いと励ましは不可欠です。このことは今でも心に深く刻まれています。

加えて、研究室では先輩方の後輩への親切心があります。その親切心は代々継承されています。実際に私が最初に研究生として入ったとき、研究室の先輩である小笠原さんが私のチューターを

してくれました。社会学の勉強と研究のほか、精神面でもいろいろ励ましてくれました。研究を報告した後に、不足点や改善策なども先輩からアドバイスをいただきました。また、三階の部屋では、よく先輩と後輩の研究相談などが見られ、先輩の親切さを感じます。そして、以前チューターを受けた私は、現在チューターをするようになり、時を超えるつながりを実感しました。また、年代を超えて卒業した人びととのつながりも、OB OGとの同窓会、研究会などによって続いています。

さらに、留学生である自分は特別なつながりもあります。それは、研究室には中国の留学生が多く、また中国に関心を持ち、詳しい先生もいるため、両国の相違点を知るきっかけになり、互いの国について理解を深める機会があることです。学生間でも、食事会などの異文化交流を通してより多様なつながりを作り続けています。

このつながりからパワーをいただき、勇気をもって研究の道を歩んでいきます。

(平成三十年修士修了、博士後期課程在籍)

編集後記

十年前に『六十年小史』の作成をさぼったので、今回はぜひ『七十年誌』を作っておかなくては研究室の軌跡が風化してしまうと思ひ、編集担当を買って出た。『三十年小史』『四十年小史』『五十年小史』から主な部分を再録するとともに、必要に応じて他の資料から補った。最近二十年については、もちろん新たに寄稿をお願いした。

原稿を通読して、七十年の歴史が奇跡のように思われた。本田喜代治先生の構想のもと全国のどこにもない新しいタイプの社会学研究室としてスタートしたこと、北川隆吉先生の着任とともに研究室一同で調査に取り組むようになったこと、環境学研究科の発足にもなつて文学部と旧教養部の流れが合同し協力して社会学講座を作り上げてきたこと。途中「大空位時代」などもあつて順風満帆な時期だけではなかつたようだが、私たちはどの時代からも貴重な遺産を受け継いでいると感じる。名古屋大学における社会学の歩みはかくも実り豊かであり、大学改革の荒波に沈没させてはならない。

なお、第四部の卒業生のメッセージの前半は、過去の『小史』から私の独断で選んだものである。他にも捨てがたいエッセイが少なくなかつたが、時代の証言として貴重と思われるものを中心に選んだ。再録にあつて著者に許諾のお願いを送つたが、宛先不明でお返事いただけなかつたものも一部掲載している。御海容いただければ幸いである。

編集にあつては横井桃子助教の緻密な作業に助けていただいた。ありがとうございます。

上村泰裕

名古屋大学社会学研究室七十年誌

二〇一九年十一月四日発行

編集・発行 名古屋大学社会学研究室

四六四・八六〇一 名古屋市千種区不老町

〇五二・七八九・二二一九

socio@social.env.nagoya-u.ac.jp